



TITLE:

現代中国語の動詞構造の研究 - 語
形成と句形成の平行性を中心に(
Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

沈, 力

CITATION:

沈, 力. 現代中国語の動詞構造の研究 - 語形成と句形成の平行性を中心
に. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<https://doi.org/10.11501/3123229>

RIGHT:

許諾条件により本文は2011-04-01に公開

現代中国語の動詞構造の研究

—— 語形成と句形成の平行性を中心に

沈 力

1997年

目次

序章 中国語の特質と構造	1
第1部 句形成と語形成	12
第1章 句形成と語形成(1) — 異なる形成レベル	13
1-0. はじめに	13
1-1. 語彙自律性の仮説	14
1-1-1. 照応の島	14
1-1-2. 並立構造削除規則	15
1-2. 「得／不」の挿入	18
1-3. 形式副詞の挿入	21
1-4. レベルの順序づけ	23
1-4-1. 中国語への適用の試み	25
1-4-2. 中国語への適用の問題点	29
1-5. まとめ	33
第2章 句形成と語形成(2) — 語彙分解規則	34
2-0. はじめに	34
2-1. 語と句の弁別	38
2-2. 合成語の分解(その1)	43
2-3. 合成語の分解(その2)	48
2-4. 合成語の分解(その3)	51
2-4-1. 反復疑問文の構造	51
2-4-2. 同一命題削除規則	56
2-4-3. 再分析	59
2-5. まとめ	65

第3章 句形成と語形成(3) — 基本構造規則	66
3-0. はじめに	66
3-1. 3つのアプローチ	67
3-1-1. 言語類型論によるアプローチ	67
3-1-2. 生成文法によるアプローチ	72
3-1-3. 機能文法によるアプローチ	77
3-2. 意味関係と語順の対応	79
3-2-1. 提案	79
3-2-2. 主要部性(headness)	81
3-2-3. 数量詞の機能と分布	88
3-2-4. 前置詞の機能と分布	97
3-3. 合成語の構造	100
3-4. まとめ	105
第2部 動詞連続構文の構造	107
第4章 動詞連続構文の構造(1) — 結果合成動詞の分析	109
4-0. はじめに	109
4-1. 1項動詞のアスペクト性	113
4-2. 項構造の対立	119
4-3. V^1 と V^2 の相違	125
4-4. 項構造の継承	127
4-5. アスペクト性の継承	136
4-5-1. アスペクト性の対立	136
4-5-2. 結果合成動詞のアスペクト性	137
4-6. 2種類の結果合成動詞	140
4-6-1. 規則の適用順序	143
4-6-2. V^2 の意味指定	145
4-7. まとめ	148

第5章 動詞連続構文の構造(2) — 「V-得」合成動詞の分析	150
5-0. はじめに	150
5-1. 「-得」と「得」	156
5-2. 「-得」の項構造の継承	159
5-3. 「-得」のアスペクト性の継承	163
5-4. 節主語	164
5-4-1. 代名詞の指示	165
5-4-2. ポーズの挿入	166
5-4-3. 副詞の作用域	168
5-5. まとめ	169
第6章 動詞連続構文の構造(3) — 受動・使役構文の分析	170
6-0. はじめに	170
6-1. NP^1 の位置づけ	176
6-1-1. 意味的特徴	177
6-1-1-1. 意味的選択関係	177
6-1-1-2. 入れ替え現象(1)	178
6-1-2. 形式的特徴	181
6-1-2-1. ポーズの挿入	181
6-1-2-2. 「有」の分布	182
6-1-3. 入れ替え現象(2)	185
6-2. VP^1 と VP^2 の関係	188
6-2-1. 機能語と主要部	189
6-2-2. 項構造の継承	193
6-2-3. アスペクト性の継承	194
6-2-3-1. 「让/被」のアスペクト性	194
6-2-3-2. 「让/被」のアスペクト性の継承	197
6-2-4. 反例の検証	200
6-3. 2つの「被」構文	202
6-4. まとめ	207

終章 結論と展望	208
謝辞	217
参考文献	218

序章 中国語の特質と構造

言語学の1つの目標として自然言語の普遍的原理を解明することがあげられる。この目標は自然言語には個別言語としての独特の性質(個別性)と言語一般の普遍的な性質(普遍性)という2つの面があることを前提とする。もし自然言語に個別性だけがあるならば、普遍的原理を求めることはできない。逆に、個別性が全くないならば、普遍的原理を求める必要はない。言語学者が実際に扱っている言語は個別言語であり、個別言語からかけ離れた抽象的な言語ではない。そういう具体的な個別言語の文法体系には普遍的側面と個別的側面があることは言うまでもない。

このような現実において、いくつかの個別言語を比較して、普遍的な原理を求めようとする研究がある。しかし、文法体系が十分に解明されていない言語に、限られた言語から引き出した「普遍的な原理」を適用することは常に危険性を伴う。なぜなら、文法体系が解明されていない言語には「普遍的な原理」を検証する基準がないからである。普遍的原理の認定には各々の個別言語のなかで確立された文法体系による検証が必要である。すなわち、個別言語の自律性を崩すようなものは真の普遍的原理ではない。したがって、個別言語独自の文法体系をより正確に記述することが先決である。

生成文法において、欧米の諸言語をもとに作られたそれぞれの理論はそれらの言語の特徴をとらえているかもしれないが、それらの理論を安易に他の言語に一般化するのは危険である。というのは、言語間には多くの特異性が見られるからである。たとえば、中国語の語順のメカニズムを解明するのに、いわゆる「格理論(Case theory)」を普遍的な原理として取り入れる研究があるが、その結果、中国語の語順に関する一部の事実を見捨てざるをえないということもある(第1部第3章を参照)。筆者は、言語学の一般化を求めること自体を否定しているのではなく、一般化を行う際、個々の言語の文法体系が十分にとらえられているかどうかをまず明らかにしなければならないと考えている。問題の言語の性質がとらえられていない段階で、別の言語から引き出された原理を軽率に適用すると、問題の言語の性質が不明瞭なものになるからである。本論文の研究対象は中国語であるが、そこから安易に普遍的原理を求めるのではなく、中国語内部の自律的文法体系を確立することに重点を置きたい。

中国語の文法構造を記述する際に、まず直面するのは、中国語の文法単位がどのような性質を持っているのかという問題である。これは中国語の文法体系を解明する際の、基本的な問題である。

周知のとおり、自然言語にはいくつかの側面がある。例えば、音声・音韻的側面、形態的側面、統語的側面、意味的側面などがそうである。また、多くの言語の句、語、形態素という文法単位には、それらの側面を反映するような、音韻的特徴、形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴が見られる。例えば、日本語の場合、修飾部を伴う句には一般に2つ以上のアクセントのまとまりがあるが、語には1つだけである。また、形態論的に言えば、語は自由形態であるが、接辞は拘束形態である(Bloomfield1933、Chao1968などを参照)。統語論から言えば、句は文法構造で最大の単位であるが¹⁾、語はそれを形成する最小の単位であり、形態素はまた語を形成する最小の単位である。さらに、意味的に言えば、句には意味的構成性(semantic compositionality)が見られるが、語にはその程度が低い。

以上の各々の特徴の間には、必ずしも1:1の対応関係があるとは限らない。例えば、ある特徴によれば語と考えられるものが、ほかの特徴から見れば句であるというようなことはよく見られる。次の日本語の例を見られたい。

- (0-1) a. Kyootoda¹igaku
b. Kyo¹otokyooikuda¹igaku
c. Kyo¹otono kyooikuda¹igaku

アクセントのまとまりの数から見れば、(0-1a)のアクセントのまとまりは1つであり、(0-1b)と(0-1c)のアクセントのまとまりは2つである。音韻的特徴に基づいて定義すれば、(0-1a)は語であり、(0-1b)と(0-1c)は句であるということになる。しかし、統語上の照応関係の観点から見れば、(0-2a)と(0-2b)は語であり、(0-2c)は句である。

- (0-2) a. *息子は学生時代、Kyooto¹idaigakuで勉強し、そこ¹で就職した。
b. *息子は学生時代、Kyooto¹kyooikudaigakuで勉強し、そこ¹で就職した。

¹⁾ 本論文では、文を独立した単位として見ず、句の一種であると考えている。

- c. 息子は学生時代、Kyooto¹ no kyooikudaigakuで勉強し、そこ¹で就職した。

(0-2a)と(0-2b)では、先行詞「そこ」は文法構造における語の内部の要素「Kyooto」と照応関係をなさないが、(0-2c)では、文法構造における句の内部の要素Kyootoと照応関係をなす。それは、語を構成する要素が語の外部の形式と照応関係をなさないからであると考えられる。したがって、単位の認定において、音韻的特徴に基づく定義と統語的特徴に基づく定義の間に不一致が見られる。

このような不一致は、句、語、形態素の認定に大きな困難をもたらしている。それゆえ、語の定義が不可能であるという悲観的な主張も現れている(影山1982、1993を参照)。確かに、言語にはさまざまな側面があり、多くの言語の文法単位にはそれらの側面が反映されていることは否定できない。われわれが(統語構造を中心とする)文法構造という側面を研究する際、文法機能に基づいて、句、語、形態素を定義する一方、ほかの特徴も付随的な役割を果たすと考えるのは自然なことであろう。しかし、中国語のような孤立的な言語においては、句、語、形態素の音韻的特徴と形態的特徴は顕著ではないのである。例えば、アクセントのまとまりも見られなければ、拘束形態や自由形態の違いも明瞭ではない。したがって、中国語の句、語、形態素は音韻的特徴と形態的特徴によって定義することは困難である(潘他1993を参照)²⁾。本論文では、中国語の自律的文法構造を解明することを目指しているので、中国語の句、語、形態素は、あくまで文法機能に基づいて定義すべきであるとする。具体的には、(0-3)に示した至極一般的に受け入れられている定義に基づいている。

- (0-3) a. 句とは統語構造における最大の単位である。
b. 語とは句を形成する最小の単位である。
c. 形態素とは語を形成する最小の単位である³⁾。

²⁾ 中国語の句、語、形態素を、それらの意味的な特徴に基づいて定義することも考えられるが、意味的な特徴というものには厳密性が欠けるので、句、語、形態素を定義する際に、主観的判断が入りやすいと思われる。

³⁾ 形態素には語根、語幹、各種の接辞が含まれている。

次に、(0-3)の定義を踏まえて、中国語の文法単位は基本的にどのような性質を持っているのかを見よう。

中国語の文法構造における基本的な要素は形態素であると考えられる。その理由は、(0-4)に示すように、ほとんどの形態素がそのまま語として振る舞うことができるからである。

(0-4) 1 形態素 → 1 語

(0-4)の「→」は、1 形態素が1 語に対応するが、逆は成立しないということを意味する。ここに、この両者の関係の妥当性は次の2つの理由で支持される。

第1に、『現代汉语词典』、『中日大辞典』を調べれば分かるように、現代中国語には大量の合成語がある⁴⁾。この事実は中国語では1 語が必ずしも1 形態素ではないことを意味する。

第2に、合成語はまた、2つの語に分解されることがよく見られる。

(0-5) a. 花朵 (huāduǒ)

量詞

花

b. 插花戴朵 (chā huā dài duǒ)

花

花

花をつけたり飾ったりする。

(0-5a)の「花朵」は明らかに語である。現代中国語の名詞構造は、句なら「量詞＋名詞」の語順で、語なら「名詞＋量詞」の語順である⁵⁾。一方、「花朵」は2つの形態素からなるので、(0-5b)のように、それぞれ独立した語に再分析されることがある。そこでは、

⁴⁾ 中国語では、接辞と語の間に形態的に明確な違いがないので、派生語と複合語の形態的な違いもはっきりしない。本論文では、派生語と複合語をまとめて合成語と呼ぶ。

⁵⁾ 張(1989)は「名詞＋量詞」の語順が古代漢語の語順を反映していると主張している。

「花」は「插」の補部であり、「朵」は「戴」の補部である。以上の現象は(0-4)の「1 形態素 → 1 語」の対応関係が妥当であることを支持する。

(0-4)と関連する、中国語の文法単位のもう1つの特質は、

(0-6) すべての語には「形態マーカ」がない。

ということである。屈折的言語や膠着的言語において文法的機能を持つ接辞や語尾が語幹に付加されたり、形態が変化したりするような現象は中国語では起こらない。中国語のどの語にも特定の文法範疇、例えば、品詞性を示す形態的手法が見られない。具体的には、日本語の動詞や形容詞の基本形は、-u, -ruまたは-iという接辞がつくということで、名詞と区別されるが、中国語では、名詞と動詞・形容詞の間の形態的差異がない。以下、(0-7)は日本語の例であり、(0-8)は中国語の対応例である⁶⁾。

	N		V		A
(0-7) a.	sakana	o	tur-u		
b.	tabako	o	yame-ru		
c.	kao	ga			aka-i
d.	otya	ga			atu-i
(0-8) a.	yū		diào		
b.	yān		jī		
c.	liǎn				hóng
d.	chá				rè

しかしながら、日本語と中国語の上の相違は形態上の相違だけであり、中国語の語も典型

⁶⁾ 中国語では、動詞と形容詞に明確な区別はない。極端に言えば、形容詞は状態動詞の一種であると言える。(0-8)で動詞と形容詞を区別するのは日本語の例にあわせるためである。

的にはどれかの文法範疇に属している。例えば、日本語でも中国語でも、名詞的要素は(0-9)と(0-10)に示すように、連体修飾語によって修飾され得るが、動詞的要素は修飾できない。

- (0-9) a. [NP boku no sakana] *[boku no tur-u]
 b. [NP boku no tabako] *[boku no yame-ru]
 c. [NP boku no kao] *[boku no aka-i]
 d. [NP boku no otya] *[boku no atu-i]

- (0-10) a. [NP wô de yû] *[wô de diào]
 b. [NP wô de yân] *[wô de jì]
 c. [NP wô de liân] *[wô de hóng]
 d. [NP wô de chá] *[wô de rè]

また、(0-11)と(0-12)に示されるように、動詞的要素は連用修飾語によって修飾され得るが、名詞的要素は修飾できないことも両言語において共通である。

- (0-11) a. *[sugu sakana] [vP sugu tur-u]
 b. *[sugu tabako] [vP sugu yame-ru]
 c. *[totemo kao] [vP totemo aka-i]
 d. *[totemo otya] [vP totemo atu-i]

- (0-12) a. *[màshàng yû] [vP màshàng diào]
 b. *[màshàng yân] [vP màshàng jì]
 c. *[hèn liân] [vP hèn hóng]
 d. *[hèn chá] [vP hèn rè]

(0-9)と(0-10)または(0-11)と(0-12)の文法上の平行性は、中国語でも日本語でも、形態マーカーがあるか否かには差があるが、語の品詞性には共通点があることを示している。形態表示の特徴について、朱(1986)は、制服と私服の違いに喩えている。制服は職業を示

すものである。学生は学生服を着用するが、軍人は軍服を着用する。しかし、各々の職業につくのは人間であり、服装ではない。すなわち、軍人は必ずしも軍服を着なくてもよいということである。日本語のような言語では語の機能を示すマーカーがあるという意味で特別な制服を着ているが、中国語のような言語ではそのようなマーカーがないので、どんな服を着ているかは問題にならないのである。

以上、中国語の文法構造を構成する単位は(0-3)のように定義されるべきであること、また、中国語においてそれらの単位には(0-4)と(0-6)の特徴があることを見た。次に、中国語における(0-4)と(0-6)の特徴は中国語の文法体系にどのように反映されているかを見てみよう。

言語には構造がある。言語構造はまた各々の単位によって組み立てられたものであり、すべての言語単位はばらばらに形成されたものではない。この認識はSaussure(1916)、Sapir(1921)、Bloomfield(1933)以来、広く認められている。形態的要素の発達した言語にはこの認識が一般的であるが、形態的要素の発達しない中国語にも同じことが言えると思われる。ただ、中国語の語には構造があるかどうかという問題について2つの意見がある。1つは、中国語の語は1形態素であり、1形態素からなる語には構造がないという見方である(Bloomfield 1933、亀井他1996:911を参照)。もう1つは、中国語の語には1形態素からなるものもあるが、「学习、研究、语言」といった合成語が多く、合成語には構造があるという見方である(陸他1964、Chao 1968を参照)。本論文は後者の立場に立つ。もし中国語のすべての語が1形態素からなるものであれば、中国語にはネイティブスピーカーが覚えきれないほどの莫大の量の単純語(相互に派生関係のない語)が存在し、中国語は自然言語にはありえないような非経済的な言語になってしまうであろう。実際、中国語はそのような言語ではなく、単純語より合成語(派生語を含む)のほうが遥かに多い。したがって、中国語の語にもほかの言語と同様に、構造があると考えられる。

一方、中国語の文法構造には孤立的言語としての独自の特徴も見られる。それは(0-13)に示される特徴である。

- (0-13) a. 語形成と句形成はそれぞれ同じ基本的形成規則に従う。
 b. 動詞連続は、語順と並ぶもっとも重要な文法手段である。

(0-13a)は文法構造における(0-4)と(0-6)の特徴の現れである。まず、1形態素が1語に対応するという(0-4)の特徴は、同じ形式が語形成の面で形態素として機能し、句形成の面で語として機能するというを示唆する。形態素でも語でもあるような要素は多くの言語に見られることであるが、中国語では、ほとんどの形態素が語になりうるということが重要である。また、語に形態マーカーがないという(0-6)の特徴は、語形成には句形成と異なる独特の形態変化がないことを意味する。言ってみれば、語形成も句形成も実質的に同じ形式の組み合わせにすぎないのである。もし中国語の基本的文法規則が同じ形式の組み立て規則であると考えれば、その規則が語形成にも句形成にも適用されるのは自然なことである。

(0-13b)は文法構造における(0-6)の特徴の現れである。周知のように、英語や日本語では、語順で示される文法範疇がごく限られているので、格、態、アスペクトなどの文法範疇は接辞添加や屈折によって示されている。ところが、中国語では、(0-6)のように、語に形態マーカーがないことから、文法範疇を示すために、日本語や英語のような手段は利用できない。しかし、中国語は自然言語である以上、英語や日本語のような文法範疇の意味するもの、例えば、場所、道具、受身、使役、起動、完了などを示さなければならないので、動詞(句)と動詞(句)の連続を利用せざるをえない。というのは、これは中国語に残された、生産性のある唯一の文法手段だからである。したがって、動詞連続構文(serial verb construction)は中国語のもっとも基本的な構文であり、その構文の構造が解明できるかどうかは、中国語の文法構造全体がとらえられるかどうかの試金石になると言える^{*)}。

本論文は、(0-4)と(0-6)によって示された、中国語の文法上の基本単位の特徴に基づいて、まず第1部では、語形成と句形成の間には(0-13a)の関係があることを論じる。さらに、第2部では、従来、規則でとらえられなかった、中国語の動詞連続構文も(0-13a)の立場から分析することができることを示す。

第1章では、中国語の文法構造では、語形成と句形成をそれぞれ語彙レベルと統語レベルで処理すべきであることを示す。この点では、中国語は日本語や英語となんら変わりが

^{*)} (0-13)の特徴は中国語だけではなく、おそらく、形態的要素の発達しない言語全般に当てはまるのかもしれない。

ない。この主張は従来、多くの研究者に認められているが、真っ正面から論ずる研究は少ない。というのは、中国語には、活用などの形態的な特徴がないので、レベルを決めるのが困難だからであろう。この章では、統語レベルでしか働かない照応関係および並立構造削除規則があることや、語彙レベルでしか生起しない「得／不」の挿入や、1語で句の機能を果たすことが禁じられることなどの現象を挙げることによって、この主張の妥当性を支持する。また、中国語の語彙レベルでは、英語のように更にレベルを分ける根拠がないことを示す。

第2章では、語彙レベルで作られた合成語は、統語レベルで絶対の最小単位として機能するのではなく、2つの単位に再分析されることが可能であることを示す。この章では、中国語の統語レベルに語彙分解規則という再分析規則があることを提案する。この規則は、さまざまな意味関係を持つ合成語に適用される。また、反復疑問文の統語レベルの「同一命題削除規則」の、合成語内部への適用もこの語彙分解規則で説明できることを示す。

第3章では、中国語の文法構造を決める基本的な規則は何か、その規則は句形成にも語形成にも働くかどうかについて議論する。その結果として、中国語の基本的構造を形成する規則が純粋な形式的規則でもなければ、純粋な意味的規則でもなく、要素間の意味関係と位置関係との対応規則(以下基本構造規則と呼ぶ)であることを提案する。すなわち、主要部(head)を中心に、主要部との意味関係によって非主要部(non-head)の位置が決まるということである。さらに、その基本構造規則は句形成だけではなく、語形成にも働くことを論じる。この第1部の議論から、語形成と句形成が2つのレベルで行われるということは、おそらく普遍的な現象(数多くの言語に見られる現象)であるが、統語レベルにおける語彙分解規則と、2つのレベルにおいて同じ基本構造規則が働くことは中国語の(0-4)、(0-6)に示された特徴の必然な帰結であるということができる。

また、第3章で提案した基本構造規則は中国語の基本構文である動詞連続構文にも当てはまる。動詞連続構文は、2つ以上の動詞または動詞句が英語のandのような等位接続詞

の介入なしに並ぶ形式である^{*)}。中国語には、(0-14a)のように、語彙レベルの連続と、(0-14b)のように、統語レベルの連続がある。以下、(0-14a)を動詞連続と呼び、(0-14b)を動詞句連続と呼ぶ。第2部の3つの章では、どちらのレベルの連続も同じ基本構造規則で形成されることを観察する。

- (0-14) a. V^1-V^2
b. VP^1-VP^2

動詞連続構文の中で最も構造がわかりにくいのは、結果合成動詞と言われる(0-14a)の動詞連続である。従来、多くの研究(Chao1968、Li Y.-F. 1990、Cheng and Huang1994などを参照)では、それらは主要部頭位の構造であると分析されている。一方、李(1984)以来、結果合成動詞は主要部末位の構造を持つと主張する研究が現れてきたが、説得力のある議論ではなかった。第4章では、いくつかの根拠を示し、結果合成動詞はやはり主要部末位の構造を持つことを提案する。第5章では、第4章の続きで、従来十分に分析できなかった「V-得」構文も、「V-得」が結果合成動詞の1種であり、主要部末位の構造を持つと考えることによって説明できることを指摘する。

さらに、(0-14b)の動詞句連続に関わっている現象はいわゆる使役文(「让」構文)と受動文(「被」構文)及びその類の構文である。第6章ではこの問題を議論する。従来、この2つの構文に対する分析は大ざっぱに言えば、2つの考え方がある。1つは、中国語の使役文と受動文には主要部となる動詞があるが、動詞句連続の構造ではないと主張する研究(Hashimoto1971を参照)であり、もう1つは、中国語の使役文と受動文の述部は動詞句連続であるが、主要部となる動詞句がないと主張する研究(朱1982を参照)である。この章では、中国語の使役文や受動文の述部は動詞句連続であり、同時に主要部頭位の構造を持つ

^{*)} このような構文は、中国語だけではなく、ベトナム語やタイ語、そして、アフリカ諸言語にも幅広く存在し、孤立性が顕著な言語ほど、その構文のパターンが豊富なようである。本論文の第2部ではそれぞれ異なる側面から中国語の動詞連続構文を扱うが、本分析の結果が孤立的な言語全体に適用できることを期待する。詳しくはMikami(1979)、清水(1988)を参照されたい。

ことを提案する。

終章では、中国語の述部に見られる、(0-13)の性質は中国語の他の構造(例えば名詞(句)構造)にもある可能性を示し、本研究の理論言語学における位置づけを示す。

第1部 句形成と語形成

第1章 句形成と語形成(1) — 異なる形成レベル

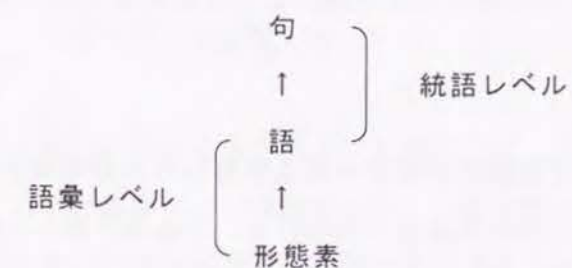
1-0. はじめに

序章では、中国語の文法構造を構成する単位は、文法機能に基づいて定義すべきであることを主張したうえで、中国語における句、語、形態素を次のように定義した。

- (1-1) a. 句とは統語レベルの最大の単位である。
b. 語とは句を形成する最小の単位である。
c. 形態素とは語を形成する最小の単位である。

(1-1)の定義は、言語単位の派生は無秩序ではなく、形態素→語→句という派生順序があることを意味する。すなわち、語は句形成以前のレベルで形成され、句は語形成以後のレベルで形成されるということである。この枠組みは(1-2)のように図示される。↑は派生の方向を示す。

(1-2)



ここで、中国語には(1-2)の枠組みの妥当性を支持する現象があるかどうかの問題である。本章では、従来の研究の成果を踏まえて、様々な言語データを示すことによって、(1-2)の枠組みが妥当であると主張する。

この章では、(1-2)の枠組みの妥当性を次の4つの節にわけて議論する。第1節では、統語レベルにしか存在しない意味的照応関係が見られることと並立構造削除規則という句形成規則が語に適用されないことを示し、第2節では、中国語には語彙レベルにしか見ら

れない語形成法があることを示す。続いて、第3節では、中国語の述部では1語で句の機能を果たすことが禁じられることを観察する。この現象も語の文法機能と句の文法機能の間に差があることを示している。第4節では、中国語に語彙レベルと統語レベルの違いがあるものの、語彙レベルには英語のような、更なるレベル分けが見られないことを議論する。

1-1. 語彙自律性の仮説

2つの形式が統語レベルで組み合わせられる場合、当然統語レベルの様々な操作を受けるが、語彙レベルで組み合わせられた場合、統語レベルのいかなる操作も受けないという現象が見られる。これはLapointe(1981)では「語彙自律性の仮説(Lexical Integrity Hypothesis)」として捉えられる。「語彙自律性の仮説」はまた、Huang(1983)、影山・柴谷(1989)によって支持されているもので、次のように示される¹⁾。

(1-3) LIH

No phrase-level rule may affect a proper subpart of a word.

これはもともと英語で観察された仮説であるが、Huangは中国語にも適用できると指摘している。(1-3)の仮説が妥当であることは次の2つの現象によって支持されている。

1-1-1. 照応の島

まず、語彙レベルで形成されたすべての語の内部は一般に統語レベルの規則を受けないということが挙げられる。よく知られている現象は「照応の島」である。影山・柴谷(1989)は日本語に関して次の例を挙げている。

(1-4) *皿、洗いをしているときに、その一枚を割ってしまった。

すなわち、語彙レベルで形成された語が「照応の島」となっており、外側の要素と照応関

係(anaphoric relation)が成り立たないということである。中国語の語にも「照応の島」現象が見られる。たとえば、

(1-5) a. 我 从 天津 的 一所 大学 调到了 那里 的 一个 研究所。
から の 数量詞 転動する

私は天津のある大学から、そこ(=天津)の一つの研究所に転動した。

b. *我 从 天津 大学 调到了 那里 的 一个 研究所。

私は天津大学から、そこ(=天津)の一つの研究所に転動した。

(1-5a)では、「天津的一所大学」は統語レベルで形成された句なので、その中の一部「天津」は当該句の外側の指示詞と照応関係をなすが、(1-5b)では、「天津大学」が語彙レベルで形成された語なので、その語彙内部の1要素「天津」は統語レベルでいかなる指示詞とも照応関係をなさない。つまり、(1-5b)の「那里」の指示物が「天津大学」ではなく、「天津」であるようには読みとれない。Huang(1983)では、また次の例が挙げられている。

(1-6) a. 一块 绿色的 黑板。

一つの緑色の黑板

b. *一块 绿色的 黑的 板子。

一つの緑色の、黒い板

「緑」と「黒」が異なる色であるにも関わらず、(1-6a)が文法的であるのは、「黑板」が語彙レベルで形成された合成語であり、「緑色的」と組み合わせられる際、「黑板」内部の「黒」が外側のいかなる要素と意味的な関係をなさないからである。また、(1-6b)が非文法的であるのは、「黒的板子」が統語レベルで形成された句であり、「緑色的」と組み合わせられる際、句内部の「黒的」と外側の要素「緑色的」との間に意味的矛盾が生じるからである。

1-1-2. 並立構造削除規則

照応関係と関連するもう1つの現象は、「並立構造削除規則」という純粋な句形成規則が語には適用できないということである。Ross(1967)は、英語の句構造において並立構造

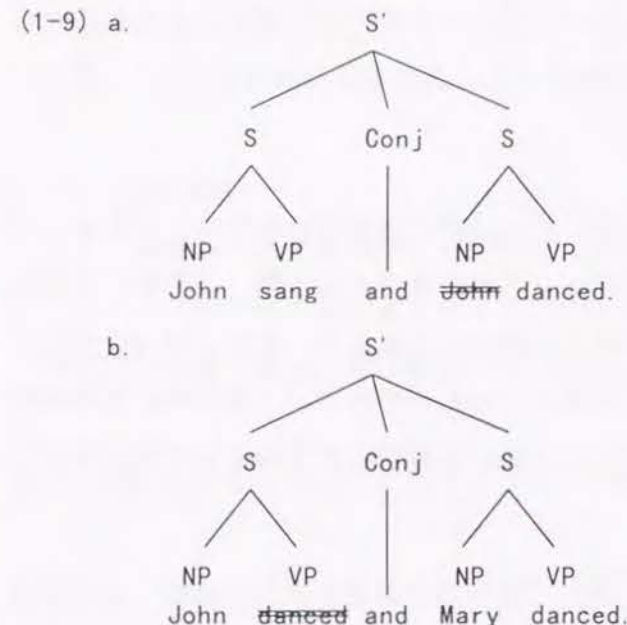
¹⁾ (1-3)のLIHはHuang(1983)から引用。

削除規則があることを提案している。Rossによれば、もし同一の句が統語構造の中で左へ枝分かれすれば、削除は(1-7b)のように順方向でなければならない。もし右へ枝分かれすれば、削除は(1-8b)のように逆方向でなければならない。

- (1-7) a. John sang and John danced.
b. John sang and danced.
c. *Sang and John danced.

- (1-8) a. John danced and Mary danced.
b. John and Mary danced.
c. *John danced and Mary.

(1-7a)の構造(1-9a)では、同一指示句のJohnが左へ枝分かれするので、後ろのJohnが削除されなければならない。 (1-8a)の構造(1-9b)では、同一動詞句のdancedが右へ枝分かれするので、前のdancedが削除されなければならない。



Huang (1988b) では、Rossのこの規則が中国語にも適用できると指摘している。

- (1-10) 张三 唱歌, 张三 跳舞。

張三が歌を歌い、張三がダンスをする。

- a. 张三 唱歌, 跳舞。
b. *唱歌, 张三 跳舞。

- (1-11) 张三 唱歌, 李四 (也) 唱歌。

張三が歌を歌い、李四も歌を歌う。

- a. 张三, 李四 (都) 唱歌。
b. *张三 唱歌, 李四 (也)。

名詞句においても同じことが言える。つまり、2つの並立構造の名詞句では、それぞれの前項要素が同一指示の要素である場合、後ろの名詞句の要素が削除される。

- (1-12) 我的爸爸 和 我的妈妈

私の父と私の母

- a. 我的爸爸 和 ϕ 妈妈
b. * ϕ 爸爸 和 我的 妈妈

逆に、それぞれの後項要素が同一指示の要素である場合、前の名詞句の要素が削除される。

- (1-13) 上山的时候 和 下山的时候

山に登る時と山を下る時

- a. 上山 ϕ 和 下山的时候
b. *上山的时候 和 下山 ϕ

ところが、合成語では、Rossの並立構造削除規則の適用条件が満たされるかどうかと関わりなく、削除はできない。たとえば、(1-14)はNew ZealandとNew Delhiの訳語であるが、それは原語に因んで2つの形態素に分けて、「新しいジーランド」と「新しいデリー」のように訳されている。しかし、「*新的西兰、*新的德里」とは言えないことから、「新西

「新、新德里」は語であることに間違いない。(1-15)の「松树、柳树」もそれぞれ2つの形態素で形成された合成語である。(1-14)と(1-15)はいかなる条件でも並立構造削除が起こらないという意味で(1-12)や(1-13)と好対照をなす。

(1-14) 新西兰 和 新德里

ニュージーランドとニューデリー

a. *新西兰 和 φ德里

b. *φ西兰 和 新德里

(1-15) 松树 和 柳树

松と柳

a. *松φ 和 柳树

b. *松树 和 柳φ

(1-14a)と(1-15a)が明らかに並立構造削除規則を遵守しているにもかかわらず、やはり非文法的である。なぜなら、並立構造削除規則が句形成の規則であり、「新西兰、新德里」や「松树、柳树」といった語には適用できないからである。うえのように、中国語にも語彙自律性がみられることから、中国語の語形成と句形成の間にはレベルの差があると言わざるをえない。

1-2. 「得／不」の挿入

語形成と句形成の間にレベルの差があることを示す根拠として、1-1節とは逆に、中国語には語形成に見られるが、句形成には見られない、「得／不」の挿入という現象がある。

中国語には、移動を示す動詞には「来(来る)」と「去(行く)」があるが、この2つの動詞はほかの動詞に後続し、その動詞の方向を示すことができる。さらに、この2つの語は語形成にも句形成にも関わるものである。次の例を見てみよう。

(1-16) a. [vp[v寄来]1封信]

送る 量詞 手紙

1通の手紙を送ってきた。

b. [vp[v寄1封信]来]

同上。

(1-17) a. [vp[v拿去]1本书]

持つ 量詞 本

1冊の本を持っていった。

b. [vp[v拿1本书]去]

同上。

「寄+来」と「拿+去」は、(1-16a)と(1-17a)でそれぞれ動詞句の主要部(=語)の位置を占めているので、語であると考えられる。他方、(1-16b)の「寄1封信+来」と(1-17b)の「拿1本书+去」は句である。

ここで議論したいのは、中国語には語形成の場合にしか現れない要素、「得／不」があるということである。「得」は可能を示し、「不」は不可能を示す。この「得／不」は合成語には挿入できるが、句には挿入できないという性質を持っている²。次の例を見てみよう。

(1-18) a. [vp[v寄得来]1封信]

1通の手紙を送ってくることができる。

b. *[vp[v寄1封信]得来]

(1-19) a. [vp[v寄不来]1封信]

1通の手紙を送ってくることができない。

b. *[vp[v寄1封信]不来]

(1-20) a. [vp[v拿得去]1本书]

1冊の本を持っていくことができる。

b. *[vp[v拿1本书]得去]

² Chao(1968)にこれと似たような記述がある。

(1-21) a. [vp[v拿不去]1 本书]

1冊の本を持っていくことができない。

b. *[vp[v拿1 本书]不去]

(1-18)～(1-21)の(a)は文法的であるが、(b)は非文法的である。その理由は、(a)では「得／不」が語中に挿入されているが、(b)では「得／不」が句中に挿入されているということである。このことは、中国語では語形成と句形成の間にレベルの違いがあることを意味する。しかし、(1-18)～(1-21)の(b)が非文法的であるのは、レベルの問題ではなく、むしろ「得／不」が名詞に後続できないからだと思われるかもしれないが、実際、そうではない。たとえば、

(1-22) a. [vp[v跑上]来]了

走って登ってきた。

b. [vp[v跑上]楼]来]了

走ってこの階に登ってきた。

(1-22b)のように「跑上」と「来」の間に補部が挿入できることから、(1-22a)の「跑上」と「来」は句の関係であることがわかる。この場合でも「得／不」が(1-23)と(1-24)に示すように、「跑上」に挿入できるが、「跑上+来」という句に挿入できない。

(1-23) a. [vp[v跑得上]来]

走って登ってくることができる。

b. [vp[v跑不上]来]

走って登ってくることができない。

(1-24) a. *[vp[v跑上]得来]

b. *[vp[v跑上]不来]

つまり、何が「得／不」に先行しようが、「得／不」は句の間には決して挿入されないこ

とは明らかである。

以上見たように、中国語に、語形成にしか生起しない「得／不」の挿入という現象があることは、語形成と句形成の間にレベルの差があることを支持する。

1-3. 形式副詞の挿入

中国語ではまた、1語で述部という句範疇を担うことが好ましくないという現象が観察される。特に、状態動詞文(いわゆる形容詞文)において顕著である。以下の例から分かるように、述部はもっぱら2つ以上の語から成り立っている。

(1-25) a. ?张三穿的衣服 脏。

汚い

张三の着ている服は汚い。

b. 张三穿的衣服 脏 吗?

文末助詞

张三の着ている服は汚いか。

c. 张三穿的衣服 不脏。

张三の着ている服は汚くない。

(1-25)では、述部の主要部が同じ動詞「脏」なのに、肯定文が不適格で、疑問文と否定文が適格であるのは、述部内の語数の違いによると思われる。これは単音節を2音節化するプロセスではない。というのは、2音節の語も述部の機能を担いにくいからである。

(1-26) a. ?张三 幽默。

張三是ユーモラスだ。

b. 张三 幽默 吗?

張三是ユーモラスか。

c. 张三 不 幽默。

張三是ユーモラスではない。

(1-25a)や(1-26a)のような1語述部を避けるために、形式副詞「很」が用意されている。

形式副詞とは、動詞修飾の機能を持っているが、語彙的意味がない(dummy)ものを指す。

(1-27) 张三穿的衣服 很 脏。

- a. →张三のきている服は汚れている。
- b. ?→张三のきている服はとても汚れている。

(1-28) 张三 很 幽默。

- a. →张三はユーモラスだ。
- b. ?→张三はとてもユーモラスだ。

(1-27)と(1-28)の「很」は、強く読まれる場合だけ、「とても」の意味にとれるが、そうではない場合、基本的に「とても」の意味にとれない。この場合の(1-27)と(1-28)は(1-25a)や(1-26a)が表わそうとしている意味を持つ。形式副詞としての「很」は1語が1句を担うことを防ぐために使われるものであることは、2語が1句を担う場合、生起できないことから伺える。たとえば、疑問文や否定文になると、ダミーの「很」は生起できない。

(1-29) a. 张三穿的衣服 很 脏 吗?

- *→张三のきている服は汚いか。
- 张三のきている服はとても汚いか。
- b. 张三穿的衣服 不 很 脏。
- *→张三のきている服は汚くない。
- 张三のきている服はそんなに汚くない。

(1-30) a. 张三 很 幽默 吗?

- *→张三はユーモラスか。
- 张三はとてもユーモラスか。
- b. 张三 不 很 幽默。
- *→张三はユーモラスではない。
- 张三はそんなにユーモラスではない。

これは、疑問文と否定文の述部が2つの語で担われ、形式副詞の「很」が必要ではないと考えられるからである。

一方、意志、命令、判断など、話者の何らかの語気(mood)を示す場合、1語で述部を担うことができることも観察される。

(1-31) a. 我 来!

僕が来る。

b. 你 来!

君が来い。

c. 他 来。

彼が来る。

(1-31a)の文は意志を示す構文であり、(1-31b)の文は命令を示す構文である。(1-31c)は「誰が来るの?」という質問に対しての答えである。このように、意志、命令、判断などの語気を示す構文では、1語が述部を担うことができる。これは、意志、命令、判断などの語気を示す要素がゼロとしてあり、そのようなモダリティ要素が一般に句以上のレベルに現れるからだと考えられる。

いずれにせよ、意志、命令、判断などの語気を示す構文にだけ、1語が述部を担う現象が見られるが、それ以外の構文にはその現象が見られないということから、中国語では1語で1句を担うことが一般に禁じられると考えられる²⁾。この現象は、語と句が異なるレベルの単位なので、句の機能が語に取って代わることが禁じられることを示していると思われる。

1-4. レベルの順序づけ

言語理論においては、語彙構造に対して決まった順序で規則を適用するという見解が見られる。言語習得の観点からすれば、子どもはどのように規則の適用順序を覚えるのかと

²⁾ ただし、名詞句の場合を除く。

いう問題がある。Siegel(1974)では、その解決法として、文法をブロックに分けて、ブロック間の順序づけを行うことを提案している。もしブロックの順序づけを裏づける根拠があれば、学習可能性(learnability)の問題も解決できる。一般に、これはレベル順序づけ仮説(Level Ordering Hypothesis)と呼ばれている。Siegelは英語の接辞の音韻的、形態的な振る舞いを分析し、クラス1(+でマークされる)とクラス2(#でマークされる)の2つのブロックに分けている。

- (1-32) a. クラス1 (suf.) : +ion, +ity, +y, +al…
 (pref.) : re+, cont+, de+, sub+…
 b. クラス2 (suf.) : #ness, #less, #hood, #ful…
 (pref.) : un#, non#, anti#, semi#…

クラス1とクラス2の間に、強勢(アクセント)の移動の有無という音韻的な違いが見られる他に、形態的な違いも見られる。第1に、2つの接辞が1つの語内に存在する場合、クラス2よりクラス1のほうが語根に近いところに現れる。第2に、クラス1は語幹につくが、クラス2は語につく。彼女の結論は、2種類の接辞は別々に生じたものであるということである。Allen(1978)はその見方を受け継ぎ、複合語がさらにクラス2の後に生じ、屈折接辞は複合語の後に生起すると仮定し、それを拡大レベル順序づけ仮説(Extended Level Ordering Hypothesis)と呼んでいる。

- (1-33) a. クラス1 (+affixation)
 b. クラス2 (#affixation)
 c. クラス3 (compounding)
 d. クラス4 (regular inflection)

Siegelたちの貢献は語形成の段階でレベルを設定することが必要であることを示したところとあり、その考え方は現在広く認められている。しかし、すべての言語の形態論にレベルの順序づけが見られるわけではない。Siegelたちの分析は接辞が豊富な英語には適用できるが、接辞的要素が僅かな中国語には適用できないであろう。

1-4-1. 中国語への適用の試み

ところが、中国語の語形成のレベルの順序づけに関する新しい理論的な研究がある。それは、Packard(1990)のレベル順序づけ仮説である。Packardは英語の(1-33)の4分類を参考にして、中国語にも4つのレベルがあると主張している。その基準として、(1-34)の規則と(1-35)の原理の適用可能性が問題となると提案している。

(1-34) Canonical Head Rule (Mandarin)

In a word-internal configuration:
 for all $[[X][Y]]_V$, X is the head of V.
 for all $[[X][Y]]_{SV}$, X is the head of SV(stative verb)
 for all $[[X][Y]]_N$, Y is the head of N

(1-35) Affixation/Inflection Principle

All affixation (including inflection) applies to the head of a word, but only if the head is 'visible' (i.e., if its brackets have not been erased due to interlevel movement). At level IV, default application is to the word, just in case the head is not visible.

Packardは(1-34)の規則と(1-35)の原理によって、中国語の語彙構造を4つのレベルに分けている。その4つのレベルにはそれぞれつぎのような語や形態法が含まれる。

レベル1	
不規則的結果複合動詞:	改善
外心構造の複合動詞:	左右
↓	
レベル2	
複合名詞:	桌球
名詞的派生接辞:	-子、-儿、-头
規則的結果複合動詞:	谈完
可能を示す接中辞:	-不-, -得-

↓
レベル3

内心構造の複合動詞： 讨论
動補複合動詞： 出版
疑問を示す動詞反復法 (A-not-AB)： 喜-不-喜欢

↓
レベル4

屈折接辞： -了、-们

Packardによると、まず、レベル1には(1-34)の主要部規則に違反するもの、たとえば、(1-36)のような語形成が含まれる。(1-34)は、もしある合成語が動詞なら、その前項要素が主要部であるということを示している。(1-36)の合成動詞の前項要素が動詞ではないので、Packardは(1-36)の合成動詞を外心構造の合成語として扱っている。

(1-36) a. 左右→[N-N]_v 左右する
b. 嘴硬→[N-V]_v 鼻柱が強い

また、レベル1には結果複合動詞があるが、それらの結果複合動詞には、接中辞「得／不」が挿入できない。

(1-37) a. 改善 改善する
→*改-得-善
→*改-不-善
b. 说明 説明する
→*说-得-明
→*说-不-明

一般に、「得／不」は結果複合動詞に挿入されて、可能／不可能を示す接中辞である。しかし、(1-37)の結果複合動詞は「得／不」の挿入を許さない。なぜ、このような例外があるのかについて、Packardは、「得／不」がレベル2に属する接辞であるので、レベル1

の複合語には挿入できないと説明している。このように、一般的な規則の例外となる語形成がレベル1に含まれる。

レベル2に含まれるものとして、(1-34)の主要部規則と一致するような複合語形成や派生語形成が挙げられている。このレベルで作られる結果複合動詞には同じレベルに属する「得／不」の挿入が可能である。

(1-38) a. 谈完 言い終える
→谈-得-完 言い終えることができる
→谈-不-完 言い終えることができない
b. 考上 受かる
→考-得-上 受かることができる
→考-不-上 受かることができない

しかし、(1-39)に示すように、レベル2の合成動詞には「A-not-AB」という形の反復法が適用できない。この「A-not-AB」という反復法は、もともと2音節合成動詞の肯定と否定が重なった形である「AB-not-AB」から、「A-not-AB」へと凝縮したものである⁴。

(1-39) a. *谈-不-谈完？
b. *考-不-考上？

なぜ、「A-not-AB」反復法がこの結果複合動詞に適用できないのかという問題について、Packardは「A-not-AB」反復法がレベル3に含まれている形態法であるので、レベル2の

⁴ たとえば、「喜欢(好きだ)」というレベル3で作られる合成動詞については、「喜欢-不-喜欢(好きか(それとも好きではないか))」とも「喜-不-喜欢(同左)」とも言うことができる。詳しくは次の第2章を参照されたい。

合成語に対して働かないからであると説明している⁴⁵。

Packardはさらに、レベル3の複合語はレベル2とは逆に、「A-not-AB」の形態法が適用できるが、接中辞「得／不」が挿入できないと説明している。たとえば、

- (1-40) a. 出版 出版する
 →*出-得-版
 →*出-不-版
 b. 关心 関心を寄せる
 →*关-得-心
 →*关-不-心

- (1-41) a. 出-不-出版 出版するか
 b. 关-不-关心 関心を寄せるか

レベル4には動詞のアスペクトを示すような接辞付加法(affixation)だけが含まれる。(1-35)の原理によれば、アスペクトマーカの「了、着、过」は語にしかつかない。

- (1-42) a. 出版-了 出版した
 →*出-了-版

⁴⁵ Packardは、レベル2に属する形態素「得／不」と「A-not-AB」という動詞反復に用いられる「不」がともに主要部動詞に後続するものであると考えている。よって、両者とも「谈完、考上」の前項要素に後続できるはずである。しかし、レベル2の「得／不」は(1-38)のように、前項要素「谈、考」に後続できるが、レベル3の「不」は(1-39)のように「谈、考」に後続できない。Packardの説明によれば、この現象は「得／不」と「A-not-AB」の間にレベルの差があることを示している。すなわち、「谈完、考上」の前項要素が主要部であることは同じレベルの形態素「得／不」には見えるが、異なるレベルの「A-not-AB」には伝わらないということである。

- b. 关心-过 関心を寄せたことがある
 →*关-过-心

「了、着、过」は動詞に後続するものである。(1-42)では、「出」と「关」はそれぞれ動詞であり、かつ「出版」と「关心」の主要部であるにもかかわらず、「了、着、过」がそれらに後続できないのは、「了、着、过」がより上のレベルの要素であるので、より下のレベルの内部構造が見えないからであるとされている。

1-4-2. 中国語への適用の問題点

本論文では、Packard(1990)に反して、中国語の語形成には英語のようなレベル順序づけがないことを示す。このように考えるのは、次の理由による⁴⁶。

中国語の語形成にレベルの違いがあるというPackardの主張を実質的に支えているのは、レベル3の「A-not-AB」という動詞の反復とレベル2の「得／不」の挿入との順序づけだけである。しかしながら、疑問を示す「A-not-AB」をレベル3に、可能を示す「得／不」をレベル2にそれぞれ位置づけるという、Packardの見方は経験的に支持できない。なぜなら、「A-not-AB」反復法と「得／不」の挿入との関係はレベルの差ではないからである。まず、「A-not-AB」反復法を見てみよう。

「A-not-AB」反復法が適用されうる合成語はレベル3だけではなく、レベル1にも分布されている。それらの合成語の分布は次のように示される。

(1-43) レベル1 ((1-37)参照)

- a. 改-不-改善 改善するか
b. 嘴-不-嘴硬 鼻っ柱が強い

(1-44) レベル2

- a. *谈-不-谈完 言い終わったか
b. *考-不-考上 受かったか

⁴⁶ Packardへの批判についてはSproat and Shih(1993)も参照されたい。

a. 出-不-出版 出版するか
b. 关-不-关心 関心を寄せるか

「A-not-AB」が、レベル1とレベル3の合成語に適用できるが、レベル2の合成語に適用できない理由について、次のように説明できる。「A-not-AB」が適用できるか否かの問題はレベル順序づけの問題(形態的な問題)ではなく、否定要素「不(not)」とそれに後続する動詞との選択制限の問題(意味的な問題)である。中国語の動詞には変化動詞という動詞クラスがある。第2部第1章でまた詳しく述べるが、変化動詞は基本的に、[-active, -stative]の素性を持つ動詞であり、意志を示す要素とも程度を示す要素とも共起しない⁷⁾。その例は(1-46)に示される。

- そして、「A-not-AB」に含まれている「不」という否定要素は、(1-47)のように変化動詞と共起しない*。

この家が崩れないなら、私は沈という苗字をやめる。

いのは、「A-not-AB」と規則的結果複合動詞との間にレベルの差があるからではなく、規則的結果複合動詞が変化動詞なので、「不」と共起しないからである。したがって、「A-not-AB」反復法の適用可能性は、レベルの順序づけを提案する根拠にはならないと言うことができる。

次に、「得／不」の挿入を見てみよう。まず、「得／不」がレベル2に属する規則的結果複合動詞に挿入されうるが、レベル3に属する動補複合動詞などに挿入されえないのは、両者の間にレベルの差があるからではなく、「得／不」は規則的結果複合動詞にしか挿入できないという選択制限があるからであると考えられる。(1-40)に見られるように、「得／不」がレベル3の合成語「出版」と「关心」に挿入できないのは、単にそのクラスに含まれている動詞は結果複合動詞ではないからであると考えられる。

一方、本論文の説明でも、(1-37)のように、「得／不」がレベル1の不規則的結果複合動詞にも挿入できないのはなぜかという問題が生じる。この問題について、「得／不」が不規則的結果複合動詞に挿入できないのは、不規則的結果複合動詞が要素間の「動作とその結果」という意味的構成性を失っているからであると説明することができる。すなわち、「得／不」が不規則的結果複合動詞に挿入できないのは意味的な問題であり、レベルの差とは関係がないと考えられる。この考えが妥当であることは、「得／不」の挿入可能性と「A-not-AB」の適用可能性との間に平行性が見られることから伺える。うえに述べたように、「A-not-AB」が規則的結果複合動詞に適用できないが、不規則的結果複合動詞に適用できるのは、レベルの問題ではなく、規則的結果複合動詞が変化動詞であり、不規則的結果複合動詞はそうではないからである。そして、「得／不」が規則的結果複合動詞に挿入できるが、不規則的結果複合動詞に挿入できないのも同じ理由で説明できる。変化動詞は常に変化前の状態と変化後の状態があることを前提とする。規則的結果複合動詞の前項要素と後項要素の間には「動作とその結果」という意味的構成性があるので、文法上、変化動詞としての振る舞いをするが、不規則的結果複合動詞の前項要素と後項要素の間には「動作とその結果」という意味的構成性が失われているので、文法上、変化動詞としての振る舞いが不可能になると考えられる。

以上の分析から、中国語には、英語のようなレベルの順序づけを示す現象が観察されないということになり、中国語の語彙レベルにおいては、更なるレベル分けができないと言わざるを得ない。

1-5. まとめ

この章では、中国語には、句形成と語形成の間にレベルの差があること、また、語彙レベル内部でさらにレベルを分ける必要がないことを主張した。(1-2)の図にも示したように、中国語の文法構造では、句、語、形態素の概念が必要であることに加えて、句形成と語形成の間にレベルの差があると考えなければならない。その根拠は、統語レベルでしか観察されえない照応関係および並立構造削除規則、語彙レベルでしか見られない「得／不」の挿入、さらに述部における1語が1句を担うことが禁じられる現象などに求めることができる。

この章で観察された、語形成と句形成の間にレベルの差があるという中国語の性質は多くの言語にも見られるので、中国語独特のものではない(Siegel1974、Allen1978、影山1982、1993などを参照)。一方、中国語には(0-4)と(0-6)のような固有の特徴もある。その特徴が中国語の文法構造にどのように反映されているのかという問題があるが、第2章と第3章でこの問題について議論する。

第2章 句形成と語形成(2) — 語彙分解規則

2-0. はじめに

第1章では、中国語の語形成と句形成の間にレベルの差があることを述べた。この点はほかの多くの言語と共通するところである。一方、序章では、中国語には(2-1)のような性質があることを述べた。

(2-1) a. 1 形態素 → 1 語

b. すべての語には「形態マーカ―」がない。

(2-1)の性質は、中国語の語形成と句形成にどれぐらい関わっているのでしょうか。これは中国語の文法体系の構築にとって非常に重要な問題である。この問題を明らかにすることによって、中国語の文法体系における独自の性質がより明確に認識されるからである。しかし、この問題については従来ほとんど考慮されてこなかった。第2章では、この問題を扱う。

ここで「幽默」の例を見よう。

(2-2) a. 他 很 幽默。 1-ㄇ7

かれはとてもユーモラスです。

b. 我 幽 他 一 默'。 1-ㄇ7 1-ㄇ7

わたしはちょっとかれをからかう。

(2-2a)の「幽默」は英語のhumorを音訳した語であり、2音節が1形態素かつ1語であるが、(2-2b)では、2音節が2つの形態素かつ2つの語として機能している。さらに、(2-2

*1 これはChao(1968)から引いた例である。

a)の「幽默」と(2-2b)の「幽、默」の間にはなんらかの派生関係があるはずである。この見方の妥当性を支持する理由が2つある。第1に、1語としての「幽默」と2語としての「幽、默」は同じ意味であり、同じ形式である。言語構造の合理性の観点から見れば、同じ意味を持つ同じ形式の2つの要素が全く関係なく、別々に作られたとは考えにくい。第2に、(2-2a)の「幽默」も(2-2b)の「幽、默」も、片方の要素を削除することはできない。この現象は「幽默」と「幽、默」の間に派生関係があることを示唆する。「幽默」は音訳語であり、「幽」を削除しても「默」を削除しても形態的にも意味的にも許されないことは言うまでもない。たとえば、(2-2a)の文が(2-3)のようにはならない。

(2-3) a. *他 很 幽 ϕ。

b. *他 很 ϕ 默。

一方、「幽、默」も片方を削除することは不可能である*2。

(2-4) a. *我 幽 他 一次。 量詞

b. *我 逗 他 一默。
からかう

これは2つの語の「幽、默」は形態的に分離されているが、意味的には分離されていないということを意味する。

次に、派生の方向つまり、「a-b → a, b」なのかそれとも「a, b → a-b」なのかが問題になる。さて、中国語では分離している2つの要素の両方またはどちらかが合成語の意味素性を受け持っている現象が見られる。

*2 (2-4)の2つの文は(2-2b)をもとに作られたものである。(2-2b)では、「幽」が動詞であり、「默」は量詞である。(2-4)では、(2-2b)の「幽」と「默」がそれぞれ、同じ機能を持つ、似た意味のものに置き換えられている。

(2-5) a. 我 后 -悔 了。
 あと 悔いる

わたしは後悔した。

b. 你 后 什么 悔 呀?

悔いる なに 悔い

きみはなんで後悔するの。

(2-5a)の「后悔」は合成動詞であるが、その内部の形態素「后」は単独で現れる場合、名詞の機能しかない。しかし、(2-5b)のように、「后」は「悔」とともに、分離した形で現れた場合、動詞の振る舞いをすることができる。この現象は「后」は普通は名詞であるが、統語レベルで「悔」と共起する場合、「后悔」という動詞の性質を受け継ぐと考えられる。したがって、「后悔」と「后、悔」の派生の方向は「a, b→a-b」ではなく、「a-b→a, b」であると考えたほうが自然である。

本論文では、「a-b→a, b」の派生過程は、語彙レベルで形成された語を統語レベルで分解して組立て直すという再分析(reanalysis)の過程であると考え、この再分析の過程を(2-6)の語彙分解規則として捉える³⁾。

(2-6) 語彙分解規則

[word a b]→[word a][word b]

(2-6)では、[word]はカッコ内の要素が語であることを示し、aとbはそれぞれ形態素を示す。

³⁾ 語彙分解規則は再分析(reanalysis)の手段の1つである。再分析は生成文法では、ある統語範疇(句)を一つの最小単位(語)として用いられることを指す。このことをまた再構成(restructuring)とも呼ぶ。例えば、

[NP the lady][v took][NP account][PP of his answer]
 →[NP the lady][v took account of][NP his answer](Radford1988を参照)

しかし、本提案の語彙分解規則はRadfordの「句が再分析される」のではなく、「語が再分析される」というプロセスである。

筆者は、語形成から句形成まで(2-7)のような3つの段階が可能であると考ええる。

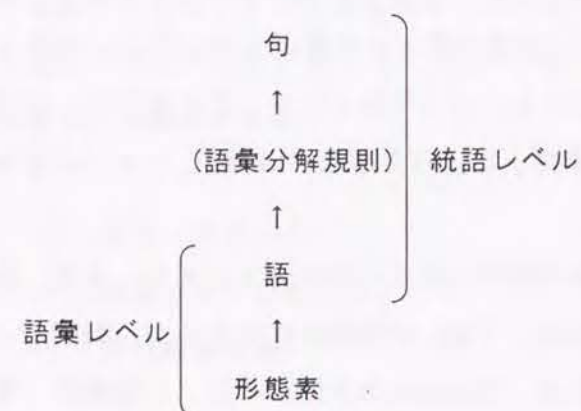
(2-7) I. 語形成の段階[word a-b]

II. 語分解の段階[word a][word b]

III. 句形成の段階[phrase a X b]

第1段階は語彙レベルで形態素を組立てる段階である。第2段階は語彙分解規則が適用される段階である。第3段階は分解された形態素を語として他の語と組立てる段階である。ここで語彙分解規則が文法構造のどこで働くかが問題になる。この問題の解答は語彙分解規則が適用される動機付けに求めるべきである。あとで詳しく述べるが、語彙分解規則が適用される動機付けは、合成語内の各形態素を統語レベルで認識される外部のほかの語と組み合わせるため、あるいは統語レベルの別の規則が働くようにするためであると考えられる。もしこの見方が妥当であれば、(2-7)の3つの段階は中国語の文法構造において、(2-8)のように位置づけられると考えられる。

(2-8)



(2-8)の図に示されているように、語彙分解規則は語から句を形成する段階で、任意に適用される規則である。

この章では、語彙分解規則の適用が働いていると考えなければならない3つの現象を観察したい。まず、第1節では、中国語の語と句の統語上の弁別基準を明らかにする。次に、語彙分解規則を引き起こす現象として、合成語の内部要素をほかの語と組み合わせて句を作ることを観察する。語から句への再分析の過程で、もとの合成語の内部の意味関係が保

持されるか否かによって、2つの場合が考えられる。1つは保持されている場合であり、もう1つは保持されていない場合である。第2節と第3節でそれぞれの場合を観察する。第4節では、ある特殊な統語規則の適用によって、語彙分解規則が適用されることを観察する。

2-1. 語と句の弁別

中国語では、語でも句でもそれらの要素間には基本的に(2-9)に示すように、4種類の意味関係がある。

- (2-9) a. 動補関係 (complementation)
b. 主述関係 (predication)
c. 並立関係 (co-ordination)
d. 修飾関係 (modification)

(2-9)の4つの関係は、合成動詞にも動詞句にも含まれていて、そして、序章で述べたように、中国語の語に形態マーカがないことから、語と句の違いはどのように区別されるのかは非常に難しい問題である²⁴。この問題を解決する重要なヒントは、統語レベルにおける語と句の文法上の振る舞いを見ることによって得られる。この節では、[+V]の素性を持つ2つの要素の連続が語なのか句なのかを、うえの(2-9)に示した4つの意味関係それぞれについて見よう。

第1番目の動補関係の場合、語と句の認定には3つのテストがある。まず、経験を表すアスペクトマーカ「过」の分布を見る。「过」は動詞に後続するが、動詞句には後続しないという性質を持っている。たとえば、(2-10)のように、「过」は動詞の「看」に後続するが、動詞句の「看电影」には後続しない。

²⁴ 合成名詞または名詞句には(2-9c) (2-9d)の意味関係しか含まれていない。本論文では中国語の動詞構造を中心に議論しているので、名詞(句)における意味関係や語と句の違いなどは別稿に譲る。

- (2-10) a. 你 看过 电影 吗?
君は映画を見たことがあるの。
b. *你 看 电影过 吗?

「过」のこのような性質を利用して、「见面」と「负责」が語であるか句であるかを知ることができる。

- (2-11) a. *我们 见面过
見る 顔
私たちは会ったことがある。
b. 这个班 我 负责过
負責
このクラスは私が担当したことがある。

(2-11)では、「过」が「负责」だけに後続することから、前者は句であるが、後者は語であると言える。

次に、「試しに~する」という意味を示す動詞反復規則を適用した場合、語に適用できるが、句に適用できないことがわかる²⁵。たとえば、動詞反復規則は「看」に適用できるが、「看电影」には適用できない。

- (2-12) a. 你 看看 电影。
君は映画を見てみなさい。
b. *你 看电影看电影。

次に、動詞反復規則が「见面」と「负责」のどちらに適用できるかを見てみよう。

²⁵ ここでは、便宜上、「動詞反復規則」と呼ぶが、この現象を別の観点から捉えることも可能である。いずれにせよ、本論文の議論とは直接かかわらない問題である。

(2-13) a. *你们 见面见面 吧。

文末動詞

君らは会ってみてください。

b. 你们 负责负责 吧。

君らは担当してみてください。

動詞反復規則が「见面」に適用できないが、「负责」に適用できることから、やはり前者は句で、後者は語であることがわかる。

最後に、動量詞(動作や行為の頻度を示す数量詞)が生起する位置を見る。中国語の動量詞の分布については第3章でまた詳しく述べるが、動量詞は基本的に動詞に後続するが、動補関係の動詞句には後続できないという性質を持っている。たとえば、動作の回数を示す数量詞「一次」は「看」に後続するが、「看电影」には後続できない。

(2-14) a. 你 看 一次 电影 吧。

一回映画を見なさい。

b. *你 看 电影 一次 吧。

次に、数量詞が「见面」と「负责」のどちらと生起するのかを見る。

(2-15) a. *你们 见面 一次。

君たちは一回会いなさい。

b. 你们 负责 一次。

君たちは一回担当しなさい。

「一次」は「见面」に後続できないが、「负责」に後続できる。この現象からも前者が動詞句であり、後者が動詞であると言えることができる。

以上、「见面」と「负责」を例に、3つのテストを適用してみたが、同じ結論がえられた。すなわち、「见面」は句であり、「负责」は語である。この3つのテストは動補関係の連続が語か句かの認定には有効であると言えるだろう。

第2番目の主述関係においては、語と句の認定には、「不」という副詞が生起できる位

置を見るとよい。というのは、否定副詞「不」は主述関係の動詞句に先行できないという性質を持っているからである。たとえば、「不」は「哭」に先行できるが、「我哭」に先行することができない。

(2-16) a. 我 不 哭。

わたしは泣かない。

b. *不 我 哭。

「不」のこのような性質を利用して、主述関係の連続が語なのか句なのかを見ることができる。次の「脚疼」と「心疼」を比べられたい。

(2-17) a. *不 脚 疼。

足が痛くない。

b. 不 心 疼。

惜しがらない。

「脚疼」と「心疼」はそれぞれ主述関係の連続であるが、(2-17)に示されているように、「不」は「脚疼」には先行できないが、「心疼」には先行できる。その理由は、「心疼」は合成語であるが、「脚疼」は動詞句であるからであると説明することができる。さらに、「脚疼」が動詞句であることは副詞「不」がそれに挿入できることからわかる。

(2-18) a. 脚 不 疼。

同(2-17a)。

b. *心 不 疼^{*6}。

同(2-17b)

^{*6} (2-18b)は「惜しがらない」という意味で非文法的であるが、「心が痛くない」という意味では文法的である。

「脚疼」と「心疼」に関して「不」という副詞の分布を見たが、「不」以外の副詞でも、語と句を識別するテストに使えるものがある。たとえば、程度副詞の「很」である。

(2-19) a. *很 脚疼。

足がとても痛い。

b. 很 心疼。

とても惜しがっている。

以上、「脚疼」と「心疼」に関して2つの副詞の分布の違いから、句と語の区別が可能になる。

第3番目の並立関係の場合、語と句の認定は簡単である。なぜなら、基本的にポーズや他の要素が挿入されたものは句であるが、それ以外のものは語であると考えられるからである。次の例を見てみよう。

(2-20) a. 我的论文 得 大修大改。
べきだ

私の論文は大きく直したり改めたりしなければならない。

b. 我 得 修改 论文。

私は論文を直さなければならない。

中国語では、(2-20a)のように、「大」によって分離された「修改」は句であるが、(2-20b)のように、分離されていない「修改」は語である。それは、うえで見た「試しに～する」という意味を与える動詞反復規則が適用されるかどうかということからも明らかになる。「大修大改」と「修改」を比べてみよう。

(2-21) a. *你 大修大改大修大改 吧。

君は大きく直したり改めたりしてみなさい。

b. 你 修改修改 吧。

君は直してみなさい。

「大」によって分離された「修改」は反復できないが、分離されていない「修改」は反復できる。すでに述べたように、動詞反復規則は句ではなく、語に適用されるので、前者は句で、後者は語であるということがわかる。

第4番目の修飾関係についても、語と句の認定には動詞反復規則が適用できるかどうかを見ればよい。たとえば、「快跑(はやく走る)」と「喜庆(喜んで祝う)」を比べてみよう。

(2-22) a. *我们 快跑快跑 吧。

速く走る

私たちは速く走ってみよう。

b. 我们 喜庆喜庆 这个节日 吧。

喜んで祝う

お祭り

私たちはこのお祭りを祝ってみよう。

すなわち、「快跑」は反復できないが、「喜庆」は反復できる。このことから、前者は句であり、後者は語であると言える。

以上、(2-9)に示した4つの意味関係において、動詞と動詞句の認定基準を見た。次に、それらの認定基準を利用して、「語彙分解規則」が働いているのかを見てみよう。

2-2. 合成語の分解(その1)

この章のはじめに、中国語の合成語が語彙分解規則によって分解されうることを指摘した。語彙分解規則とは、(2-6)に示されたように、語彙レベルで形成された1つの合成語を統語レベルでそれぞれ2つの単純語として捉え直すという再分析の規則である。この規則を適用する動機付けは、基本的に、合成語内部の諸要素を統語レベルで他の語と組立て直すことである。この場合、3つのパターンが考えられる。1) もとの合成語の意味関係に基づいて、他の語と組立て直す場合、2) もとの合成語の意味関係を無視して、新しい意味関係で他の語と組立て直す場合、3) 統語上の特殊な規則の適用によって語彙分解規則が適

用される場合である。この節では、第1のパターンを観察する^{*)}。

合成語が動詞である場合、(2-23)のように、4つの意味関係のパターンがある。

(2-23) a. 動補関係

担心 心配する
告别 別れを告げる

b. 主述関係

心慌 心が慌てる
眼红 目が赤い

c. 並立関係

尊敬 尊敬する
争夺 争夺する

d. 修飾関係

痛恨 痛恨する
喜庆 祝う

これらの例のうち、(2-23a) (2-23b) (2-23c)の意味関係を持つ語の内部の要素は、もとの意味関係を保持しながら、外部の要素と組み合わせることができる。まず、(2-23a)の動補関係の合成語を見られたい。

1番目に、合成語の前項要素とアスペクトマーカ―「过」との組み合わせを見よう。「过」が後項要素に後続する場合、問題の連続は語であるが、前項要素に後続する場合、問題の連続は句である。

- (2-24) a. 担心过 心配したことがある
b. 告别过 別れを告げたことがある

^{*)} 中国語学では、第1、第2のパターンの語を「離合詞」と呼んでいるが、これはあくまで現象名であり、この現象はいまだに理論的に分析されていない。中山(1990)、潘他(1993)を参照されたい。

- (2-25) a. 担过 心 心配したことがある
b. 告过 别 別れを告げたことがある

(2-24)の「担心」と「告别」は語であるが、(2-25)の「担心」と「告别」は句である。(2-25)では、「过」が前項要素に結びつき、後項要素は補部の位置を占めている。その証拠として、(2-26)のような、もともと補部をとる合成語が「过」の割り込みによって、(2-27)のように、補部がとれなくなることがあげられる。

- (2-26) a. 担心 他来 彼がくることを心配する
b. 告别 李四 李四と別れを告げる

- (2-27) a. *担过心 他来 彼が来ることを心配したことがある
b. *告过别 李四 李四と別れを告げたことがある

(2-27a)と(2-27b)が非文法的であるのは、もともとの補部が、占めるべき位置を失ったからである。

つぎに、さきほど見た動詞反復規則は、語に対して適用されるものであった。したがって、(2-28)のように、合成語である「担心」と「告别」にはこの規則が働く。ところが、(2-29)に見られるように、合成語内部の前項要素「担」と「告」が反復している例がある。

- (2-28) a. 担心担心 心配してみる
b. 告别告别 別れの挨拶を試してみる

- (2-29) a. 担担 心 心配してみる
b. 告告 别 別れの挨拶を試してみる

これを説明するには、(2-6)の語彙分解規則によって合成語の前項要素が再び語になり、つぎに動詞反復規則が適用されたと考えなければならない。つまり、統語レベルの規則が働くための条件を語彙分解規則によって作り出されているのである。(2-29)の場合、後項

要素が補部の位置を占めているので、(2-30)のように、もともとの補部が現れない。

- (2-30) a. *担担 心 他来 彼が来ることを心配してみる
b. *告告 別 李四 李四と別れの挨拶を試みる

3 番目に、数量詞が前項要素に後続し、後項要素と組み合わせることができることを見よう。

- (2-31) a. 担心 一次 1 回心配する
b. 告别 一次 1 回別れを告げる

- (2-32) a. 担 一次 心 1 回心配する
b. 告 一次 別 1 回別れを告げる

(2-31)では、数量詞が「担心」「告别」の補部の位置に来ているので、その主要部の「担」「告」は語である。しかし、(2-32)では、数量詞がその後項要素の「心」「別」と組み合わせ、それ全体が、さらに前項要素の「担」「告」と動詞句をなしている。

次に、(2-23b)の主述関係の連続を見てみよう。すでに見たように、主述関係を表す動詞句に「不」は先行しない。したがって、(2-33)の「心慌」と「眼红」は語であることがわかる。

- (2-33) a. 不 心慌 心が慌てない
b. 不 眼红 目が赤くない

ところが、(2-34)のように、「不」が合成語内部に挿入している例が見られる。

- (2-34) a. 心 不慌 同上。
b. 眼 不红 同上。

これを説明するには、語彙分解規則によって合成語の前項要素が再び語になり、主語とし

て「不」に先行したと考えるのが自然であろう。

さらに、(2-23c)の並立関係の連続を見よう。それらの連続が合成語であることは、動詞反復規則が適用できることからわかる。

- (2-35) a. 尊敬尊敬 老师。
ちょっと先生を尊敬しなさい。
b. 争夺争夺 冠军。
チャンピオンを取ってみなさい。

(2-35a)の「尊敬」でも(2-35b)の「争夺」でも反復できるので、それらの連続は語であると言える。一方、それらの要素はまた、句として組立て直すこともできる。たとえば、つぎのように様々なペア要素が挿入される。

- (2-36) a. 可尊敬 尊敬すべきだ
b. 你争我夺 誰もかも奪い合う

(2-36)の「尊敬」と「争夺」には、それぞれ「可、可」「你、我」が挿入されている。(2-36)の連続が句であることは、(2-23c)がもともと(2-35)のように補部をとることができるが、(2-36)のように句に分解された場合、(2-37)のように、補部がとれなくなることからわかる。

- (2-37) a. *可尊敬 老师 先生を尊敬すべきだ
b. *你争我夺 冠军 誰もかも優勝を奪い合う

したがって、語彙分解規則は並立関係の合成語にも適用されと言える。

最後に、(2-23d)の修飾関係の連続を見よう。それらの連続が合成語であることは「試しに～する」という意味を示す動詞反復規則が適用できることからわかる。

- (2-38) a. 痛恨痛恨 ちょっと恨みなさい
b. 喜庆喜庆 ちょっと祝いなさい

しかし、それらの合成語は同じ意味関係を保ったまま、組立て直すことができない。おそらく、中国語には修飾関係を示す語がほとんどないので、語彙分解規則の適用を引き起こすものがないからであろう¹⁸。同じ修飾関係の合成語は、修飾関係以外の意味関係で組立てられることが可能である。詳しくは次の2-3節を参照されたい。

2-3. 合成語の分解(その2)

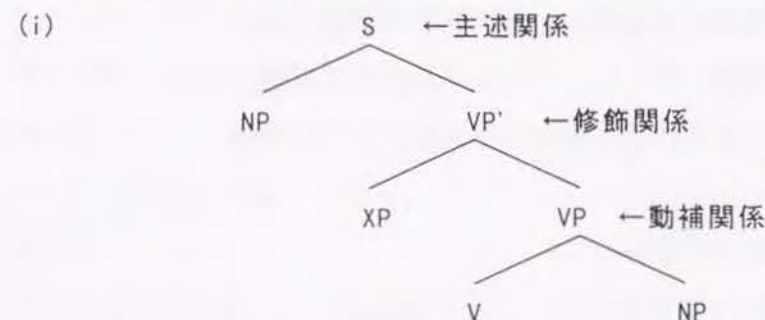
この節では、統語レベルで合成語内部の要素とほかの語を組み合わせる時に、もとの合成語内の意味関係が無視され、新しい意味関係で組立てられることを観察する。

合成語が動詞である場合、様々な意味関係を持つ様々な動詞は、次のように、一律に動補関係の動詞句として組立て直される場合が多い¹⁹。たとえば、(2-39a)のように合成語が主述関係である場合も、(2-39b)のように、動補関係で組立て直されることがある。

- (2-39) a. 地震了。 地震が起こった。
 b. 地了 一次 震。 一回地震が起こった。
 地震V 地震N

¹⁸ 動詞句に関しては、「地」という形式が副詞化の機能を持っているようであるが、どの形式にも後続できるわけではない。例えば、「痛」、「喜」には後続できない。

¹⁹ なぜ、様々な意味関係を持つ合成語が一律に動補関係の句として組立て直されるのかという問題について、動補関係を示す構造が中国語の統語構造の中で基本的な構造だからであると説明できるであろう。すなわち、動補関係を示す構成素は中国語の統語構造において、一番最初に形成される単位であり、(i)のように、構造図の枝分かれの末梢に示されるものである(Huang1982, Li, Y.-H. 1990などを参照)。



(2-39a)の「地震」と(2-39b)の「地、震」の意味関係が異なるので、両者の間に派生関係がない、つまり動補関係である「地、震」が主述関係の「地震」から派生したのではないと考えられるかもしれない。しかし、このように考えるならば、なぜ、(2-39b)の「地」が「震」と共起しない場合、動詞の振る舞いをする事ができないのに対して、「震」と共起すれば、動詞の振る舞いをする事ができるようになるのかという問題は説明できないであろう。この問題について、本論文では、句である「地、震」が語である「地震」から派生したものであると考えているので、(2-39b)の「地」が動詞の振る舞いをする事ができるのは、「地、震」が「地震」から派生するときに「地」が「地震」から[+V]という素性を受け継いだからであると説明することができる。

また、合成動詞が並立関係である場合でも、(2-40b)と(2-41b)のように、動補関係で組立て直されることがある。

- (2-40) a. 学习学习 英语 英語を勉強してみなさい
 b. 学了 一天习 一日勉強した。
 c. *学了 一天习 英语。

- (2-41) a. 记录记录 会议内容 会議の内容を記録してみなさい。
 b. 记了 三次录 3回記録した。
 c. *记了 三次录 会议内容。

(2-40a)の「学习」の意味関係は並立関係である。論語の「學而時習之」から分かるように、「学习」は学んで練習するという意味である。しかし、(2-40b)では、「学」は動詞で、「习」はその補部になる。その証拠として、もともと「英语」を補部としてとる「学习」は分解された場合、(2-40c)のように、もはや補語をとれなくなるからである。(2-41)の「记录」も「学习」と同じことが言える。さらに、(2-42)のような意味関係の極めて曖昧な合成語もある。とくに、(2-42c)の「幽默」が借用語なので、その内部には意味関係がないといっても過言ではない。

- (2-42) a. 慷慨 氣前がよい

- b. 滑稽 面白い
- c. 幽默 ユーモアだ

もちろん、これらの連続は語である。これは動詞反復規則を適用することによって判断できる。

- (2-43) a. 慷慨慷慨 気前よくしてみる
 b. 滑稽滑稽 面白くしてみる
 c. 幽默幽默 冗談を言ってみる

しかし、意味関係の不明瞭な両要素は、統語レベルで動補関係に捉えられうる。

- (2-44) a. 慷 他人之慨 他人の財物で自分の気前のよさを見せようとする。
 b. 滑 天下之大稽 天下一番の滑稽をする。
 c. 幽了 他一黙 かれをちょっとからかった。

最後に、合成動詞が修飾関係である場合、統語レベルで同じ意味関係では組立てられないが、並立関係で組立て直されうることを見ておこう。つぎの(2-45a)の「痛」と「恨」はともに「邪悪」という1つの補部をとっていることから、両者は動詞句の主要部の位置を占め、合成語であることがわかる。ところが、両者は「又…又」によって分解された場合、補部をとらない(2-45b)は文法的であるが、補部をとる(2-45c)は非文法的である。この現象から、分解された「又痛又恨」はもう合成語ではなく、動詞句であることが伺える。

- (2-45) a. 张三 痛恨 邪悪。
 張三は悪党を痛恨している。
 b. 张三 对 邪恶 又痛又恨。
 張三は悪党に対して憎み、恨む。
 c. *张三 又痛又恨 邪恶。

周知のとおり、「痛恨」では、「痛」は「恨」の程度を示す。両者の意味関係は修飾関係

である。一方、「又…又」が並立関係を示すので、それによって分解された「又痛」と「又恨」も並立関係であると考えられる。

2-4. 合成語の分解(その3)

この節では、中国語の反復疑問文の形成には、「同一命題削除規則」という規則が観察され、その規則が適用されることによって、語彙分解規則が引き起こされることを示す。

2-4-1. 反復疑問文の構造

疑問文が命題の真偽値を求める構文だとすれば、1つの命題の真偽値を求めるのがyes-no疑問文(是非問句)、2つの命題のうち、真であるものを求めるのが選択疑問文(选择問句)である。中国語のyes-no疑問文は、(2-46a)のように、ある命題の後に(文末に)「吗」をつけ、選択疑問文は、(2-46b)のように、二つの命題(通常文または動詞句で示されるもの)の間に接続詞「还是(それとも)」で結ばれる。

- (2-46) a. 你 复习 英语 吗?
 あなたは英語を復習するか。
 b. 你 复习 英语 还是 他 复习 英语?
 あなたが英語を復習するのか、それとも、彼が英語を復習するのか

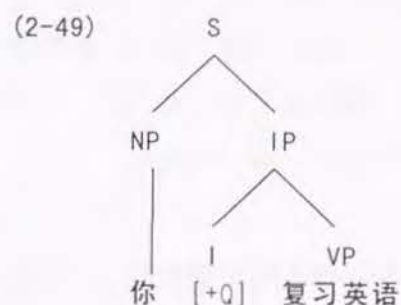
一方、(2-46)とは別に、中国語には、(2-47)のような反復疑問文(正反问句)という形式がある。

- (2-47) 你 复习英语 不复习英语?
 あなたは英語を復習するか。

反復疑問文は上の2つの側面を共有する1つの矛盾体である。1つ目は、肯定の命題と否定の命題のうち、どの命題が真であるのかを求める。この点は選択疑問文と共通する。2つ目は、肯定否定の選択を単に疑問符として捉え、実質上、一つの命題の真偽値を求める。この点はyes-no疑問文と共通する。この2つの側面を構造的にどのように捉えれば妥当であるのか。本論文では、反復疑問文の2つの側面を捉えるために、動詞句連続の構造と

「同一命題削除規則」という規則を提案する。

(2-47)は、「复习英语」という肯定の命題と「不复习英语」という否定の命題の選択を表現しているが、実質上、「复习英语」という命題の真偽値を求めている。前者の側面を重視するWang(1967)と朱(1982)は、(2-48)のように、反復疑問文は選択疑問文の一種であり、重文構造であると結論づけている。後者の側面を重視するHuang(1988b)は(2-49)のように、反復疑問文は焦点疑問文の一種であり、単文構造であると結論づけている。



しかし、以上の2つの構造は理想的な構造ではない。というのは、両者にはそれぞれ説明できない例があるからである。たとえば、(2-48)の選択疑問文説では、(2-47)の文法性と(2-50)の非文法性を説明することができない。

(2-50) *你复习英语 你不复习英语?

Wang(1967)は、(2-47)の構文はRoss(1967)の「並立構造削除規則」に基づいて説明できると考えている。同規則によれば、もし同一指示句が統語構造の中で左へ枝分かれすれば、削除は順方向でなければならない。もし右へ枝分かれすれば、削除は逆方向でなければならない。(2-47)の構文を「並立構造削除規則」で無理なく説明するためには、次の3つのプロセスが必要であろう。1) (2-47)では左へ枝分かれしている2つの「你」うち後方の

「你」が削除される。2) 接続詞が削除される。また、3) うえの1)と2)の間には規則適用の順序づけがある。したがって、(2-50)の非文法性は、2番目の主語が削除される前に、接続詞が削除され、これは規則適用の順序に違反するからだと説明されうる。

しかし、Rossの「並立構造削除規則」が実は反復疑問文に働かないということは以下の現象からわかる。同規則によれば、同一指示の要素が右枝分かれする場合、後方の要素が削除されてはならないが、(2-51)の反復疑問文では「复习英语」という後方要素全体が削除されている。

(2-51) 你 复习英语 不?
あなたは英語を復習するか。

この現象は反復疑問文の削除が「並立構造削除規則」によるものではないことを意味する。したがって、選択疑問文説にとって、(2-50)でなぜ2つの主語「你」が共起しないのかという問題はやはり説明できない。

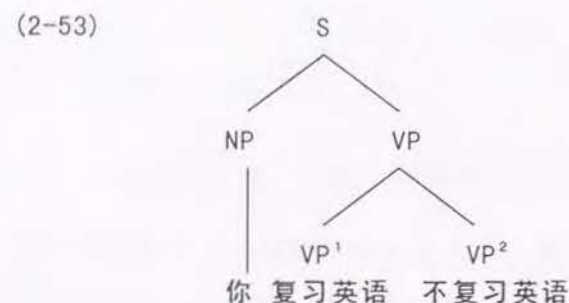
また、(2-49)の焦点疑問文説にも問題がある。Huangは肯定否定の反復を一つの屈折範疇(INFL)として扱い、統語レベル以後の音韻レベルに(2-52)の「音韻反復規則(語音重畳律)」があると主張している。(2-47)の反復疑問文は音韻レベルで屈折範疇[+Q]のすぐ後の要素(要素の大きさの違いはあるが)を反復し、さらに、「不」を挿入して派生される。

(2-52) 复习英语→复习英语复习英语→复习英语不复习英语→(2-47)

(2-50)に見られるような、なぜ2つの主語が共起しないのかという問題は(2-49)の焦点疑問文説ではもはや問題にはならない。しかし、焦点疑問文説には2つの問題がある。1つ目は、Huangは命題の部分が音韻レベルで反復すると規定しているが、なぜ、音韻レベルで「不」が挿入されうるのか。すなわち、音韻レベルで形態素を挿入することは不自然ではないかという問題である。2つ目は、Huang自身も認めているように、反復が関与する

とは思えない(2-51)の例はこの説では説明できない^{*10}。

本論文では、反復疑問文は選択疑問文との類似性があり、その構造は反復疑問文の肯定の命題と否定の命題の選択という側面を示さなければならないと考え、反復疑問文が(2-53)に示すように、並立関係の動詞句連続であることを提案する。(2-53)は単文構造であるので、重文構造であるWang(1967)の(2-48)とは異なる。(2-47)の「复习英语」と「不复习英语」はこの構造では動詞句連続である。



この構造をもってすれば、Wangの重文構造の問題点とHuangの単文構造の問題点が解決される。なぜ(2-50)で2つの主語が共起しないのかという問題については、(2-50)は文の連続であり、動詞句の連続ではないからであると説明できる。また、(2-51)の述部がなぜ反復していないのかという問題については、この提案では、「复习英语」と「不」はもともと(2-53)に示した動詞句の連続だからであると説明することができる^{*11}。

さらに、Wangの重文構造でもHuangの単文構造でも説明できない例を挙げる。

(2-54) 你 马上 来不来?
 すぐ
 あなたはすぐ来るか。

^{*10} (2-51)はWangの見方の反例となるものであるが、Huang(1988b)は(2-51)の例については、(2-49)とは別の構造を持つものとして除外している。

^{*11} 次の2-4-2節で議論するが、(2-51)のVP²に「不」だけが現れたのは、「同一命題削除規則」という別の規則によって「不」以外の要素が削除されたからであると説明することができる。

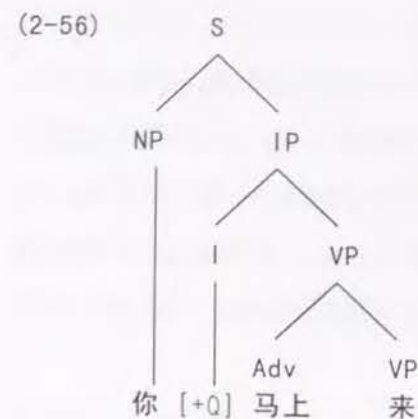
まず、(2-54)は(2-48)の重文構造から並立構造削除規則によって形成されえない。たとえば、重文構造説にとって(2-54)を派生するために、その基底形は(2-55b)しか考えられない。なぜなら、(2-55b)の「你马上不来」があってはじめて並立構造削除規則が適用され、[你[马上[不来]]]→[马主[不来]]→[不来]になることが可能である。しかし、(2-55b)は非文法的である^{*12}。(2-55a)は文法的であるが、[不[马上来]]の構造では、「马上」が削除されえず、そこから(2-54)が派生されない。

- (2-55) a. 你马上来 还是 你不马上来?
 あなたはすぐくるのか、それとも、すぐこないのか。
 b. *你马上来 还是 你马上不来?

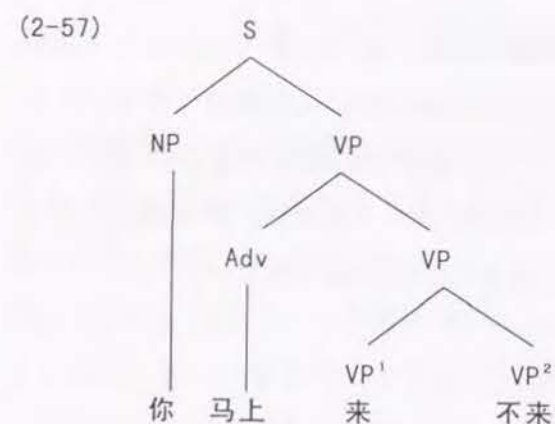
(2-54)はまたHuangの(2-49)の単文構造でも説明できない。(2-54)の「马上」は文副詞ではないので、(2-56)に示すように、屈折範疇[+Q](INFL)の内側にしか生起できないと考えたほうが自然であろう^{*13}。一方、Huangによれば、反復疑問文の屈折範疇[+Q]のすぐ後の要素が反復されなければならないので、(2-56)の構造では、「马上来」が反復されると予測しても、(2-54)のように、「来」だけが反復されることは予測できない。

^{*12} 生成文法では、意味役割の付与と格付与とは別々のことであると仮定している。そのような研究では、意味役割付与の方向における独自の理由で、D構造で非文法的なものを建てて、またS構造で格付与規則が適用されることによって文法的な文が生成されることが考えられている。しかし、中国語の選択疑問文の場合、D構造で非文法的な文を建てる理由が見られないので、(2-55b)はD構造の基底形であるとは考えにくい。

^{*13} 中国語において、文副詞(sentential adverb)は文頭か主語のすぐ後に生起するが、それ以外の副詞は述語内部に生起する。詳しくはLi and Thompson(1981:319)を参照されたい。



しかし、肯定句と否定句が動詞句連続であると主張する本提案では(2-54)の例を(2-57)のように説明することができる。



ところが、本提案にも、(2-51b)のように、「不」だけがVP²に用いられるのはなぜかという問題がある。この問題は反復疑問文のもう1つの側面、つまり、1つの命題の真偽値を求めるという性質に関わる問題である。次の節でこの問題を議論しよう。

2-4-2. 同一命題削除規則

反復疑問文には、実質上1つの命題の真偽値を求めるという側面がある。この性質は2つの命題の1つを削除する操作を引き起こす。その操作を(2-58)のような「同一命題削除規則」として捉える。

(2-58) 同一命題が並ぶ場合、いずれかの命題に削除が生じる¹⁴。

- a. 右側の命題に削除が起こる場合、削除されるのは否定要素以外である。
- b. 左側の命題に削除が起こる場合、左端の動詞以外の要素は削除される。

まず、右側の命題に削除が起こる場合を考えてみよう。(2-58)の規則は任意に適用される規則である。(2-58a)の規則が適用されない場合、次の(2-59a)の文が成立する。(2-58a)の規則が適用された場合、(2-59b)が規則的に形成される。一方、(2-59c)については、「不」が副詞で常に意味的に修飾される動詞に依存しているので、「复习」が「不」をsupportし¹⁵、「不复习」全体で1つの否定要素として捉えられると説明することができる。supportが起こらない(2-59b)は(2-59c)に比べると、極めて口語的である。

- (2-59) a. 你 [复习英语] 不复习英语?
あなたは英語を復習するか。
- b. 你 [复习英语] 不φ?
同上。
- c. 你 [复习英语] 不复习φ?
同上。

したがって、「不」の直後に修飾される動詞が来ない(2-60a)のような場合、(2-60e)以外の文は(2-58a)を満たさず、非文法的になる。なぜなら、削除後に、否定要素以外の要素が残っているからである。

¹⁴ 命題は意味的な概念であるが、ここで、論述を簡単化するために、命題を示す要素まで「命題」と呼ぶ。したがって、命題に削除が起こることは、命題を示す要素に削除が起こるという意味である。

¹⁵ これは、生成文法のいう、英語のdo-supportに相当する。中国語で副詞「不」を支えるのは、doのような形式動詞(light verb)ではないので、もとの動詞が残されるわけである。

(2-60) a. 你 [在家复习英语] 不在家复习英语?

あなたは家で英語を復習するか。

b. *你 [在家复习英语] 不在家复习 ϕ ?

c. *你 [在家复习英语] 不在家 ϕ ?

d. *你 [在家复习英语] 不在 ϕ ?

e. 你 [在家复习英语] 不 ϕ ?

同上。

次に、左側の命題に削除が起こる場合を考えてみる。(2-58b)の規則が適用されない場合、次の(2-61a)と(2-62a)の文が形成される。(2-58b)の規則が適用された場合、(2-61b)の文は形成されるが、(2-62b)の文は形成されない。なぜなら、(2-61b)では動詞が残されているが、(2-62b)では動詞が残されていないからである。

(2-61) a. 你 复习英语 [不复习英语]?

あなたは英語を復習するか。

b. 你 复习 ϕ [不复习英语]?

同上。

(2-62) a. 你 真复习英语 [不真复习英语]?

本当に

あなたは本当に英語を復習するのか。

b. *你 真 ϕ [不真复习英语]?

また、(2-63)のような場合において、(2-63b)が非文法的であるのは、「复习」の左にまだ動詞句「在家」があるので、左端ではないからである。

(2-63) a. 你 在家复习英语 [不在家复习英语]?

あなたは家で英語を復習するか。

b. *你 在家复习 ϕ [不在家复习英语]?

c. 你 在家 ϕ [不在家复习英语]?

同上。

d. 你 在 ϕ [不在家复习英语]?

同上。

(2-63c)と(2-63d)はいずれも(2-58b)の規則に基づいて形成されたと考えられる。しかしながら、削除後に残っているのは、(2-63d)では動詞であるのに対して、(2-63c)では動詞句である。したがって、(2-63d)は(2-58b)の規則で説明できるが、(2-63c)についてはさらに別の説明が必要となる。中国語学では、動詞でありながら主要部の動詞の意味役割を示すものを介詞と呼ぶ。それは英語の前置詞、日本語の助詞と共通する部分である。中国語の介詞は目的語なしでは生起できないという性質がある。Huangによれば、中国語の介詞は「介詞懸空(preposition stranding)」を禁ずるという規則に従う^{*16}。(2-63c)で「家」が現れる1つの理由として、(2-58b)の規則の適用の結果残された「在」を支えているということが考えられる。

以上、反復疑問文には同一命題削除規則があることが観察された。これによって、反復疑問文のもう1つの側面、1つの命題の真偽値を求めるという性質が捉えられることになる。また、2-4-1節と2-4-2節の議論から、反復疑問文の構造が明らかになる。すなわち、反復疑問文は選択を示す動詞句連続の構造をもっているが、1つの真の命題の真偽値を求めるための「同一命題削除規則」が働くということである。しかし、「同一命題削除規則」の過剰適用に見える現象がある。次の節でこの問題を論じる。

2-4-3. 再分析

2-4-2節では、「同一命題削除規則」を提案した。すなわち、左のVP¹を命題として残すならば、右のVP²の否定要素以外の要素が任意に削除され、VP²を命題として残すならば、VP¹の左端の動詞以外の要素が任意に削除されるということを見た。しかし、この反復疑問文では、合成動詞の後項要素さえ削除されることがある。

(2-64) 你 复 ϕ [不复习英语]?

^{*16} 詳しくは第6章でもふれる。

あなたは英語を復習するか。

(2-64)は「語彙自律性の仮説」に違反する現象である。すなわち、統語レベルにおいて語の完全性が保持されなければならないのに、(2-64)では保持されていない。(2-64)を説明するのに、まず次の3つの可能性が浮かんでくる。

- (2-65) a. 同一命題削除規則は形態規則である(Packard1990を参照)。
b. 同一命題削除規則は形態規則かつ統語規則である。
c. 同一命題削除規則は統語規則である。

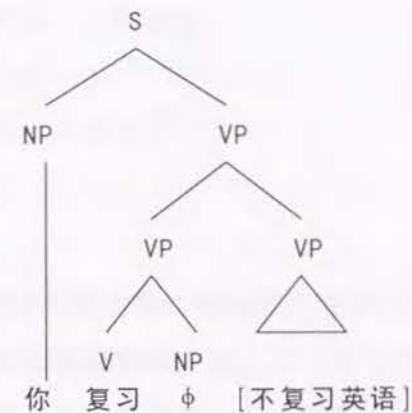
(2-65a)と(2-65b)の説明は好ましくない。というのは、同一命題削除規則は2つの命題(2つの句)を1つにするという句レベルの規則であり、統語レベルの操作であると考えなければならないからである。とすれば、残る選択肢は(2-65c)だけである。しかし、その説明にも問題がある。なぜなら、統語規則である同一命題削除規則が、「复习」という合成語に適用されることは「語彙自律性の仮説」に違反するからである。「复」と「习」の組み合わせが合成語であることは、(2-66)のように、「並立構造削除規則」が適用されえないことからわかる。

- (2-66) a. 复习 和 学习
復習と学習
b. *复 ϕ 和 学习

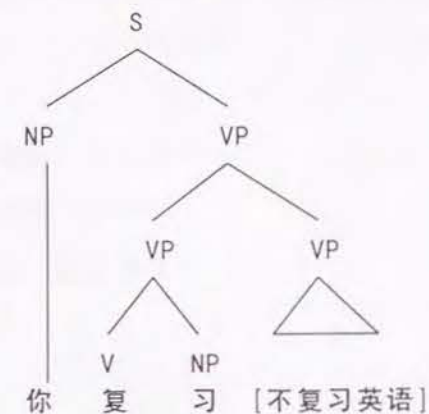
ここで、もし(2-64)については(2-6)の語彙分解規則が働いていると考えることができれば、(2-65c)は妥当的な説明になるだろう。

本論文では、(2-64)については、実際(2-6)の語彙分解規則が働いていると主張する。(2-64)の構文の形成は語彙分解規則に基づいて説明されれば、次のようになる。(2-67a)の「复习」という語はまず語彙分解規則が適用されることによって、(2-67b)のように、動詞句に再分析され、さらに、「同一命題削除規則」に基づいて、(2-67c)のように、左端の語だけが残される。

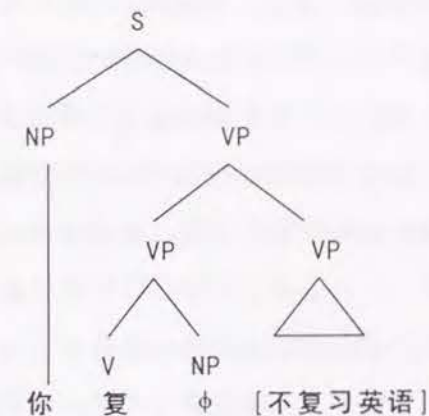
(2-67) a.



b.



c.



(2-64)に語彙分解規則が働いているという主張の理由は次の2つである。

第1に、(2-64)の[[复][不复习]]は、単に「复」という要素と「不复习」との組み合わせではなく、[[复习][不复习]]という形から派生してきたものであるということを示す現象がある。(2-58b)の同一命題削除規則によれば、左側の命題に削除が起こる場合、左端の動詞を残さなければならない。たとえば、(2-18)の「自己去」という動詞句の振る舞いを見よう。

(2-68) a. 你 自己去 不自己去？

君は自分で行くのか。

b. *你 自 不自己去？

(2-68a)の構文は、(2-58b)の同一命題削除規則が適用される以前の文である。一方、(2-68b)の構文が非文法的であるのは、名詞が残され、同一命題削除規則に違反するからである。ところが、合成動詞の場合は動詞句と異なって、名詞が残されるように見える。たとえば、(2-69)の「心烦」を見てみよう。

(2-69) a. 你 心烦 不心烦？

君は煩わしいか。

b. 你 心 不心烦？

同上。

合成語の中で、「心」が名詞で、「烦」が動詞である。(2-58b)の同一命題削除規則では、「心」だけが残されることは不可能である。ところが、(2-69b)は文法的である。(2-69b)が文法的であるのは、その「心」が「心烦」という合成語から[+V]の素性を受け継いだからだとし考えられない。このように、反復疑問文の[[A][不AB]]の形は[[AB][不AB]]から派生したものであると言える。この派生過程においては、語彙分解規則が適用されることが必要である。

第2に、(2-6)に示されたように、語彙分解規則は形式的な規則であり、語彙内部の意味関係と関係なく、適用される。これは、まさに、反復疑問文の同一命題削除規則と一致するところである。同一命題削除規則にも、片方の命題さえ残せば、ほかの命題要素を、語彙的意味と関係なく、最大限削除するという特徴がある。したがって、(2-9)に挙げた4つの意味関係を持つ4種類の合成語では、それぞれの片方の構成要素が削除されうる。たとえば、うえにあげた(2-69)の「心烦」は主述関係であり、後項要素が削除されている。また、次の(2-70)の「休息」は動補関係であり、(2-71)の「修改」は並立関係である。そして、(2-72)の「后悔」は修飾関係である。

(2-70) a. 你 休息 不休息？

君は休むか。

b. 你 休 不休息？

同上。

(2-71) a. 你 修改 不修改 论文？

君は論文を直すか。

b. 你 修 不修改 论文？

同上。

(2-72) a. 你 后悔 不后悔？

君は後悔するか。

b. 你 后 不后悔？

同上。

(2-70)～(2-72)の(b)に示されているように、それぞれの合成語の後項要素が削除されている。様々な意味関係を持つ合成語内部に削除が起こりうることは、語彙分解規則が形式的な規則であることを反映していると考えられる。

この節では、反復疑問文に意味的な二面性があることを指摘したうえで、その二面性は、2つの命題のうち真であるものを選択する面と、実質的に1つの命題の真偽値を求める面である。前者は動詞句連続の構造で捉えられ、後者は同一命題削除規則によって捉えられることを提案した。さらに、同一命題削除規則が適用されるようになるために、語彙分解

規則の適用が引き起こされることが必要であることを観察した¹⁷⁾。

¹⁷⁾ (2-6)の語彙分解規則は[-syllabic]という素性を持つ形態素を抱える合成語には適用できない。なぜなら、語彙分解規則は語をつくる規則であり、中国語の語は[+syllabic]という素性を持たなければならない。従来の研究では、「-r(儿)」と「huà(化)」が同じように、派生接辞として見られているが、[±syllabic]という点から見れば、両者の間に実質的な違いがある。「-r(儿)」は[-syllabic]の素性を持っているので、語になりえないのに対し、「huà(化)」は[+syllabic]の素性を持っているので、語になりうる。したがって、「-r(儿)」は語彙分解規則の適用を受けないが、「huà(化)」は語彙分解規則の適用を受ける

(i) a. 你 也 绿化绿化 校园。

あなたも校庭を緑化してみなさい。

b. 你 也 绿绿 化。

あなたも緑化してみなさい(口語的)

(ii) a. 你 也 玩儿玩儿。

あなたも遊んでみなさい。

b. *你 也 玩玩 儿。

「huà(化)」は語彙分解規則によって分解できるが「-r(儿)」は分解できないのは、同一命題削除規則が適用されうるかどうかによっても示されうる。

(iii) a. 你 到底 绿化 [不绿化]?

あなたはいったい緑化するのか。

b. 你 到底 绿 [不绿化]?

同上。

(iv) a. 玩儿 [不玩儿水]?

水遊びするか。

b. *玩 [不玩儿水]

(iii)が文法的であるのは、「化」が[+syllabic]の素性を持っているからであり、(iv)が文法的であるのは、「儿」が[-syllabic]の素性を持っているからである。

2-5. まとめ

この章では、まず最初に、中国語には語彙分解規則があることを論じた。その根拠として、次の3つを挙げた。第1に、合成語内部の2つの形態素と、分離している2つの要素とは同じ形式であり、類似した意味を持つこと、第2に、合成語の2つの形態素のうち、片方だけの削除が許されないのと同じように、分離している2つの要素のうち、片方の要素だけの削除が許されないことである。さらに、分離している2つの要素の両方またはどちらかが合成語の意味素性を受け継いでいるという現象が見られることをあげた。また、語彙分解規則のどちらのレベルで働くのかという問題について、語彙分解規則の適用が、語内部の要素と外部の語とを組み合わせるため、あるいは統語レベルの別の規則が働くようにするためであるという動機付けを持っていることから、語彙分解規則が統語レベルで働くと考えたほうが妥当であろうということを述べ、そのあと、それが働く3つのパターンを観察した。

語彙分解規則は、語彙レベルと統語レベルの間で重要な役割を果たしていると考えられる。つまり、語彙レベルで作られた合成語は統語レベルでは、不変な単位ではなく、必要に応じて再分析されうる単位であるということである。このような現象は中国語独自の特徴である。では、なぜ中国語にはこのような現象が存在するのか。この問題は中国語の(2-1)の特徴によって説明できる。すなわち、中国語では、1形態素が1語として振る舞うことができるばかりではなく、語には形態マーカがないので、この種の再分析を可能にしたわけである。さらに、中国語の(2-1)の性質を反映するようなものは語彙分解規則だけではなく、語形成と句形成の両方に関わる基本構造規則というものもある。この問題について、次の第3章で議論する。

第3章 句形成と語形成(3) — 基本構造規則

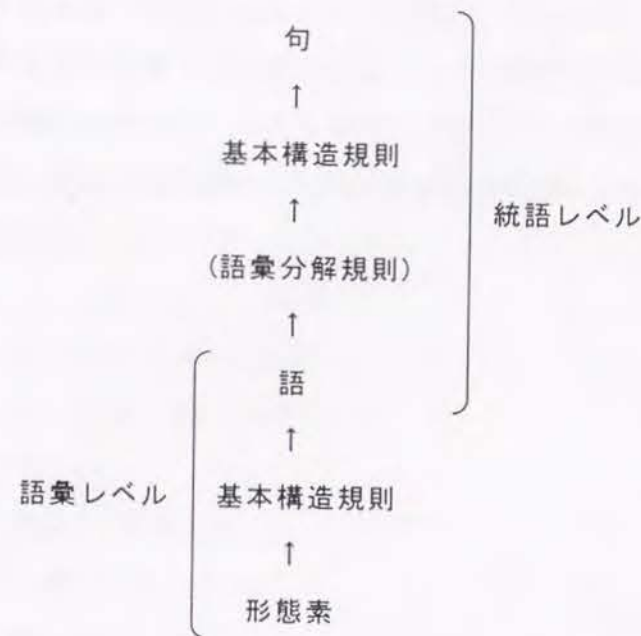
3-0. はじめに

序章においては、中国語には形態素がそのまま語として振る舞うことができるという特徴があることを述べた。この特徴は、さらに同じ要素が形態素として語を形成することができるばかりではなく、また語として句を形成することができるという解釈されることも可能である。この解釈は、中国語の語形成にしろ句形成にしろ、同じ要素の組み合わせとして、同じ形成規則があることを示唆する。この章では、中国語の句形成と語形成の共通点として(3-1)があることを提案する。

(3-1) 中国語において、句形成にも語形成にも同じ基本構造規則が働く。

つまり、中国語の文法構造においては、次のような構図が考えられる。

(3-2)



どの言語にもその言語の語順を決める基本的な構造規則がある。この章では、中国語の

基本的な構造規則は何かを考察し、そして、それが句形成にも語形成にも適用されることを論じる。具体的には、従来の研究の貢献と問題点を概観したうえで、新しい見解を提案する。この章は3つの節で構成されている。第1節では、中国語の基本的な構造規則に関する従来の3つのアプローチを紹介し、それらの問題点を指摘する。第2節では、意味関係と語順との対応によるアプローチを提案する。第3節では、第2節の提案が句形成にだけでなく、語形成に対しても働くことを議論する。

3-1. 3つのアプローチ

中国語の基本的な構造規則(生成文法では、句形成規則と言われているもの)は何かについて、従来3つの角度からアプローチされている。1つ目はGreenberg(1966)、橋本(1978)の言語類型論によるアプローチ、2つ目はHuang(1982, 1992)、Li, Y.-H. (1990)の生成文法によるアプローチ、3つ目はLi and Thompson(1981)の機能文法によるアプローチである。

3-1-1. 言語類型論によるアプローチ

言語類型論によるアプローチにおいて、まず言及しなければならないのは、Greenberg(1966)の研究である。Greenbergはその研究で、中国語を含む142の言語の語順を調べ、語順と関連して45の含意的普遍性を導きだしている。それを理想的な形にまとめると、(3-3)と(3-4)の2つのタイプになる(Li and Thompson 1981を参照)。

- (3-3) a. 語順がVOである。
b. その言語は前置詞をもつ。
c. 名詞を修飾する要素が主要名詞に後続する。
d. 副詞的な付加語は主要動詞や主要形容詞に後続する。
e. 助動詞は動詞に先行する。

- (3-4) a. 語順がOVである。
b. その言語は後置詞を持つ。
c. 名詞を修飾する要素が主要名詞に先行する。
d. 副詞的な付加語は主要動詞や主要形容詞に先行する。

e. 助動詞が動詞に後続する。

(3-3)の特徴は主要部頭位(head-initial)ということであり、(3-4)の特徴は主要部末位(head-final)ということである。周知のように、日本語は典型的に(3-4)の特徴を反映している言語である。しかし、(3-3)と(3-4)のような典型的なタイプに都合よく合う言語は少なく、多くの言語では(3-3)と(3-4)の特徴が入り混じっている(Huang1982を参照)。中国語も、(3-3)と(3-4)の特徴が混在している言語である。

(3-5) a. 张三 [打 李四]。 (3-3a)

毆る

張三は李四を毆る。

b. *张三 [李四 打]。

(3-6) a. 张三 [在 北京] 工作。 (3-3b)

いる

働く

張三は北京で仕事する。

b. *张三 [北京 在] 工作。

(3-7) a. 张三 [能 说日本话]。 (3-3e)

できる 話す

張三は日本語が話せる。

b. *张三 [说 日本话 能]。

(3-8) a. *这 是 [书 张三看的]。

これ BE動詞 本 読むの

b. 这 是 [张三看的 书]。 (3-4c)

これは張三の読んだ本だ。

(3-9) a. *张三 [出发了 立刻]。

実現相 すぐ

b. 张三 [立刻 出发了]。 (3-4d)

張三はすぐ出発した。

(3-5)では補部「李四」は動詞「打」の前に来てはならない。(3-6)では、側置詞¹⁾「在」は補部「北京」に先行しなければならない。(3-7)では、助動詞「能」は動詞句「说日本话」に先行しなければならない。これに対し、(3-8)では、関係節「张三看的」は主要名詞「书」に先行しなければならない。(3-9)では、副詞的要素「立刻」は主要動詞「出发」に先行しなければならない。以上見てきた中国語の特徴をまとめると、(3-10)になる。

(3-10) a. 動詞は補部に先行する。

b. 側置詞は補部に先行する。

c. 助動詞は動詞句に先行する。

d. 名詞は修飾部に後続する。

e. 動詞は修飾部に後続する。

(3-10a)～(3-10c)は(3-3)のタイプの言語の特徴を示し、(3-10d)と(3-10e)は(3-4)のタイプの言語の特徴を示す。中国語の語順はV0ではあるが、(3-3)の理想形には当てはまらない。

言語の語順の普遍性を明らかにするには、個別言語の語順を決めるメカニズムを解明することが先決である。これは極めて難しい課題である。大ざっぱに言えば、言語の語順を決める要因は、外的要因と内的要因に分けられる。外的要因は言語接触が起こる場合、語順はどういう規則で変化するのかということであり、内的要因は言語内部で語順を決めるメカニズムは何かということである。しかし、Greenbergの類型論は統計的に言語の語順の傾向を示すのに意義があるものの、言語の語順を決める外的または内的要因を解明す

¹⁾ 側置詞(adposition)は前置詞か後置詞を指す。側置詞は基本的に[-V, -N]の素性を持っているが、中国語にはそのような範疇がない。英語や日本語の側置詞に相当するクラスは[+V, -N]の素性を持ち、普通の動詞と同じクラスである。従来、そのようなものを「介詞」と呼んだり、「副動詞」と呼んだりする。それらは、補部をとって主要動詞の意味役割を果たすという機能を持っているという意味で側置詞と同様である。

るのにはほど遠いものであると言わざるをえない。つまり、なぜ、一部の言語が典型的語順(3-3)または(3-4)と一致するが、一部の言語がそうでないのかについて予測力がないのである。

中国語の語順の特殊性を言語接触の観点からアプローチする研究には橋本(1978)『言語類型地理論』がある。橋本の指摘によれば、アジア大陸において、北部に話されているアルタイ系の言語は、ツングース系であれ、モンゴル系であれ、トルコ系であれ、圧倒的に(3-4)のタイプである。これに対して、南部に話されている言語は、タイ諸語であれ、モン・クメール語であれ、大部分は(3-3)のタイプである。これに対して、地理的に両者の間に分布する中国語の諸方言は均一のタイプを示しているわけではない。すなわち、中国語では、動詞句は基本的に主要部頭位であるが、北方方言では、一般に動詞の修飾部がそれに先行するのに対し、南方方言では動詞に後続する。つまり、北方方言には主要部末位の特徴が見られるが、華南中国語には主要部頭位の特徴が見られる。これについて、橋本は次のような現象を示している。

第1に、副詞の生起の位置の違いである。広東語では、(3-11a)のように、「先」は動詞「俾」に後続するが、北京語では、(3-11b)のように、動詞「給」に先行する。

- (3-11) a. 我 俾 本 书 佢 先。
あげる 量詞 本 彼
 私は先に彼に本を1冊あげる。
- b. 我 先 给 他 一 本 书。
あげる 彼
 同上。

第2に、比較構文の違いである。広東語では、(3-12a)のように、「过佢」は形容詞に後続するが、北京語では、(3-12b)のように、「比他」は形容詞に先行する。

- (3-12) a. 你 高 过 佢。
あなた 過ぎる
 貴方は彼より背が高い。
- b. 你 比 他 高。
比べる

同上。

第3に、古代語と現代語の違いである。橋本によれば、動詞の修飾部は、古代語では動詞に後続するが、現代語では先行する²。例えば、(3-13a)の古代語では、補部「櫨」は動詞「樹」に後続するが、(3-13b)では補部「把楸樹」は動詞「种下」に先行している。また、(3-14)の「於夫淑」と「在夫淑」、(3-15)の「似二月花」と「比二月花」、(3-16)の「於子貢」「向子貢」などの、(形容詞を含む)動詞との位置関係における対立は、古代語と現代語の間に主要部頭位と主要部末位の違いがあることを物語っている。

- (3-13) a. 樹 吾 墓 櫨。
植える 私の ひさぎ
 ひさぎを私の墓に植える。(古代語)
- b. 把 楸樹 在 我的 坟墓 里 种下。
を ひさぎ 墓 植える
 同上。(現代語)
- (3-14) a. 吳 敗 越 於 夫淑。
敗る 地名
 呉は越を夫淑でやぶった。(古代語)
- b. 吴军 在 夫淑 把 越军 打败 了。
敗る
 同上。(現代語)
- (3-15) a. 霜葉 紅 似 二月花。
より
 紅葉は二月の花より赤い。(古代語)
- b. 霜叶 比 二月花 更 紅。
 同上。(現代語)

² 橋本(1978)は動詞の補部を修飾的要素として扱っているようである。

- (3-16) a. 子禽 問 於 子貢。
向かって
 子禽は子貢に尋ねた。
 (古代語)
- b. 子禽 向 子貢 問。
 同上。
 (現代語)

橋本は南部のタイ諸語と北部のアルタイ諸語の差と、南部方言と北部方言の差及び古代語と現代語の差との平行性に注目し、中国語は現在(3-3)のような主要部頭位タイプから(3-4)のような主要部末位タイプへと変化している段階であると指摘している。この変化の要因は地理的にアルタイ系言語に近いのか、モン・クメール系言語に近いかにあると主張しているようである。この観察から、言語接触が中国語の語順の成立の要因となることが伺える。しかし、たとえその観察が正しいとしても、中国語の南部方言とタイ系諸語、北方方言とアルタイ諸語はそれぞれどのような言語接触によって類似した語順になったのかという問題はまだ実証されていない³⁾

3-1-2. 生成文法によるアプローチ

内的要因の研究に関しては、まず、生成文法によるアプローチをとりあげよう。生成文法では、各言語の語順の相違は形式的な規則によって捉えることを目指している。Xバー理論はその代表である。その理論の基本は、Stowell(1981:87)によれば(3-17)になる。

- (3-17) a. Every phrase is endocentric.
 b. Specifiers appear at X'' level; subcategorized complements appear within X' .
 c. The head always appears adjacent to one of the boundaries of X' .
 d. The head term is one bar-level lower than the immediately dominating phrasal node.
 e. Only maximal projections may appear as nonhead terms within a phrase.

³⁾ このような言語接触に関する問題は筆者にとって手に負えるような問題ではないので、本論文では特に議論されない。

(3-17)はXバー理論の基本的なバージョンである。各言語で同じ原理が適用され、それぞれの語順の相違はパラメータのセッティングによって説明されている。例えば、日本語は主要部末位の言語であり、その句構造規則は(3-18)のようになろう。

- (3-18) a. $XP \rightarrow WP X'$
 b. $X' \rightarrow ZP X'$
 c. $X' \rightarrow YP X^0$

(3-18a)のWPは指定部(=主語)であり、(3-18b)のZPは付加部(=修飾部)であり、(3-18c)のYPは補部であると規定している。

しかし、(3-17)のようなXバー理論をそのまま中国語に適用すると、日本語のようにすっきりとはいかない。例えば、中国語の名詞句構造は(3-18)で導かれるが、動詞句構造については(3-19)である。つまり、異なる範疇では、主要部の位置も異なるということである。

- (3-19) a. $XP \rightarrow WP X'$
 b. $X' \rightarrow ZP X'$
 c. $X' \rightarrow X^0 YP$

- (3-20) a. 召开 会议
 会議を招集する
 b. 会议的 召开
 会議の招集

(3-20)の日本語訳から分かるように、日本語では主要部が動詞であろうが名詞であろうが、その補部との語順は同じである。しかし、中国語では主要部の文法範疇に関わっている。もし主要部が動詞であれば、「会议」は動詞の右側に来なければならないが、もし主要部が名詞であれば、「会议」は名詞の左側に来なければならない。

言語の語順を形式的に捉えるというXバー理論の核心を否定せずに、この問題を解消さ

せるためには、2つの可能性がある。1つはXバー理論が語順に対して果たす役割を狭めることである。すなわち、中国語の語順の形成にはXバー理論以外に、他の要因が関わっているという可能性である。もう1つはXバー理論を改訂することである。例えば、異なるレベル、異なる範疇で異なる語順の存在を認めることである。従来の研究では、Li, Y.-H. (1990)は前者の立場に立ち、Huang (1982, 1992)は、後者の立場に立っている。しかし、どちらにも問題点があり、本論文の立場から見れば、言語の形式面ばかり求めるXバー理論の姿勢自体に問題があるのではないと思われる。

Li, Y.-H. (1990:11)の考え方は、中国語の語順における格理論の原理の関与を指摘し、(3-21)の提案を示している。

(3-21) The Chinese Word Order Constraint

- a. Chinese is head-final except under the requirements of Case assignment.
- b. Case is assigned from left to right in Chinese.
- c. A Case assigner assigns at most one Case.

彼女の枠組みでは、中国語の語順は日本語の(3-18)と同じように範疇のいかに関わらず、主要部末位であるが、中国語では左から右へ格付与されているので、(3-18c)に対応する語順において、YPが格を満たすためには、主要部である X^0 の右側へ移動しなければならないと説明されている。Liの枠組みによれば、(3-17)に述べたStowell (1981)の提案を改訂せずに、格理論を導入することによって上に述べた中国語の語順に関する問題を説明することができる。すなわち、主要部の位置に関する範疇の不統一性は格理論で説明できる。なぜなら、格理論では動詞や前置詞は格付与者(Case assigner)であるが、名詞は格付与者ではないと規定しているからである。

しかし、Liの提案では中国語の(3-10a) (3-10b) (3-10d) (3-10e)の特徴を説明することができても、(3-10c)の特徴が説明できない。例えば、次の(3-22a)では、VP「去北京」は動詞「想」の補部である。(3-21a)によれば、(3-22a)の基底構造は(3-22b)である。一方、格理論の原理によれば、NP「北京」は格を付与されるもの(Case assignee)であるが、VP「去北京」は格を付与されるものではない。したがって、「去北京」は名詞句と違って右へ移動する必要がなく、(3-22c)が文法的であると予測できる。しかし、事実は逆である。

- (3-22) a. 想 去 北京
 願望動詞 行く
 北京に行きたい。
 b. [[北京去]想]
 c. *去 北京 想

この観察から、格理論とXバー理論の組み合わせでも中国語の語順を完全に捉えられないことがわかる。

一方、Huang (1982, 1992)は中国語における(3-10)の諸現象を捉えるために、Xバー理論を改訂しなければならないと考えている。すなわち、中国語では動補構造以外の基本語順は主要部末位であり、すべてのNPは主要部末位であると主張している。Huangが提案する中国語のXバー構造を(3-23)に示す(Huang 1982:41)。

(3-23) The X' -structure of Chinese is of the form

- a. [$x_n X^{n-1} Y P^*$] iff $n=1$, $X \neq N$
- b. [$x_n Y P^* X^{n-1}$]

X' refers to X and its subcategorized complements (N/V/A/P and their subcategorized complements). $Y P^*$ means more than one $Y P$ is allowed.

Huangは2つの点で(3-17)のような典型的なXバー理論を改訂している。第1に、範疇の違いによって語順の違いがあることを認める。(3-23)は、動詞句なら主要部頭位となり、名詞句なら主要部末位となると規定している。第2に、バーのレベルによって語順の違いがあるとする。(3-23a)では、同じ動詞句は主要部がゼロレベルの構成素ならば、主要部頭位であるが、そうでなければ、主要部末位であると考えている。

HuangのXバー構造は(3-17)のXバー理論より中国語に対して説明力がある。例えば、(3-20)のような範疇の違いによって語順が違ふことは(3-23)で予測できる。したがって、HuangのXバー改訂版は中国語の(3-10)の特徴を基本的に捉えているように思われるだろう。

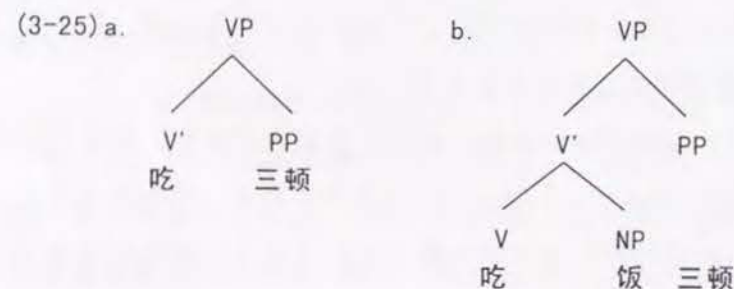
しかし、Huangの提案は理論的にも経験的にも問題がある。理論的な問題点は簡単に言えば、(3-17)のXバー理論に比べて煩雑であるということである。例えば、Xバー構造が

異なるレベルに異なる語順があると規定することを受け入れたとしても、個別言語において、Nが他の範疇と異なる振る舞いをすると規定することはad hocだと考えざるを得ない。例えば、Huangの改訂版では、V、N、A、Pのそれぞれの範疇の語順が異なることは許されるが、果たしてそれに該当する言語があるのだろうかという疑問が生じる。したがって、Huangの改訂版は生成文法の目指している普遍文法の語順を設定しているとは言い難い。

さらに重要なことは、(3-23)の構造には経験的な不備があるということである。(3-23)の規定では、動詞に要求されているものは動詞に後続するが、そうではないものはそれに先行しなければならない。しかし、中国語の数量詞は動詞に要求されていない(Chao1968を参照)にも関わらず、動詞の直後に現れる。

- (3-24) a. 张三 吃了 三顿。
 食べる 量詞
 張三は3回食事をした。
- b. *张三 吃了 飯 三顿。

(3-24)に示されているように、数量詞「三顿」は動詞の後の補部「飯」が生起する位置にだけ生起する。この事実を、Huangは次のように説明している。(3-24a)が文法的であるのは、(3-25a)に示されるように、「三顿」がもっとも低い枝分かれのレベルに現れているからであり、(3-24b)が非文法的であるのは、(3-25b)のような「三顿」が現れているレベルがもっとも低い枝分かれのレベルではないからである。



すなわち、中国語の語順がXバーのレベルによって異なるのではなく、枝分かれのレベルによって異なると説明されている。しかし、この説明にも明らかに反例が見られる。Li,

Y.-H. (1990)では、次の例が出されている。

- (3-26) a. *这件事, 他 说 对 我 了。
 言
 このことは、かれは私に言った。
- b. 这件事, 他 对 我 说 了。
 同上。

(3-26a)は(3-25a)の構造を持つが、Huangの予測とは異なり、実際は非文法的である。動詞に要求されていないものは、すべて最も低い枝分かれにおいて動詞に後続できるとは限らないのである。Huang(1992)では持論を修正し、数量詞「三顿」を「吃」の補部として扱っているが、要素間の意味関係を論じないかぎり、なぜ数量詞が動詞の補部なのかという問題は相変わらずつきまとうであろう。

少なくともいままで提案されてきたXバー理論で、中国語の語順の特徴を完全に捉えつつ、普遍性を持たせることは困難である。なぜなら、従来のXバー理論によるアプローチは意味的要素が語順を決めることを認めていないからである。

3-1-3. 機能文法によるアプローチ

さらに、言語の語順を決める内的要因の解明にLi and Thompson(1981)の機能文法的なアプローチがあげられる。かれらの説は生成文法と異なり、語順が意味的要因で決められるというところに特徴が見られる。具体的には、語順は構成素が特定か不特定か、または、要素が示すイベントの発生時間の前か後かによって決められる。特定不特定に関しては、3つの現象が取り上げられている⁴。第1に、主語名詞句の位置はそれが特定か否かによって決められる。例えば、

- (3-27) a. 人 来 了。
 人が来た。

⁴ 「特定・不特定」や「定・不定」の概念については、詳しくHuang(1987)を参照されたい。

b. 来 人 了。

誰かが来た。

(3-27a)の「人」は特定の人を表すが、(3-27b)の「人」は不特定の人を表す。

第2に、副詞的な要素の位置もそれが特定か否かによって異なるということがある。

(3-28) a. 我 八点钟 开会。

八 時

私は八時に会議を開く。

b. *我 开会 八点钟。

(3-29) a. 我 睡了 八个 钟头。

量詞 時間

私は八時間寝た。

b. *我 八个 钟头 睡了。

(3-28a)の「八点钟」は特定を示し、(3-29a)の「八个钟头」は不特定を示す。この点が両者の分布の違いに関与している。

第3に、時間的に先に起こるイベントを示す動詞句が時間的に後に起こるイベントを示す動詞句に先行しなければならない。例えば、

(3-30) a. 张三 在 垫子上 跳。

マット

張三はマットでジャンプした。

b. 震三 跳 在 垫子上。

張三はマットにジャンプした。

(3-30)では、「在垫子上」という場所設定は時間的にジャンプする前に発生すれば、「跳」に先行するが、ジャンプする後に発生すれば、「跳」に後続すると指摘されている。

中国語の語順を決めるのに意味的な要素が関わっているというLi and Thompsonの主張は考慮に値する。なぜなら、3-1-2節で見たように、Li, Y.-H. (1990)のような、純粋に形

式的な研究だけでは語順の特性が捉えられないからである。問題は、中国語の統語構造にはどんな意味関係がどのように関与しているのかということである。本論文では、特定不特定や時間的前後というような概念だけでは、中国語の統語構造が決められないと考える。たとえば、名詞句と修飾部の関係は必ず主要部末位であるが、動詞と補部の関係は必ず主要部頭位であることは、特定不特定、時間的前後と無関係であるが、なぜそうであるのかを説明できないであろう。

3-2. 意味関係と語順の対応

従来の研究について前節で検討してきたことからわかるように、生成文法からのアプローチのごとく、言語の形式的な面にだけ注目しては、言語の語順を決めるメカニズムをとらえることができない。すなわち、言語の語順を決めるメカニズムには意味的要因が関与している。かといって、その意味的要因はLi and Thompsonの提案したような定不定、時間的前後というものだけで決まるものでもない。では、どのような意味関係が語順と対応しているのだろうか。

3-2-1. 提案

中国語の構成素構造は基本的に内心構造である。したがって、中国語には、主要部末位、主要部頭位、主要部両位の3つの構造が考えられる。しかし、構成素間の意味関係は様々なパターンがある。例えば、まず、被叙述と叙述の関係、次に、修飾と被修飾の関係、第3に、動作とその補部の関係、最後に、被接続要素の対等な関係である。本論文では、要素間の意味関係と語順との対応から中国語の構成素構造を捉えなければならないと考え、(3-31)の基本構造規則を提案する。

(3-31) 中国語の基本構造規則

- a. 主述関係、修飾関係では主要部末位である。
- b. 動補関係では主要部頭位である。
- c. 並立関係では主要部両位である。

(3-31)は基本的に、従来のXバー理論に基づく提案と次の点で異なる。Xバー理論では言語の形式的な面だけを捉えようとするが、本提案では、意味と形式との対応関係を捉えよ

うとする。具体的には、まず、Li, Y.-H. (1990)の(3-21)の提案と次の点で異なる。中国語の語順を説明するために、(3-21)では、意味的要素を排除し、形式的な格理論を導入しているが、本提案では逆に形式的な格理論を排除し、意味的要素を取り入れる。本提案はまた、2つの点でHuang(1982)の(3-23)の提案と異なる。まず、(3-23)の提案では、語順を決めるには構成素の範疇という概念が必要であるが、本提案では必要ではない。この枠組みでは、(3-20b)のような名詞句の意味関係は修飾関係であると説明する⁹。また、(3-23)の補部は動詞の下位範疇化にかかわっているものでなければならないと規定している。すなわち、Huangの補部は2項動詞に要求されている構成素でなければならないが、本提案の補部は動詞の示すイベントを完成させる構成素であり、動詞に要求されるものの以外の構成素も考えられる。例えば、(3-24)の数量詞「三顿」はHuang(1982)で付加部(修飾部)として扱われているので、説明できないのに対し、本提案では数量詞を補部として扱うので説明できる。すなわち、(3-24)の「三顿」は動詞「吃」の補部でなければならないので、補部の位置からはずされた(3-24b)は非文法的なのである。

最後に、本提案は構成素間の意味関係を考慮する点、そして、語構造と句構造を一緒に扱う点で、Lieber(1992:38)のXバー理論の改訂版と平行する。Lieberの提案を示すと、(3-32)になる。

(3-32) a. $X^n \rightarrow \dots X \{^{n-1} \dots\} \dots$, where recursion is allowed for $n=0$.

b. Licensing Conditions

i. Heads are initial/final with respect to complements.

—Theta-roles are assigned to left/right.

⁹ Li, Y.-H. の取り上げた(3-20)の現象は、(3-31)の基本構造規則によれば、次のように説明できる。「召开」と「会议」の意味関係は(3-20a)では動補関係として捉えられ、(3-20b)では修飾関係として捉えられている。両者の語順上の違いはその意味関係の違いを示している。これは次の(a)と(b)の違いと平行する。「这件事」は(a)では動詞の修飾部として捉えられ、(b)では動詞の補部として捉えられる。

(i) a. 对 这件事 很 担心 このことに対してとても心配する

b. 很 担心 这件事 このことをとても心配する

—Case is assigned to left/right.

ii. Heads are initial/final with respect to specifiers.

iii. Heads are initial/final with respect to modifiers.

c. Pre- or post-head modifiers may be X^{MAX} or X^0 .

しかし、本論文の主張はまた、次の2つの点で(3-32)とは異なっている。第1に、LieberはTravis(1989)の中国語の語順の認可には格の導入が必要であるという説に基づいて、(3-32b)の認可条件に格という概念を導入しているが、3-1-2節での考察から分かるように、中国語の語順の認可に格の概念は必要ない。第2に、Lieberの導入した意味関係は一貫性に欠けるが、(3-31)の提案には一貫性があるということである。生成文法では、一般に指定部(specifier)とは最大投射を閉じるという統語的機能を持つものと考えられている(詳しくは由本・正木1994を参照)が、主要部-指定部の関係は、意味的な関係としても捉えられる主要部-修飾部、主要部-補部の関係とは違い、一律に扱うのは難しい。

本提案における構成素間の意味関係は次のように定義される。主述関係は主語と述部に分けられ、述部は主語について何事かを述べる陳述の構成素であり、主語は述部から何事かを述べられる構成素である。動補関係は動詞と補部が含まれ、動詞は行為、状態、状態変化などを示す構成素であり、補部は述部のレベルで動詞の示すイベントを補完する構成素である。修飾関係には修飾部と被修飾部に分けられ、修飾部はある要素の潜在的指示性を限定する構成素であり、被修飾部は修飾部の限定を受ける構成素である。

(3-31)の提案に基づいて中国語の(3-10)の特徴が次のように捉えられる。(3-10a)の動詞、(3-10b)の側置詞、(3-10c)の助動詞は[+V]の素性を持ち、それらと後続要素の意味関係が動補関係であるので、主要部頭位である。また、(3-10d)と(3-10e)における要素間の意味関係は修飾関係であるので、主要部末位である。また、(3-10f)の要素間の意味関係が並立関係なので、主要部両位である。但し、(3-31)の提案には、主要部とは何かという問題があるが、それについては次の節で議論したい。

3-2-2. 主要部性(headness)

アメリカ構造言語学およびその後の生成文法にとって、主要部はなくてはならない重要な概念である。Bloomfield(1933:195)は言語の形式的な側面から主要部を次のように定義している。

(3-33) In subordinative endocentric constructions, the resultant phrase belongs to the same form-class as one of the constituents, which we call the head.

Bloomfieldはpoor JohnがJohnと同じ形式部類(form-class)に属するから、Johnが主要部であり、poorは限定部であると説明している。では、形式部類とは何であろうか。1950年代以降、Chomskyの生成文法が誕生し、言語の意味的な側面が重視されるようになり、1980年代になって、Williams(1981a:247)は意味的な側面から主要部を次のように定義している。

(3-34) If both X and the head of X are eligible members of category C , then $X \in C \equiv \text{head of } X \in C$.

(3-34)は、 X と同じ範疇を持つ下位要素が X の主要部であるということである。この定義から分かるように、 X と X の主要部が形式部類において同じであるのではなく、範疇が同じであるということである¹⁶。例えば、名詞が名詞句の主要部であるのは、両者とも+Nという範疇を持っているからである。ところが、Williamsの定義では、英語のsee-s(3人称単数現在)のような語内部でどちらが主要部かが説明できない。なぜなら、品詞の観点から見れば、seeの[+V]の素性がseesと同じなので、seeが主要部であるが、数の観点から見れば、sの[+単数]の素性がseesと同じなので、sが主要部であるといえるからである。その後、Di Sciullo and Williams(1987)は、言語の構造には相対的主要部があることを提案し、それを次のように定義している¹⁷。

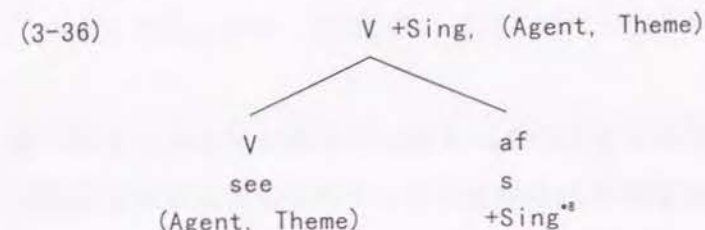
¹⁶ 筆者はWilliamsのcategoryを語の品詞性として理解している。例えば、生成文法では、普通英語の品詞を次のように整理されている。動詞は[+V, -N]という素性を、名詞は[-V, +N]を、形容詞は[+V, +N]、前置詞は[-V, -N]を、それぞれ持っている。

¹⁷ ただし、筆者は、右側主要部規則に対して否定的な立場をとる。

(3-35) Definition of "head^F" (read: head with respect to the feature F)

The head^F of a word is the rightmost element of the word marked for the feature F .

Di Sciullo and Williams(1987:28)は、(3-35)に基づいて、seesの主要部を次のように説明している。



品詞性の観点から見れば、seeが主要部であると言える。なぜなら、seeの品詞および項構

¹⁸ ただし、sの素性は、Di Sciullo and Williamsのように単数だけではなく、3人称現在も含まれている。

造 (Agent, Theme) が see-s と同じだからである⁹。一方、s の持っている +Sing の素性が see-s に受け継がれるため、s も主要部であると言える。すなわち、s は相対的な主要部である。下位単位と上位単位の意味素性の一致から主要部を判断しようとする彼らの見方は評価すべきであるが、彼らの分析では、主要部と非主要部の共通の属性が十分捉えられていないと思われる。ここで言う属性は、例えば、品詞性、数、格、項構造、アスペクトなどの文法範疇が含まれる。主要部と非主要部の間は必ず同じ属性によって特徴づけられなければならない。なぜなら、同じ属性を持たない、2つの要素の間ではどちらが主要部、どちら

⁹ 統語レベルには句構造があるのと平行して、意味レベルには項構造がある。また、句構造には主語の位置と補部の位置という区別があるのと平行して、その元となる項構造においても意味役割間の区別／階層があるとする考えが広く受け入れられている (Williams 1980, 1981a, b, Grimshaw 1990, Li, Y.-F. 1990 など を参照)。この提案を支持する現象としては英語の N-V 複合と日本語の形式動詞 (light verb) などがある。

- (i) a. gift-giving to children.
b. *child-giving of gifts.
- (ii) a. Book-reading by students
b. *Student-reading of books

(i) の (a) と (b) の文法性の違いは、theme "gifts" が goal "children" より先に割り当てられることを示し、(ii) の (a) と (b) の文法性の違いは theme "book" が agent "student" より先に割り当てられることを示す。また、英語の N-V 複合に見られる現象は日本語の形式動詞 [する] にも見られる (なお、詳細は Grimshaw and Mester (1988) 参照)。

- (iii) a. 張三が われわれに [[彼の理論が間違っていると] の証明] をしている。
b. *われわれに [彼の理論が間違っていると] [張三の証明] をしている。

ゆえに、give、read のような動詞に関して、意味役割の順序は (iv) の内部構造を持つと仮定されている。

- (iv) a. give <agent <goal <theme>>>
b. read <agent <theme>>>

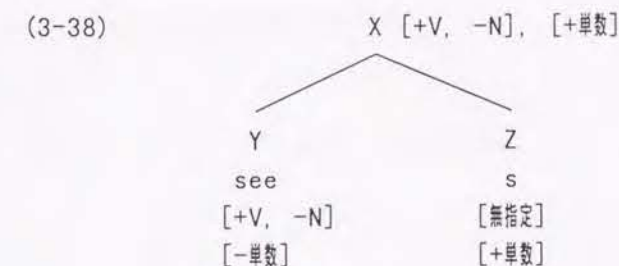
Williams (1981b) では、一番外側の項 (agent) を外項、それ以外の項を内項と呼んでいる。本論文でもこの呼び方を援用する。

が非主要部かを比較する意味がないからである。see は品詞性 (±N, ±V) を持っているが、s は品詞性を持っていないので、両者の間に品詞性における主要部と非主要部という関係は成立しない。

本論文では、Di Sciullo and Williams (1987) の (3-35) の定義からヒントを得て、主要部はその意味素性が上位の単位へ継承されると考え、主要部を次のように定義する。

(3-37) X の下位単位 Z と Y が同じ属性によって特徴づけられ、かつ異なる意味指定 (+, - の値) がある場合、X が継承している意味指定を持つ下位単位が X の主要部である。

(3-37) では、主要部の認定には 2 つの条件が付け加えられた。1 つは、X の下位単位 Z と Y が同じ属性によって特徴づけられなければならない。上に挙げられた sees は次のように分析することができる。see は品詞性という属性を持っているが、s は持っていない。言い換えれば、s は品詞性に関して無指定 (unspecified) である。したがって、両者の間に品詞性についての主要部と非主要部という関係が成立しない。一方、see と s は両方とも数という属性を持っている。see は [-単数] を持ち、s は [+単数] を持つ。したがって、両者の間に数に関して、主要部と非主要部という関係が成立する。実際、sees には s の [+単数] の素性が継承されているので、s が主要部である。次の図を見られたい。

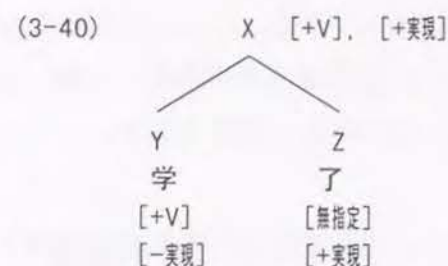


中国語にも似たような現象が見られる。例えば、中国語には (3-39) の文がある。

- (3-39) 张三 学了 日语。
張三が日本語を学んだ。

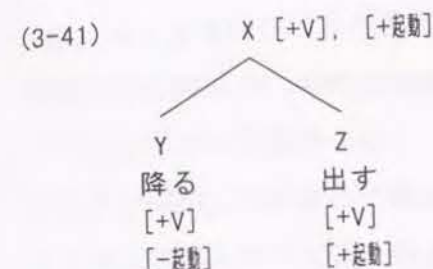
「学」は品詞の指定があるが、「了」にはその指定がない。したがって、品詞性に関して

は、「学」と「了」の間に主要部と非主要部という関係が成り立たない。一方、「学」も「了」もアスペクト性を持っている。「学」には非実現(irrealis)という指定があり、「了」には実現(realis)という指定がある^{*10}。「学了」には[+実現]の素性が継承されているので、「了」が主要部であると言える。次の図を見られたい。



主要部の認定におけるもう1つの条件は、Xの下位単位ZとYが異なる意味指定を持たなければならないということである。というのは、両方とも同じ意味素性の指定を持つ場合、どちらの意味素性の指定が上位単位に継承されているのかが判断できないからである。例えば、日本語の「降り出す」の場合、品詞性から見れば、「降る」も「出す」も[+V]なので、どちらの意味素性が「降り出す」に継承されているのかが分からない。ところが、アスペクト性から見れば、「降る」は[-起動]の素性を持っているが、「出す」は[+起動]を持っている。「降り出す」に[+起動]の素性が継承されているので、「出す」が主要部であることがわかる。

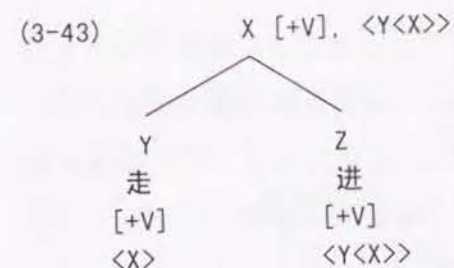
^{*10} 中国語のアスペクトには実現対非実現(realis/irrealis)の対立がある。この概念は中国語文法書でよく使われるが、明確な定義はされていない(刘他1983を参照)。ここでは、ある行為、または、事柄が発生したか否かに関するアスペクトであると理解されたい。また、「実現相」には、「了」の完了、「着」の持続、「过」の経験が含まれる。それらはともにある行為が遂行され、または、事柄が発生したことを示す。



中国語にも似たような例が見られる。「走进(歩いて入る)」を見てみよう。

- (3-42) a. *张三 走 教室。
 b. 张三 进 教室。
 張三は教室に入る。
 c. 张三 走进 教室。
 張三が教室に歩いて入る。

品詞性から見れば、「走」も「进」も動詞なので、どちらの[+V]の素性が「走进」に継承されているのかがわからない。ところが、項構造の観点から見れば、「走」は<X>という項構造を持っているが、「进」は<X<Y>>という項構造を持っている。(3-42)に示されているように、「进」の項構造が「走进」に継承されているので、「进」が主要部であると言える。次の図を参照されたい。



次に、上で議論された(3-37)の主要部の概念に基づいて、(3-31)の基本構造規則を検証しよう。

3-2-3. 数量詞の機能と分布

(3-31)の基本構造規則の反例になりそうな現象が2つある。1つは、数量詞と動詞の意味関係は何か。なぜ一部の数量詞は動詞に後続するが、一部の数量詞は動詞に先行するのか。もう1つは、一般に前置詞句(介詞句)は動詞の修飾部であるため、動詞に先行しなければならないが、そのような前置詞句が動詞に後続する場合もあるのはなぜかという問題である。まず前者の問題から見ていこう。

補部は一般に動詞から意味役割を付与され、動詞に要求される構成素であるが、それだけではない。中国語では、動作の期間や回数を示す数量詞(以下、この種の数量詞を動量詞と呼ぶ)は動詞の補部として機能することがある。まず、動量詞が動詞に後続しなければならないことを見てみよう。

(3-44) a. *张三 五天 旅行。
動量詞

b. 张三 旅行 五天。

張三は5日間旅行する。

(3-45) a. *张三 五次 旅行。
動量詞

b. 张三 旅行 五次。

張三は5回旅行する。

問題は(3-44)の「五天」と(3-45)の「五次」は問題の構文ではどのような機能をもっているのかということである。Li and Thompson(1981)はこのような動量詞を動詞の修飾部と見ているが、その理由は特に議論されていない。また、Huang(1982)のように、補部が動詞に要求されるようなものであると定義すれば、このような動量詞は補部から排除されなければならない。しかし、Huang(1992)では、それらを補部として扱っている。もし動量詞を補部として認めるならば、補部に対する定義を明確にしなければならない。本論文では、補部が動詞の示すイベントを補完する要素だと定義し、(3-44)と(3-45)のような動量詞は動詞の示すイベントに対して区切りを示すものであると考える。その1つの理由は名詞の分量を示す数量詞(以下この種類の数量詞を名量詞と呼ぶ)と同じ機能を果たすからで

ある。もし名量詞が補部であると見れば、動量詞も補部と見なければならない。(3-46a)は動量詞であり、(3-46b)は名量詞である。

(3-46) a. 张三 唱过 一次。
動量詞

張三は1回 歌ったことがある。

b. 张三 唱过 一支。
名量詞

張三は1曲 歌ったことがある。

意味的に考えれば、(3-46a)の「一次」は動作の回数を示し、(3-46b)の「一支」は歌の曲数を示す。もし動量詞を動詞の修飾部の位置と対応させ、名量詞を動詞の補部の位置と対応させるならば、両者の分布の位置が異なるので、共起できると予測されるかもしれない。ところが、実際には(3-47)に示すように、両者は共起できない。

(3-47) a. *张三 唱过 一次 一支。

b. *张三 唱过 一支 一次。

張三は1曲を1回歌ったことがある。

(3-46a)と(3-47a)、(3-46b)と(3-47b)の文法上の対立は、動量詞と名量詞が統語構造において同じ分布を示すこと、つまり同じ位置にあることを意味する。

同じ位置にあることは、両者が共通する機能を持っていることを示唆する。その機能はすなわち動詞の示すイベントの区切りを示すものである。中国語の数量詞にそのような機能があることは、数量詞がイベントの進行中を示す「在」と共起しないことから伺える。(3-48)のように、「在」と数量詞「三碗、三顿」が別々に使われている文は文法的であるが、(3-49)のように、両者が共存している文は非文法的である。

(3-48) a. 我 在 吃 饭。

私はご飯を食べている。

- b. 我 吃了 三碗 饭。

名量詞

私はご飯を三杯食べました。

- c. 我 吃了 三顿 饭。

動量詞

私はご飯を三回食べました。

- (3-49) a. *张三 在 吃 三碗 饭。

張三がご飯を三杯食べている。

- b. *张三 在 吃 三顿 饭。

張三がご飯を三回食べている。

「三碗」と「三顿」が「在」と共起しないのは、イベントの区切りを示すこととイベントの連続性を示すことが意味的に矛盾するからである¹¹⁾。したがって、(3-46a)の「一次」に対しても(3-46b)の「一支」に対しても「歌う」というイベントの量が1回分、1曲分だと説明することができる。

動量詞が動詞の補部であることの第2の理由は、名詞的補部が生起する場合、動量詞は

¹¹⁾ もちろん、名量詞は、「量詞+名詞」のように名詞句をなす場合、その名詞句の意味が定または特定であれば、数量詞は動作の区切りを示す機能が弱められ、ただの連体修飾語にしか考えられない。その場合、数量詞と「在」が共起可能である。例えば、

- (i) a. *张三 在 吃 3个 苹果。

張三は3つのリンゴを食べている。

- b. 张三 在 吃 那 3个 苹果。

張三はあの3つのリンゴを食べている。

- c. 张三 在 吃 3个 又大又甜的 苹果。

張三は3つの大きくて甘いリンゴを食べている。

不特定を示している(a)の補部名詞句は「在」と共起しないが、定を示している(b)の補部名詞句と、特定を示している(c)の補部名詞句は「在」と共起する。

名量詞と同じように、その補部と構成素をなさなければならないことである¹²⁾。

- (3-50) a. 张三 唱过 一次 歌。

張三は歌を1回歌ったことがある。

- b. 张三 唱过 一支 歌。

張三は歌を1曲歌ったことがある。

- (3-51) a. *张三 唱过 歌 一次。

- b. *张三 唱过 歌 一支。

(3-50)が文法的であるのは、「一次歌」「一支歌」が構成素をなして補部の位置を占めているからであり、(3-51)が非文法的であるのは、「歌一次」、「歌一支」がそれぞれ構成素をなさず、それらの数量詞が補部の位置を占めていないからである。

「一次歌」「一支歌」が構成素をなしていることは次の現象から明らかになる。中国語では、補部は通常動詞に後続するが、「连～」が補部に付加される場合、「连+補部」は述部の前に前置される。

- (3-52) a. 张三 没 唱过 歌。

張三は歌を歌ったことがない。

- b. 张三 连 歌 也 没 唱过。

さえ また

張三は歌さえ歌ったことがない。

同様に、動詞に後続する数量詞の場合は、名量詞であろうが動量詞であろうが、補部名詞句とともに述部の前に前置される。

- (3-53) a. 张三 连 一支歌 也 没 唱过。

¹²⁾ 朱(1982, 1986)、Huang(1992)を参照されたい。

張三は歌を1曲も歌ったことがない。

b. 张三 连 一次歌 也 没 唱过。

張三は歌を1回も歌ったことがない。

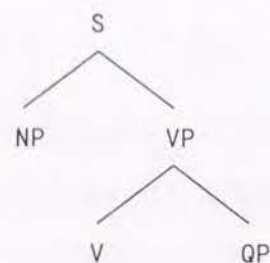
しかしながら、補部だけを動詞の後に残してはならない。

(3-54) a. *张三 连 一支 也 没 唱过 歌。

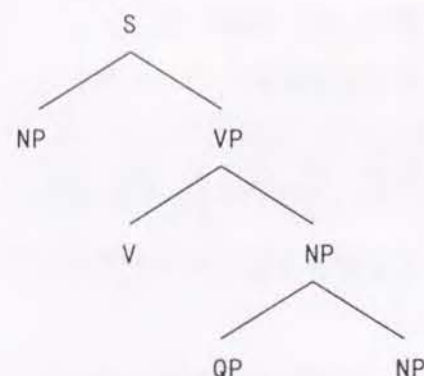
b. *张三 连 一次 也 没 唱过 歌。

結局、表面上、動量詞は動作の分量を示し、名量詞は名詞の分量を示すように見えるが、実質的には、両者はともに動詞の示すイベントの分量を示し、そのイベントを補完する機能を持っているので、同じように補部として機能すると考えられる。動詞の項を担う名詞句が生起する場合、数量詞はその名詞句と構成素をなす。もしLieber(1992:38)、Huang(1982:41)のように補部を動詞に要求される項であると定義すれば、動量詞と名量詞の間の共通性及び数量詞と名詞句の間の共通性が捉えられなくなる。ここで、数量詞の分布を(3-55)に示す。(QPは数量詞を指す)

(3-55) a.



b.



ところが、以上の分析の反例ともとれるような現象が見られる。動量詞が(3-56a)のように、補部が定であれば、その補部に後続するような例もある。(3-56b)の非文法性から分かるように、「李四」と「一次」は1つの構成素の振る舞いをしていない。補部の位置は1つしかないので、「一次」は補部として考えにくい。

(3-56) a. 张三 打了 李四 一次。

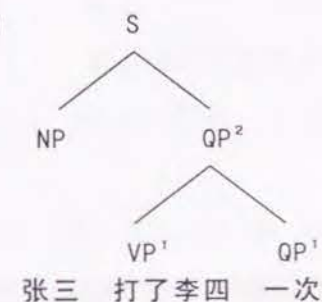
張三は1回李四を叩いた。

b. *张三 连 李四 一次 也 没 打。

張三は1回も李四を叩かなかった。

そこで、「一次」を「述部」だと考えてみよう。その構文は(3-31)の基本構造規則によって次のようになる。

(3-57)



この構造では、主述関係が述部(QP²)に存在する。この中で、動詞句VP¹が主語で、数量詞QP¹が述部である。この構造が提案されるのは3つの理由による。

第1に、数量詞は[+V, +N]の素性を持っている。すなわち、動詞であると同時に名詞でもある。それは日本語の「[京都大学に合格]の学生は」の「合格」や、「[エレベーターにお乗り]の方は」の「お乗り」のようなものである。中国語の数量詞は普通の名詞と違って、単独で述部になることが可能であることがあげられる。中国語の判断文では、ふつう(3-58)のように、判断動詞がなければならないが、数量詞構文の場合、判断動詞は必ずしも必要ではない。

(3-58) a. *张三 哥哥。

兄

b. 张三 是 哥哥。

張三は兄です。

(3-59) a. 张三 35岁。

才

張三は35歳です。

b. 张三 是 35岁。

同上。

(3-59a)は単に(3-59b)の「是」の省略の問題ではない。もし判断文の主要動詞が省略されていると考えるならば、2つの問題がある。1つはなぜ(3-59)の判断文では「是」が省略できて、(3-58)の判断文では省略できないのか、もう1つは、なぜ数量詞は(3-60)のように副詞の修飾を受けることができるのかということである。

(3-60) 张三 已经 35岁了。
すでに

張三はもう35歳になった。

もし数量詞が[+V, +N]の性質を持つと考えれば、この2つの問題は解消する。(3-59a)の「35岁」は述部で、(3-59b)の「35岁」は補部である。

第2に、(3-56a)の数量詞は(3-59b)と同じように、その前に動詞の挿入が可能であり、また、副詞の修飾を受けることができる。前者の場合、数量詞は補部であるが、後者の場合、それは述部である。次の(3-61a)では、「有」が動詞であり、(3-61b)の「已经」が副詞である。

(3-61) a. 张三 打了李四 有 五次。

張三が李四を叩いたのは5回もある。

b. 张三 打了李四 已经 五次了。

張三が李四を叩いたのはすでに5回だ。

第3に、「打了李四」が数量詞の主語である。というのも、「打了李四」が疑問代名詞によって代用されるからである。

(3-62) a. 张三 打了李四 五次。

張三が李四を叩いたのは5回だ。

b. 张三 什么 五次?
なに

張三はなにが5回?

たとえば、もし聞き手が話し手の(3-62a)の内容がはっきりと聞こえない場合、(3-62b)のように聞き返すことができる。Huang(1982, 1992)は、(3-62a)の「五次」は次の(3-63a)の「五次李四」と同じように、付加部か補部であると主張している。(3-63)を見てみよう。

(3-63) a. 张三 打了 五次 李四。

張三は五回李四を叩いた。

b. *张三 什么 五次 李四?

Huangの主張が正しければ、(3-63)の主要部「打」が疑問代名詞「什么」によって代用されえないのと同様、(3-62b)の「打了李四」も「什么」によって代用されえないと予測するのであろう。ところが、この予測とは異なり、(3-63b)は非文であるが、(3-62b)は容認できる。一方、本論文の立場では、「打了李四」が述部ではなく、主語であると考えているので、この現象は自然に説明できる。すなわち、補部以外に主語は「什么」によって代用されるが、述部はできないということである。

また、文末に数量詞が生起する場合、補部名詞句が定、または、特定でなければならないという制約がある。

(3-64) a. 张三 打了 李四 五次。

張三は李四を叩いたのは5回だ。

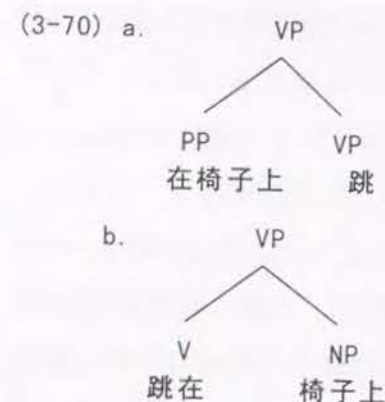
b. ?张三 打了 一个人 五次。

張三がだれかを5回叩いた。

(3-64a)と比べれば分かるように、(3-64b)が不適格であるのは、補部名詞句が不特定だからである。(3-64)の主語は「打了一个人」であるが、「一个人」はその1構成素であるので、不定の特徴はその中に含まれていると考えられる。この制約は実はいわゆる主語に対する制約と同じである。(3-65)を見てみよう。

- (3-67) a. 李四 打 五次

る。それらの統語構造を示すと、(3-70)になる。(3-70a)では、「在椅子上」は主要部「跳」の修飾部であるが、(3-70b)では、「跳在」が主要部であり、「椅子上」はその補部である。



この構造を設定する理由はつぎの3つである。第1に、(3-70a)の「跳」と「在」が形成されるレベルと(3-70b)の「跳」と「在」が形成されるレベルが異なっていることがあげられる。(3-70a)の「在…跳」は統語レベルで形成された句であるが、(3-70b)の「跳在」は語彙レベルで形成された合成語である。(3-70a)の「在…跳」が句であることは証明するまでもないが、(3-70b)の「跳在」が語であることは、(3-71)のように、動詞の後に結びつくべき、アスペクトマーカ―「了」が「跳在」に後続するが、「跳」に後続できないことから伺える。

- (3-71) a. 他 跳在了 椅子上。
 かれはジャンプして椅子についた。
 b. *他 跳了 在 椅子上。

第2に、(3-70a)の「在…跳」と(3-70b)の「跳在」が表す意味がそれぞれ違っているということがあげられる。(3-70b)の「跳在」には前項要素が原因で、後項要素が結果でなければならないという意味的制約がある。具体的には、(3-72)のように前項動詞が移動を表さなければならず、「在」は移動の結果を示さなければならない。

- (3-72) a. 坐在 前面
 前に座っている
 b. *吃在 家
 家で食べる

(3-72a)では、「坐」と「在」が「移動とその結果」を示しているから、「坐在」が容認されるが、(3-72b)では、「吃」と「在」が「移動とその結果」を示していないから、「吃在」が容認されないのである。この意味の分布上の制約は結果合成動詞の場合と同じである¹³。一方、(3-70a)の「在…」と「跳」にはそのような制約が見られない。(3-73)を見てみよう。

- (3-73) a. 在 前面 坐
 前で座る
 b. 在 家 吃
 家で食べる

後項要素が移動動詞であっても非移動動詞であっても、問題の構文の文法性に影響を与えない。

第3に、(3-70a)の「在…跳」と(3-70b)の「跳在」の間に主要部が異なるということもあげられる。(3-70a)では「跳」が問題の句構造の主要部であるが、(3-70b)では「跳在」という合成動詞が問題の句の主要部である。さらに、(3-74)のように、「跳在」が「在」の項構造を受け継いでいるので、「在」が「跳在」という合成動詞の主要部であると言える¹⁴。

- (3-74) a. 张三 [Φ在] 椅子上。

¹³ 結果合成動詞では、前項動詞は原因を示し、後項動詞はその結果を示す。詳しくは第4章を参照されたい。

¹⁴ 結果合成動詞の項構造の継承に関する、詳しい議論は第4章で行われる。

張三は椅子の上にいる。

b. *张三 [跳上] 椅子上。

以上の考察からわかるように、(3-70a)の「在椅子上」は前置詞句として1つの構成素をなすが、(3-70b)では構成素をなさない。つまり、両者の間に派生関係がない。そして(3-70b)の「椅子上」は「跳在」という合成動詞の補部と考えられる。したがって、前置詞句は述部に後置されることなく、常に(3-31b)の基本構造規則に基づいて前置されると言える。

3-3. 合成語の構造

3-1-2節では(3-31)の基本構造規則が少なくとも中国語の句形成規則であることを議論した。この節では、(3-31)はまた語形成の規則でもあることを示したい^{*15}。

以下、(3-75)の各例の前項要素と後項要素の意味関係は主述関係であり、(3-76)の各例の前項要素と後項要素の意味関係は修飾関係であり、そして、両者とも(3-31a)によって形成された主要部末位の合成語である。

- (3-75) a. 心疼 心が痛い→かわいそう
b. 心烦 心が煩わしい→煩わしい
c. 肉麻 肉がしびれる→気持ち悪い
d. 气粗 息が荒い→威張る
e. 年轻 年が軽い→若い

- (3-76) a. 火葬 火で葬る→火葬
b. 笔谈 ペンで話す→筆談
c. 风行 風のように通る→はやる
d. 后悔 後で悔しがる→後悔

^{*15} この節で出されている例はすべて『現代汉语词典』及び『中日大辞典』による。

また、(3-77)の各例の前項要素と後項要素の意味関係は動補関係であり、(3-31b)によって形成された主要部頭位の合成語である。

- (3-77) a. 随便 便に従う→勝手
b. 负责 責任を負う→担当する
c. 遭抢 奪いに遭う→強奪にあう
d. 关心 心を寄せる→関心を寄せる

最後に、(3-78)の各例の前項要素と後項要素の意味関係は並立関係であり、(3-31c)によって形成された主要部両位の合成語である。

- (3-78) a. 哭泣 泣く
b. 清白 清くて白い→潔白
c. 早晚 早くても遅くても→遅かれ早かれ
d. 水陆 水路と陸路

さらに、「派生語」^{*16}といわれるものも(3-31)の規則によって形成されている。まず、(3-79)の合成語については、その意味関係が主述関係であるが、(3-80)の合成語については、その意味関係が修飾関係である。したがって、両者とも(3-31a)によって作られていると考えられる。また、(3-81)の合成語については、その意味関係が動補関係なので、それらは(3-31b)によって作られていると考えられる。

- (3-79) [vAf-V]
a. 自治 自ずから治める
b. 自杀 自ずから殺す
c. 自动 自ずから動く

^{*16} 中国語では、基本的に派生語と複合語の区別はつかない。しかし、一部の形態が基本的に「拘束的」かつ造語力があるので、それらを「派生辞」と呼ぶこともできる。

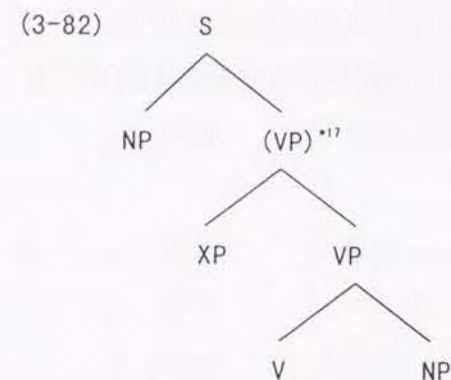
(3-80) [vAf-V]

- a. 不道德 不道德
- b. 不民主 非民主的
- c. 不科学 非科学的
- d. 不规则 不規則

(3-81) [vAf-X]

- a. 可口 うまい
- b. 可愛 可愛い
- c. 可疑 疑わしい
- d. 可笑 おかしい

さらに、注目すべきのは、中国語の合成語には句構造と同じ階層性が見られることである。中国語の単純な統語構造では、大体、(3-82)のように、最もレベルの高い構造は主述構造であり、2番目は修飾構造であり、3番目は動補構造である(Huang1982, 1992, Li, Y.-H. 1990を参照)。



*17 この括弧は中のVPは任意に現れることを示す。なぜなら、中のVPが付加的成分だからである。

(3-82)の構造には3つの階層がある。この3つの階層はつぎの例によって示される。

(3-83) 慢慢地 变成了 大姑娘

少しずつ大きい娘になった。

- a. 变成了 大姑娘
- 大きい娘になった。
- b. *慢慢地 变成了

(3-84) 她 变成了 大姑娘

彼女は少しずつ大きい娘になった。

- a. 变成了 大姑娘
- 大きい娘になった。
- b. *她 变成了

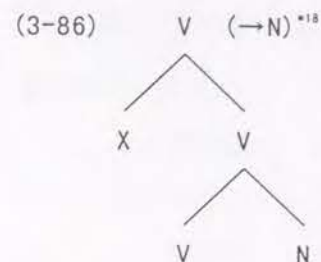
(3-85) 她 慢慢地 变成了 大姑娘

彼女は少しずつ大きい娘になった。

- a. 慢慢地 变成了 大姑娘
- 少しずつ大きい娘になった。
- b. *她 慢慢地

(3-83a)と(3-84a)が文法的であり、(3-83b)と(3-84b)が非文法的であることは、動補構造が修飾構造または主述構造以前につくられなければならないことを示し、(3-85a)が文法的であり、(3-85b)が非文法的であることは、修飾構造が主述構造以前に生起しなければならないことを示す。このことは合成語構造にも当てはまる。

まず、修飾関係を示す構造と動補関係を示す構造との組み合わせを見てみよう。



(3-86)では、修飾関係を示す構造は(3-82)と同じように、動補関係を示す構造よりあとにつくられることが示されている。この構造が妥当であるかどうかについて、つぎの例を見てみよう。

(3-87) 扎-流-血^{*19} 刺して流血する

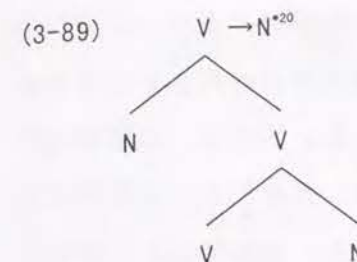
- a. 流-血 流血する
- b. *扎-流

(3-88) 二-踢-脚 2回蹴る→爆竹の1種

- a. 踢-脚 蹴る
- b. *二-踢

(3-87a)の「流」と「血」は動補構造であるが、(3-87b)の「扎」と「流」は修飾構造である。「流血」だけが文法的であることは、「扎流血」の中で、動補構造である「流血」がさきにつくられていると考えられる。(3-88)も(3-87)と同じように説明できる。ただし、つくられた合成動詞「二踢脚」はまた名詞化するという意味で、(3-87)と異なる。

さらに、主述関係を示す構造と動補関係を示す構造との組み合わせを見てみよう。



(3-89)では、主述関係を示す構造が動補関係を示す構造よりあとにつくられることが示されている。合成語においては、この形成の順番が妥当であることはつぎの例によって示される。

(3-90) 驴-打-滚 ろばが転ぶ→きなこ餅

- a. 打-滚 転ぶ
- b. *驴-打

(3-91) 脑-溢-血 脳出血

- a. 溢-血 出血
- b. *脑-溢

(3-90a)の「打」と「滚」は動補関係であるが、(3-90b)の「驴」と「打」は主述関係である。「驴打」より、「打滚」が文法的であることは、主述関係を示す構造が動補関係を示す構造よりあとに形成されることを示していることがわかる。

以上の現象から分かるように、中国語の基本構造規則(3-31)は句形成だけではなく、語形成の規則でもある。

3-4. まとめ

この章では、まず、中国語の語順は単純に形式的規則または意味的規則だけでは捉えられないことを指摘した。従来の研究では、生成文法のXバー理論や格理論、または機能文

^{*18} ($\rightarrow N$)は、つくられた動詞が名詞化することがあることを示す。

^{*19} Chao(1968)を参照されたい。

^{*20} $\rightarrow N$ は、(3-89)の構造を持つ合成動詞が一般に名詞化することを示す。

法の定不定などの意味関係によって捉えようと試みたが、いずれも例外があり、十全な提案とは言い難い。したがって、本論文では、中国語の語順は要素間の意味関係と対応させて捉えなければならないと考え、(3-31)の基本構造規則を提案した。さらに、本提案の基本構造規則が句形成だけではなく、語形成にも働くことを述べた。すなわち、合成語の中にも4つの意味関係が見られ、主述関係、修飾関係が主要部末位と、動補関係が主要部頭位と、並立関係が主要部両位にそれぞれ対応している。中国語では語形成にも句形成にも同じ基本構造規則が働く理由は序章で観察した(0-4)と(0-6)の性質にあると思われる。つまり、実質的に同じ要素が語形成においても、句形成においても最小単位として振る舞うので、基本構造規則は実はそれら同じ要素の組み合わせの規則なのである。

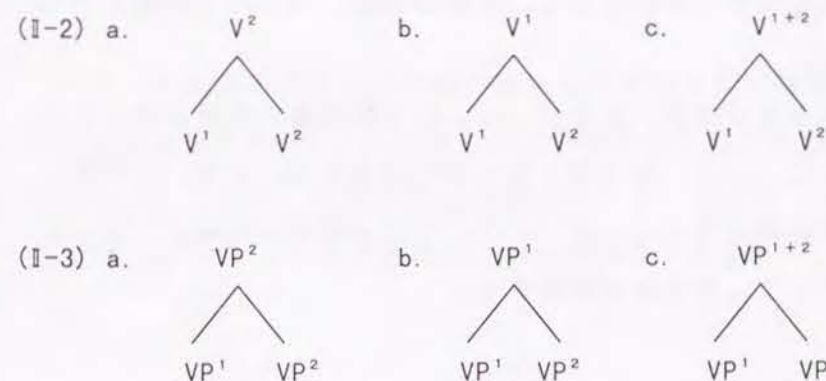
序章で述べたように、中国語の(0-4)と(0-6)の特徴は2つの点で中国語の文法体系に反映されている。1つは、中国語に語彙レベルと統語レベルの差があるが、基本構造規則がどちらのレベルにも働くという性質である。これが本章までに論じてきたことである。もう1つは中国語のほとんどの文法範疇の示す意味は動詞連続構文によって示されることである。それゆえ、動詞連続構文の構造を明らかにしなければ、中国語の文法体系の解明は不完全であると言える。次の第2部では、この動詞連続構文について、詳細に議論していく。

第2部 動詞連続構文の構造

第2部では、中国語に、(II-1a)のような語彙レベルの動詞連続と、(II-1b)のような統語レベルの動詞句連続があり、どちらのレベルの連続も、第3章で提案した(3-31)の基本構造規則に基づいて形成されていることを論ずる^{*)}。

- (II-1) a. V^1-V^2
b. VP^1-VP^2

つまり、動詞連続でも動詞句連続でも、様々な意味関係があるが、構造的には3つのパターンしかない。(II-2a)と(II-3a)は主要部末位、(II-2b)と(II-3b)は主要部頭位、(II-2c)と(II-3c)は主要部両位である。



上の6つの構造が実際中国語で用いられているかどうかは検討されなければならない。筆者の調べによると、(II-2)と(II-3)には次のような主要な対応例がある。

^{*)} 以下、(II-1)のような要素を含むものを動詞連続構文と呼ぶ。

(II-4)

構造	構文名	具体例
(II-2a)	結果合成動詞構文	张三跑丢了鞋(張三が走って靴をなくした)
	修飾合成動詞構文	我们欢送李四(私たちは李四を歓送する)
(II-2b)	動補合成動詞構文	这件事很可怕(このことはとてもこわい)
(II-2c)	並立合成動詞構文	张三帮助李四(張三は李四を助ける)
(II-3a)	介詞構造を含む構文	跟李四学英语(李四のもとで英語を学ぶ)
(II-3b)	使役・受動構文	张三被李四打了(張三は李四に殴られた)
(II-3c)	又～又～構文	又吃饭又睡觉(ご飯を食べたり寝たりする)

(II-4)の表の「修飾合成動詞」「動補合成動詞」「並立合成動詞」「介詞構造を含む構文」「又～又～構文」は従来の研究では、かなり詳しく記述されている²⁾。ところが、従来の研究では、ほとんど「結果合成動詞」が(II-2b)の構造であり、(II-2a)の構造ではないと言われている。また、「使役・受動構文」についても動詞連続構文ではないと主張する研究もあれば、動詞連続構文であるとする研究もある。後者の場合、(II-3a)の構造か(II-3c)の構造であると分析されている。

この第2部では、中国語の「結果合成動詞」はなぜ(II-2b)の主要部頭位の構造ではなく、(II-2a)の主要部末位の構造なのかについて、第4章と第5章で議論する。また、中国語の「使役・受動構文」はなぜ動詞連続構文であり、且つ(II-3b)の主要部頭位の構造であると分析しなければならないのかについて、第6章で議論する。

²⁾ 詳しくは陸他(1964)、Chao(1968)、Li and Thompson(1981)、朱(1982)などを参照されたい。

第4章 動詞連続構文の構造(1) — 結果合成動詞の分析*

4-0. はじめに

最近の言語学理論では、ほとんどの言語構造が内心構造であるという認識にまで至っている³⁾。いうまでもなく、動詞連続構文も例外ではない。たとえば、項構造の観点から見れば、日本語の合成動詞は基本的に主要部末位である。(4-1)に示すように、前項要素(以下 V^1 と呼ぶ)が何項動詞であろうが、合成動詞は後項要素(以下 V^2 と呼ぶ)の項数と一致する⁴⁾。

(4-1) a. n 項動詞 + 1項動詞 → 1項動詞

立ち上がる、泣きやむ、泣き崩れる、持ちあがる、書きあがる

b. n 項動詞 + 2項動詞 → 2項動詞

泣きはらす、吹き飛ばす、持ちあげる、書き上げる、切り倒す

一方、中国語の結果合成動詞の組み合わせは非常に複雑に見える⁵⁾。なぜなら、中国語の結果合成動詞で V^1 と V^2 のどちらの項構造が受け継がれているのかは簡単に言えないからである。たとえば、2項結果合成動詞が V^1 と V^2 のどちらの項構造を継承するかについて(4-2)のように、4つの可能なパターンが考えられる。

* 第4章は、沈(1993)を加筆訂正したものである。

³⁾ 句形成に関しては、Chomsky(1957, 1965, 1981)、Stowell(1981)、Kaplan and Bresnan(1982)、Gazdar, Klein, Pullum, and Sag(1985)、Pollard and Sag(1994)などを参照されたい。また、語形成に関しては、大石(1988)、Spencer(1991)、影山(1993)などを参照されたい。

⁴⁾ 詳しくは影山(1982, 1993)、山本(1984)、塚本(1987)などを参照されたい。

⁵⁾ 中国語の結果合成動詞は V^1 と V^2 の2つの動詞によって構成され、 V^1 が原因、 V^2 が結果を表すというようなものである。

- (4-2) a. 結果合成動詞はV¹とV²のどちらの項構造も受け継いでいない。
 b. 結果合成動詞はV¹とV²の両方の項構造を受け継いでいる。
 c. 結果合成動詞はV¹の項構造を受け継いでいる。
 d. 結果合成動詞はV²の項構造を受け継いでいる。

しかし、中国語の結果合成動詞にはさまざまな例があり、その中にはうえのどのパターンにもあてはまるように見える例が見つかる。たとえば、(4-2a)のパターンについて、「跳塌(ジャンプしてつぶす)」はその1例である。「跳」も「塌」も1項動詞であることは次の(4-3)と(4-4)に示される通りである。

- (4-3) a. 张三 在 床上 跳。
 へ'ッ'ト'
 張三はベッドの上でジャンプする。
 b. *张三 跳 床上。

- (4-4) a. 床 塌了。
 タれる
 ベッドがつぶれた。
 b. *张三 塌了 床。

ところが、この両者からつくられた結果合成動詞は1項動詞ではなく、2項動詞として機能することができる。

- (4-5) 张三 跳塌了 床。
 張三はジャンプしてベッドをつぶした。

すなわち、「跳塌」は「跳」の項構造も「塌」の項構造も受け継いでいないと思える。

また、(4-2b)のパターンについて、「打伤(殴って傷つける)」があげられる。「打」も「伤」も2項動詞であることはつぎの(4-6a)も(4-6b)も文法的であることから伺える。

- (4-6) a. 张三 打了 人。
 張三は人を殴った。
 b. 张三 伤了 人。
 張三は人を傷つけた。

(4-7)のように、この両者からつくられた結果合成動詞が2項動詞であることがわかる。

- (4-7) 张三 打伤了 人。
 張三は人を殴って傷つけた。

したがって、「打伤」は「打」と「伤」の両者の項構造を継承していると分析してもよい。

さらに、(4-2c)のパターンにあてはまる例は「拉断(引っ張って切る)」である。下に示すように、「拉」は2項動詞であり、「断」は1項動詞である。

- (4-8) a. *张三 拉。
 張三が引っ張る。
 b. 张三 拉 绳子。
 張三は縄を引っ張る。

- (4-9) a. 绳子 断了。
 縄 断つ
 縄が切れた。
 b. *张三 断了 绳子。
 張三が縄を切る。

しかし、「跳塌」の場合と同様、「拉」と「断」によって作られた合成動詞は2項動詞の振る舞いをすることができる。

- (4-10) 张三 拉断了 绳子。
 張三が縄を引っ張って切った。

したがって、「拉断」がV¹の項構造を継承しているように受け取られるかもしれない。

最後に、(4-2d)のパターンについては、「跑丢(走ってなくす)」があげられる。たとえば、(4-11)に示すように、「丢」は2項動詞の振る舞いをすることができるが、「跑」はできない。

- (4-11) a. 张三 丢了 钱包。
 张三 は 財布 を なくした。
 b. *张三 跑了 钱包。

ところが、「跑」と「丢」からなる合成語「跑丢」は、(4-12)のように、2項動詞の振る舞いをすることができる

- (4-12) 张三 跑丢了 钱包。
 张三 は 走って 財布 を なくした。

「跑丢」は、「拉断」とは逆に、V²の「丢」の項構造を継承していると思われる。

中国語の結果合成動詞には以上の4つのパターンがあることは、中国語の結果合成動詞の構造を解明するためには避けて通れない、重要な事実である。この問題について、従来、Chao(1968)、Li, Y.-F. (1990)、Cheng and Huang(1994)などを代表とする、ほとんどの研究では、結果合成動詞の構造が主要部頭位であると主張されている。一方、結果合成動詞の構造は主要部末位であるという少数意見もある(李1984、詹1989を参照)。しかし、どちらの主張もそれらの反例に対して説明を与えていないと思われる。すなわち、前者は(4-2a)と(4-2d)に関して説明しておらず、後者も(4-2a)と(4-2c)に関して説明していない。

本論文は、結果合成動詞を形成する以前のV¹とV²のそれぞれの項構造に注目し、(4-2a)と(4-2c)のV²には語彙レベルで2項動詞の機能があることを観察することによって、結果合成動詞は主要部末位の構造を持つことを提案する。

この章では、以下の6つの問題について議論する。第1節では、中国語の1項動詞はそのアスペクト性(aspectuality)に基づいて、大きく活動動詞と変化動詞という2種類に分けられることを指摘する。第2節では、中国語の1項活動動詞と1項変化動詞はまた、そ

れぞれ同じ形で2項動詞を兼用するが、それぞれの項構造の対応形が異なることが観察される¹⁶。つまり、1項活動動詞は「内項」を増やした2項動詞と対応するが、1項変化動詞は「外項」を増やした2項動詞と対応する¹⁷。第3節では、結果合成動詞において、V¹の位置に来る動詞は活動動詞でも変化動詞でもよいが、V²の位置に来る動詞は変化動詞でなければならないことを観察する。したがって、項構造の観点から見れば、もしV²が結果合成動詞の主要部であるという見方が妥当であれば、結果合成動詞の1項動詞も外項を増やした2項合成動詞を兼用することが予測できる。第4節では、この予測通り、結果合成動詞が外項増加型の自他兼用動詞であることを観察する。したがって、結果合成動詞は、V²を主要部とする修飾関係の動詞連続であると結論づけられる。第5節では、項構造だけではなく、アスペクト性の観点からもV²が結果合成動詞の主要部であることを議論する。第6節では、V¹の項構造が結果合成動詞に継承される場合もあるが、その場合のV²は項構造について無指定であり、アスペクトマーカ―としての機能しか持たないということを議論する。

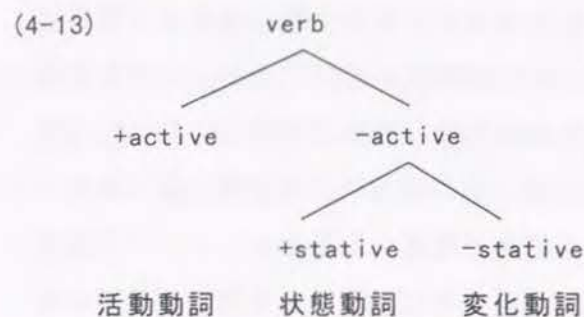
4-1. 1項動詞のアスペクト性

馬(1988)は、中国語の動詞は意志的要素との共起および程度副詞との共起という2つのテストで3種類に分かれることを観察している。沈(1992)では馬の観察を[±active]と[±stative]という意味素性で捉え直している¹⁸。すなわち、(4-13)に示すように、activeとstativeは対等な関係ではなく、レベルが違うと考えられる。

¹⁶ 以下、同じ形式で1項動詞としても2項動詞としても用いられるものを自他兼用動詞と言う。

¹⁷ 本論文の4-5-1節で詳しく述べるが、自他兼用動詞の1項動詞には活動動詞と変化動詞の対立が見られるが、2項動詞にはその対立が見られない。この理由から、自他兼用動詞に「1項動詞→2項動詞」のような派生関係があると考えられる。したがって、自他兼用動詞には「内項」を増やした2項動詞、「外項」を増やした2項動詞があると言える。

¹⁸ ここでいうactiveとは、一定の時間帯においてある事柄が積極的に遂行される状況を指し、stativeとは、一定の時間帯においてある事柄が不変な状況に置かれることを指す。



このように考える理由を述べる前に、まず、活動動詞と状態動詞と変化動詞はそれぞれどのように区別されているのかを見てみよう。

基本的に、活動動詞は意志を示す要素と共起するが、程度を示す要素と共起しない。逆に、状態動詞は意志を示す要素とは共起しないが、意志を示す要素と共起する。一方、変化動詞は意志を示す要素とも程度を示す要素とも共起しない。たとえば、「喊(叫ぶ)」という動詞は、(4-14a)のように意志を示す「故意」と共起するが、(4-14b)のように程度を表す「很(とても)」と共起しないことから、[+active, -stative]の意味素性を持っていることが分かる。

- (4-14) a. 张三 故意 喊。
張三はわざと叫んだ。
- b. *张三 很 喊。

そして、「高(高い)」という動詞は、(4-15a)のように「故意」と共起しないが、(4-15b)のように「很」と共起することから、[-active, +stative]の意味素性を持っていると言える。

- (4-15) a. *张三 故意 高。
- b. 张三 很 高。
張三はとても背が高い。

最後に、「活(生き返る)」という動詞は、(4-16a)のように「故意」とも共起しなければ、(4-16b)のように「很」とも共起しないので、[-active, -stative]の意味素性を持っている

と考えられる。

- (4-16) a. *张三 故意 活。
張三がわざと生き返る。
- b. *张三 很 活。
張三がとても生き返る。

しかし、意志を示す要素とも程度を示す要素とも共起しないことは、変化動詞の性質を示す積極的な根拠ではないと指摘されるかもしれない。したがって、変化動詞の、(4-13)に示した[-active][-stative]の性質を示す現象を見よう。

変化動詞と活動動詞／状態動詞との間の違いは、問題の動詞が「実現相(realis)」として現れるのか、それとも「非実現相(irrealis)」として現れるのかというところから裏付けられる。たとえば、変化動詞「活」が主要部である場合、その生起条件は(4-17)と(4-18)の対立からわかるように、実現相でなければならない。

- (4-17) a. *张三 活。
張三が生き返る。
- b. *张三 不活。
張三が生き返らない。
- c. *张三 活不活?
張三が生き返るのか。

- (4-18) a. 张三 活了。
張三が生き返った。
- b. 张三 没活。
張三が生き返っていない。
- c. 张三 活没活?
張三が生き返ったのか。

ところが、これに対し、次の(4-19)と(4-20)、(4-21)と(4-22)がそれぞれ適格であること

から、活動動詞「喊」と状態動詞「紅」は実現相をとるかどうかがかわらず適格である。

(4-19) a. 张三 (直)喊¹⁹。

張三は叫ぶ。

b. 张三 不喊。

張三は叫ばない。

c. 张三 喊不喊？

張三は叫ぶのか。

(4-20) a. 张三 喊了。

張三は叫んだ。

b. 张三 没喊。

張三は叫んでいない。

c. 张三 喊没喊？

張三は叫んだのか。

(4-21) a. 花 (很)红。

花が赤い。

b. 花 不红。

花が赤くない。

c. 花 红不红？

花が赤いか。

(4-22) a. 花 红了。

花が赤くなった。

b. 花 没红。

花が赤くなっていない。

c. 花 红没红？

花が赤くなったのか。

なぜ、変化動詞が実現相でなければならないのかに対しては、次のように説明できる。中国語において非実現相は次の2つの場合に用いられる。1つは意志表示のためであり、もう1つは不変の状態を示すためである。中国語の動詞にはテンスという範疇がないため、単純未来を示すことができない。たとえば、日本語では、誰かに警告する表現として、「木が倒れる！急いで逃げろ！」は適格であるが、中国語では(4-23a)のように、変化動詞「倒」を述部の主要部にすることができない。それは、この文が意志表示を表すのでもなく、不変の状態を表すのでもないからである。したがって、(4-23b)のように、「要(もうすぐ～する)」という助動詞を主要部にするか、また(4-23c)のように、「树倒」を補文にしなければならない。

(4-23) a. *树 倒！ 快跑！

b. 树 要 倒！ 快跑！

木が倒れそうだ！急いで逃げろ！

c. 我 怕 树倒。

木が倒れるのが怖い。

したがって、中国語では、活動性も状態性も持たない純粋な変化動詞は主要部である場合、非実現相として生起する可能性がない。

以上見てきたように、中国語の動詞は活動動詞、状態動詞、変化動詞の3種類に分けられる。つぎに、なぜ(4-13)のように、activeとstativeは対等な関係ではなく、レベルが違ふと考えるのかを見てみよう。その理由の1つは、もしactiveとstativeが対等な関係であるならば、[+active][+stative]の動詞があるはずであるが、実際(4-24)に示すように、そのような動詞はないということである。

¹⁹ 中国語では1語が述部を担いにくいので、「直」をつけたわけである。「直」は語彙的意味を持っていない。詳しくは第1章1-3節を参照されたい。

(4-24) 動詞の分類: active stative

1. 活動動詞	+	-
2. 状態動詞	-	+
3. 変化動詞	-	-
4. 無	+	+

もう1つの理由は、中国語の状態動詞は、活動動詞より変化動詞に近い性質を持っているという点である。つまり、同じ動詞が状態動詞としても変化動詞としても使われるのである。たとえば、(4-21)の「紅」は状態動詞であるが、実現相マーカー「了」が後続すれば、(4-22a)のように、過去でもなく、完了でもなく、変化動詞と同じように、状態変化を示すことができる。それは変化動詞の“ある状態からもう1つの状態に変わる”と同じ意味である。この点において、中国語の状態動詞は日本語の形容詞と異なる。日本語では、(4-22a)の文をつくる場合、状態変化を示すために、(4-25b)のように、変化を示す動詞「なる」を形容詞に後続させなければならない。

- (4-25) a. 赤かった。
b. 赤くなった。

中国語の状態動詞が変化動詞の性質を示す証拠として、(4-22a)のように、「了」が後続しなければならないということのほかに、(4-23a)の変化動詞「倒」と同じように、助動詞「要」と共起できることが見られる。

- (4-26) a. *这 要 是 花。
これはもうすぐ花だ。
b. 花 要 红。
花がもうすぐ赤くなる。

「もうすぐ～する」という意味を持つ「要」は変化動詞と共起するが、変化を示さない判断動詞「是」とは共起しない。(4-26a)が非文であるのは、判断動詞「是」が変化動詞の性質を持っていないからであり、(4-26b)が文法的であるのは、「紅」が変化動詞の性質

を持っているからであると考えられる。

以上、1項動詞を中心にして、アスペクト性に基づいて、中国語の動詞が3分類できるが、一般に、中国語の状態動詞には変化動詞の性質もあるため、下位分類せずに、状態動詞を変化動詞に含めて考えることもできることを見た。したがって、巨視的には、中国語の動詞は大きく活動動詞と変化動詞に分類することができる。

4-2. 項構造の対立

ここでは、中国語の単純動詞が「1項活動動詞: 2項動詞」と「1項変化動詞: 2項動詞」という特徴を持つ2つのペアに分けられることを示す。具体的には、1項活動動詞と1項変化動詞はそれぞれ異なるパターンで2項動詞と対応する。Xはもとの項を示し、Yは増加した項を示す。

(4-27) 1項活動動詞: 2項動詞

- a. <X>
b. <X<Y>>

(4-28) 1項変化動詞: 2項動詞

- a. <X>
b. <Y<X>>

(4-27a)の1項活動動詞は内項が増えた2項動詞と対応し、(4-28a)の1項変化動詞は外項が増えた2項動詞と対応する^{*10}。以下、(4-27)のパターンを内項増加型、(4-28)のパターンを外項増加型と呼ぶ。

(4-27b)と(4-28b)で増えた、新しい項はまた、さまざまな意味役割を担う。たとえば、(4-27b)の内項は場所、道具を表すことができる。

- (4-29) a. 张三 跳 伞。

^{*10} 外項と内項の定義については第3章の注9を参照されたい。

張三は落下傘で跳ぶ。

- b. 张三 跳 楼。

張三はビルディングから跳ぶ。

- c. 张三 跳 河。

張三は河に跳ぶ。

(4-29)では、「傘」は道具、「楼」は起点、「河」は到着点を示している。一方、(4-28 b)の外項もイベントを引き起こすような原因の他に、経験者、動作者、場所などがある。

- (4-30) a. 铁树 开了 花。

ソテツに花が咲いた。

- b. 张三 开了 门。

張三がドアを開けた。

- c. 院子里 开了 一朵 玫瑰花。

にわ 薔薇 ばう

庭には、1輪のバラが咲いた。

(4-30)では「铁树」は経験者、「张三」は動作者、「院子里」は場所をそれぞれ表す。

また、内項増加型は基本的に、「喊(叫ぶ)、跳(跳ぶ)、胜(勝つ)」などの活動動詞であるが、外項増加型には2種類の動詞に分けられる。1つは、(4-31a)に示すように、語彙レベルでも統語レベルでも自他兼用動詞としての振る舞いをするものである。もう1つは、(4-31b)のように、語彙レベルでは自他兼用動詞の機能があるが、統語レベルでは1項動詞の機能しかないものである。

- (4-31) a. 語彙レベル：开(開く：開ける)、丢(なくなる：なくす)、动(動く：動かす)

統語レベル：同上。

- b. 語彙レベル：急(焦る：焦らす)、累(疲れる：疲れさせる)、倒(倒れる：倒す)

統語レベル：急(焦る：φ)、累(疲れる：φ)、倒(倒れる：φ)

(4-31b)のグループの存在について、合成語の「大胜、大敗」と単純語の「胜、败」との

振る舞いの違いから伺える。

まず、「胜」と「败」が合成語の場合、自他兼用動詞であることは、つぎの呂(1987)の例からわかる。

- (4-32) a. 中国女篮 大胜。

女子バスケット

中国女子チームが大勝する。

- b. 中国女篮 大胜 南朝鲜队。

中国女子チームは韓国チームに大勝した。

- (4-33) a. 南朝鲜队 大败。

韓国チームが大敗する。

- b. 中国女篮 大败 南朝鲜队。

中国女子チームは韓国チームを大敗させた。

(4-32)と(4-33)を比較してみれば、「大胜」は内項増加型の自他兼用動詞であるが、「大败」は外項増加型の自他兼用動詞であることが分かる

しかし、興味深いのは、「胜」は単独で自他兼用動詞として機能するが、「败」は単に1項動詞であるということである。

- (4-34) a. 中国女篮 胜了。

中国女子チームが勝った。

- b. 中国女篮 胜了 南朝鲜队。

中国女子チームが韓国チームに勝った。

- (4-35) a. 南朝鲜队 败了。

韓国チームが負けた。

- b. *中国女篮 败了 南朝鲜队。

中国女子チームが韓国チームを負かした。

実際に、「大敗」の「大(大きく)」は副詞的要素なので、(4-33a)と(4-33b)に見られる項の変化は明らかに「敗」によって引き起こされている。それにもかかわらず、2項動詞としての「敗」は、(4-35b)のように、単独では成立しないことは、「敗」が語彙レベルでしか2項動詞としての機能がないということを示唆する。語彙レベルでしか2項動詞としての機能がないと考えられる現象は[X-V]の合成語の他に、[V-N]のような合成語も見られる。

- (4-36) a. 李四 急了。
 焦る
 李四が焦った。
 b. *张三 急了 李四。
 張三が李四を焦らせた。

- (4-37) a. 李四 累了。
 疲れる
 李四が疲れた。
 b. *张三 累了 李四。
 張三が李四を疲れさせた。

(4-36)の「急」と(4-37)の「累」はそれぞれ統語レベルで2項動詞としての振る舞いが見られないが、合成語の形でそのような振る舞いが見られる。たとえば、(4-38)のように、外項が増える場合、両動詞がもとの内項と合成するのが普通である。

- (4-38) a. 这孩子 真 累-人。
 子 当
 この子は本当に人を疲れさせる。
 b. 这孩子 真 急-人。
 この子は本当に人を焦らせる。

(4-38)の「累人」「急人」内部の1要素が、つぎの(4-39)の「*累我」「*急我」のように置き換えられないことから、「累人」と「急人」は統語レベルで最小単位の語として振る

舞っていると言える。

- (4-39) a. *这孩子 真 累-我。
 この子は本当に私を疲れさせる。
 b. *这 孩子 真 急-我。
 この子は本当に私を焦らせる。

しかし、(4-31b)のグループについて、もともと1項動詞であるが、ほかの要素と合成することによって2項動詞化すると分析される可能性があるとは指摘されるかもしれない。その可能性は次の事実によって否定される。すなわち、「谢(散る)」「渴(喉が乾く)」などのような、1項動詞の機能しかないものがほかの要素と合成しても2項動詞化しない。

- (4-40) a. 花 谢了。
 花が散った。
 b. *铁树 谢了 花。

- (4-41) a. 花 凋谢了。
 花が散った。
 b. *铁树 凋谢了 花。

(4-40)と(4-41)が文法上平行的であることから、もともと1項動詞である「谢」が何かと合成しても2項動詞化しないことがわかる。また、「渴」も「谢」と同様である。

- (4-42) a. 张三 渴了。
 張三 は 喉が乾いた。
 b. *张三 渴了 口。

- (4-43) a. 张三 口渴了。
 張三 は 口が渴いた。
 b. *张三 渴口了。

「渴」が純粋な1項動詞なので、(4-43b)のように、[V-N]合成語はできない。以上の事実から、合成することによって2項動詞化するという見方は妥当ではないと言える¹¹⁾。

ここで、(4-5)の「塌」と(4-10)の「断」の性質をもう1度見ると、それも(4-31b)のグループの動詞と同じ性質を持つと言える。なぜなら、「塌-方(土砂が崩れる)、塌-架(棚が崩れる)」や「断-发(髪の毛を切る)、断-肠(腸を切る)」などのように動補構造の合成が可能だからである。したがって、「塌」と「断」は(4-31b)のグループに属し、正確に記述すれば、それらは統語レベルでは、1項動詞としてしか機能しないが、語彙レベルでは、2項動詞として機能することができるということになる¹²⁾。

¹¹⁾ それでも(4-31b)のグループの存在は唐突だと思われるかもしれない。実はそれらの存在は唐突ではなく、古代中国語の1項動詞の使役用法の名残だと考えられる。王(1981)の『古代漢語』と(1980)の『漢語史稿』では、1項動詞が常に使役動詞として用いられることは古代漢語の文法上の特徴の1つだと述べている。たとえば、

- | | 現代 | 古代 |
|--------|------|----------------------------------|
| (i) a. | 打败了他 | ：敗之 / 彼を打ち負かす |
| | b. | 使姜氏驚 : 驚姜氏 / 姜氏を驚かす |
| | c. | 使其衣冠正 : 正其衣冠 / その服をきちんと着させる |

さらに、王(1980)では「50年代以降、新しい使役動詞が現れ、これらの動詞は2音節で、単音節ではない」と言っている。たとえば、

- (ii) a. 巩固 / 頑丈だ : 強固する
b. 丰富 / 豊かだ : 豊かにする
c. 端正 / 正しい : ただす

王力の観察は(4-31b)のグループの存在を古代漢語の立場から支持していると思われる。

¹²⁾ (4-31b)のグループの動詞は数多くある。

- | | |
|------|---------|
| 恨-人 | 人が恨む |
| 倒-牌子 | 看板が倒れる |
| 败-家 | 家をダメにする |
| 愁-人 | 人が悩む |

以上、動詞のアスペクト性に基づいて、自他兼用動詞の項構造の対応するパターンが(4-27)と(4-28)のように、異なることを見た。

4-3. V¹とV²の相違

結果合成動詞における、活動動詞と変化動詞の分布を調べてみると、V¹には活動動詞も変化動詞も来ることができるが、V²には変化動詞しか来られないということが観察される。

(4-44) 活動動詞(V¹)と活動動詞(V²)

- | | |
|-----|--------|
| *闹叫 | 騒がれて叫ぶ |
| *闹跳 | 騒がれて跳ぶ |
| *闹打 | 騒がれて殴る |

(4-45) 変化動詞(V¹)と活動動詞(V²)

- | | |
|-----|---------|
| *累叫 | 疲れて叫ぶ |
| *累闹 | 疲れて騒ぐ |
| *累骂 | 疲れてののしる |

(4-46) 活動動詞(V¹)と変化動詞(V²)

- | | |
|----|------------|
| 跳塌 | ジャンプされて崩れる |
| 跳漏 | ジャンプされて漏れる |
| 跳累 | ジャンプして疲れる |

(4-47) 変化動詞(V¹)と変化動詞(V²)

- | | |
|-----|----------|
| 累死 | 疲れて死ぬ |
| 累病 | 疲れて病気になる |
| 累糊涂 | 疲れて馬鹿になる |

つまり、以上のデータから、V²が変化動詞でありさえすれば、V¹が活動動詞であろうが変

化動詞であろうが、問題の合成動詞は適格であることになる^{*13}。

(4-48)

$V^1 \backslash V^2$	活動動詞	変化動詞
活動動詞	*(4-44)	(4-46)
変化動詞	*(4-45)	(4-47)

さらに、(4-48)の結論を、4-2節で観察された、中国語の1項活動動詞は内項増加型の2項動詞と対応し、1項変化動詞は外項増加型の2項動詞と対応するという対応関係と考え合わせれば、 V^1 の位置に来る動詞の項構造は内項増加型でも外項増加型でもよいが、 V^2 の位置に来る動詞の項構造は外項増加型でしかありえないとも言える。これをもとに、本論文の「結果合成動詞の構造は主要部末位である」という提案が妥当であるかどうかを調べることができる。

^{*13} この V^2 は純粋な変化動詞でなければならないようである。その理由は2つある。1つは、結果合成動詞における V^1 と V^2 の間の意味関係について、「 V^1 の、ある行為またはあるイベントの発生、変化によって、 V^2 では、今までと異なる状態が引き起こされる」という母国話者の直感は、不変の状態ではなく、状態変化を示唆するということである。もう1つは、4-1節で取り上げられたように、状態動詞が一般に変化動詞の性質も持っているということである。従って、(i)の「累」のような状態動詞は、 V^2 の位置に来る場合、変化動詞としての機能しか持たない。これは、「累」が V^1 と合成する場合、他の副詞と共に起するが、「很」と共に起できないという事実から伺われる。

(i) a. 很 累

とても疲れる。

b. 已经 闹累了

すでに騒いで疲れた。

c. *很 闹累

4-4. 項構造の継承

4-2節では、1項動詞には活動動詞と変化動詞の対立があるのと並行して、それぞれの対応する2項動詞には内項増加型と外項増加型という項構造の対立があることを示した。

また、4-3節では、結果合成動詞における活動動詞と変化動詞の分布は(4-49)であることを指摘した^{*14}。

(4-49) a. 活動動詞+変化動詞

b. 変化動詞+変化動詞

(4-49a)と(4-49b)に対応して、項構造の観点から、結果合成動詞には(4-50)と(4-51)の項構造の組み合わせがあることが考えられる。

(4-50) 内項増加型+外項増加型

a. <X> + <X>

b. <X<Y>> + <X>

c. <X> + <Y<X>>

d. <X<Y>> + <Y<X>>

^{*14} 本当は「状態動詞+変化動詞」の組み合わせが可能であるが、このタイプは「変化動詞+変化動詞」のタイプとは区別しにくい。なぜなら、一般に状態動詞は変化動詞の性質を持っているからである。典型的な状態動詞の例は、好极(極めてよい)、坏透(極めて悪い)などがある。

(i) a. 张三 好-极 *(了)。

極める

張三是極めてよい。

b. 张三 坏-透 *(了)。

悪いとおる

張三是極めて悪い。

「状態動詞+変化動詞」の統語上の振る舞いは「変化動詞+変化動詞」と変わらないので、本論から省略する。

(4-51) 外項増加型+外項増加型

- a. <X> + <X>
- b. <Y<X>> + <X>
- c. <X> + <Y<X>>
- d. <Y<X>> + <Y<X>>

ここで、項構造の継承という観点から、結果合成動詞の中でどの動詞が主要部かという問題について次のような予測をする。

(4-52) V¹が主要部であるなら、問題の合成動詞の項構造に3つのパターンがある。

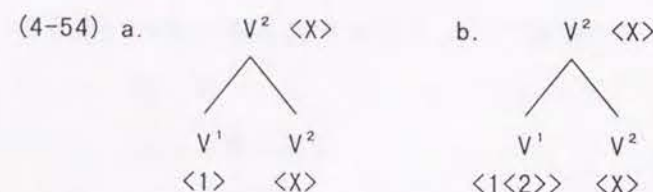
- a. <X> + <n項> → <X>
- b. <X<Y>> + <n項> → <X<Y>>
- c. <Y<X>> + <n項> → <Y<X>>

(4-53) V²が主要部であるなら、問題の合成動詞の項構造に2つのパターンがある。

- a. <n項> + <X> → <X>
- b. <n項> + <Y<X>> → <Y<X>>

Li, Y.-F. (1990)は結果合成動詞が(4-52)タイプの項構造を持つと主張しているが、本論文は結果合成動詞が(4-53)の組み合わせしかないことを論証する。

まず、V²が1項動詞の場合を見よう。(4-54)に示されているように、結果合成動詞が1項動詞である場合、V¹が何項動詞であろうが、V²の項構造を継承すると予測される^{*15}。



^{*15} 表示の混乱を避けるために、V¹の項を数字で示し、V²の項をアルファベットで示す。

次の(4-55)は、(4-54a)のパターンであり、(4-56)は(4-54b)のパターンである。

- (4-55) a. 张三 哭了。
张三が泣いた。
- b. 大门 开了。
門が開いた。
- c. 大门 哭开了。
門が泣くことによって開いた。
- d. *张三 哭开了。

(4-55a)と(4-55b)から分かるように、「哭」も1項動詞であり、「开」も1項動詞である。しかし、(4-55c)が文法的で、(4-55d)が非文法的であることから、「哭开」という結果合成動詞がV²である「开」の項構造を継承し、V¹である「哭」の項構造を継承していないと言える。また、

- (4-56) a. 张三 研究 语言学。
张三が言語学を研究する。
- b. 家 穷了。
家
家が貧しくなった。
- c. 家 研究穷了。
研究して家が貧しくなった。
- d. *张三 研究穷了 语言学。

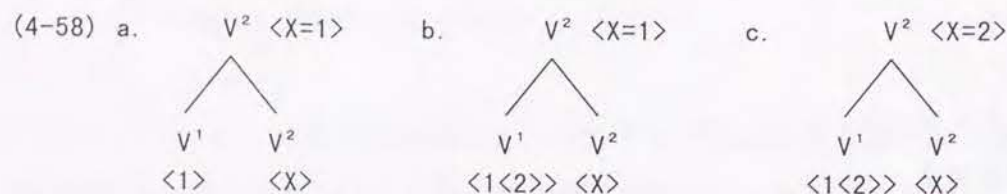
(4-56a)と(4-56b)から、「研究」は2項動詞であるが、「穷」は1項動詞であることがわかる。さらに、(4-56c)と(4-56d)のように、「研究」と「穷」からなる結果合成動詞「研究穷」で、V¹の2つの項「张三」「语言学」が現れえないことから、「研究穷」がV²である「穷」の項構造を継承するが、V¹である「研究」の項構造を継承しないことがわかる。

次に、結果合成動詞がV¹とV²の両方の項を受け継いでいるように見える例を見よう。

- (4-57) a. 张三 忙了。
 张三が忙しくなった。
 b. 张三 死了。
 张三が死んだ。
 c. 张三 忙死了。
 张三が忙しくて死んだ。

(4-57a)と(4-57b)はそれぞれ「忙」と「死」は1項動詞であることを示している。そして、(4-57c)の「张三」が V^1 と V^2 のいずれの項でもありうる。ところが、Li, Y.-F. (1990)は、 V^1 の項と V^2 の項が同一指示項である場合、両者の項が併合されると指摘している。したがって、彼の見方では、(4-57c)では V^1 も主要部である。

しかし、結果合成動詞の構造を説明するのに重要なのは、どちらの項構造が継承されるかということであり、具体的な項の指示物が何か、それによって削除または併合されるという問題ではない。なぜなら、合成動詞が1項動詞である場合、 V^1 と V^2 の項の同一指示性について、(4-58)のような3つのパターンが考えられるが、どのパターンも V^2 の項構造が結果合成動詞に継承されていると言えるからである。



(4-58a)は(4-57c)のパターンであるが、(4-58b)は(4-59c)のパターンであり、(4-58c)は(4-60c)のパターンである。

- (4-59) a. 张三 学 英语。
 张三が英語を学ぶ。
 b. 张三 累了。
 张三が疲れた。
 c. 张三 学累了。

张三が学んで疲れた。

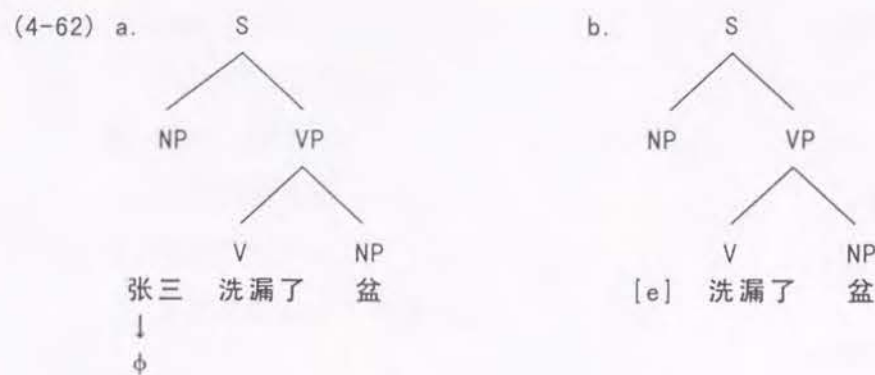
- (4-60) a. 张三 洗 衣服。
 张三が服を洗った。
 b. 衣服 干净了。
 きれい
 服がきれいになった。
 c. 衣服 洗干净了。
 洗って服がきれいになった。

(4-59c)では、 V^1 の外項「张三」が V^2 の項と同一物を指しているが、(4-60c)では、 V^1 の内項「衣服」が V^2 の項と同一物を指している。しかし、これらの例は必ずしも項が併合されたと分析する必要がない。たとえそのように分析しても、結果合成動詞の構造を説明するのに役に立たないように思える。むしろ、 V^2 の項構造が受け継がれ、 V^1 の項構造が受け継がれないという分析のほうが一般性が高い。この分析によれば、(4-57c)でも(4-59c)でも、そして(4-60c)でも、 V^2 の項構造が受け継がれ、 V^1 の項がすべて受け継がれていないということになる。

以上の観察から、 V^2 が1項動詞である場合、結果合成動詞は必ず V^2 の項構造を受け継ぎ、 V^1 の項構造が無視されると結論される。

沈(1993)でも、「2項動詞+1項動詞→1項合成動詞」の図式を主張したが、Cheng and Huang(1994)は、それを批判し、それはargument-suppressionの問題であると主張している。たとえば、(4-61b)の「洗漏」は、まず「2項動詞+1項動詞→2項合成動詞」の図式で生成される。そのあと、外項が削除されることによって、内項が主語の位置に上昇し、1項合成動詞になるというのである。

- (4-61) a. 盆 洗漏了。
 洗って盥が漏れた。
 b. 张三 洗漏了 盆。
 张三が何かを洗って盥をもらした。



彼らの考えの最大の理由は(4-61a)には動作者が含意されているということである。たとえば、(4-61a)は(4-63)の受動文の意味とほぼ同じである。

(4-63) 盆 被 洗漏了。

受動詞

盥が何かを洗うことによって壊された。

しかし、この説明には次の問題がある。まず、彼らは、結果合成動詞の構造について、アスペクト性の継承という観点から、V'が主要部であると主張している。具体的には、V'が活動動詞であれば、結果合成動詞も活動動詞であり、V'が変化動詞であれば、結果合成動詞も変化動詞であると観察している。さらに、(4-27)と(4-28)に示されているように、活動動詞は内項増加型の項構造を持っているが、変化動詞は外項増加型の項構造を持っている。Cheng and Huangの論理によれば、(4-61b)では、V'の「洗」が活動動詞なので、それを含む結果合成動詞「洗漏」も活動動詞のはずである。しかも、活動動詞が内項増加型の項構造を持っているので、(4-61b)に対応する1項動詞は(4-61a)ではなく、(4-64)のはずである。

(4-64) *张三 洗漏了。

ところが、(4-64)は非文法的である。したがって、V'が主要部であるという持論を維持するためには、(4-61a)と(4-61b)の間にargument-suppressionという受動文的な派生関係があることを提案せざるを得ないであろう。

かりに、Cheng and Huangの見方がアプリアリに不可能でないにしても、彼らの見方では説明できない例がある。まず、V'が活動動詞であっても、結果合成動詞が活動動詞であるとは限らない。たとえば、(4-61b)の「洗漏」は活動動詞ではない。

(4-65) a. 盆 洗漏*(了)。

同(4-61a)

b. 张三 洗漏*(了) 盆。

同(4-61b)

(4-65)のように、「洗漏」は1項動詞の場合も2項動詞の場合も、実現相「了」が後続しなければならないことから、活動動詞ではなく、変化動詞であることが分かる。

さらに、同じ結果合成動詞でも、(4-66a)の「唱烦」と(4-66b)の「唱烦」の間には意味の違いがある。

(4-66) a. 张三 唱烦了 李四。

いやになる

张三が歌って李四をいやにさせた。

b. 李四 唱烦了。

李四は歌っていやになった。

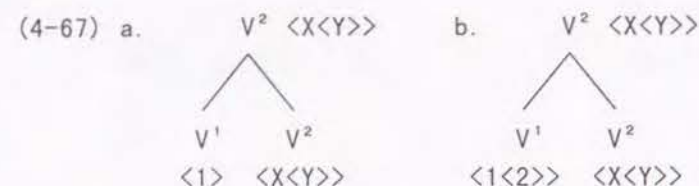
(4-66a)で歌う人は张三であるが、(4-66b)で歌う人は张三ではなく李四である。この事実から、2項動詞の「唱烦」と1項動詞の「唱烦」の間に派生関係があるとは言えない。したがって、Cheng and Huang(1994)のargument-suppressionという見方は受け入れ難い。

ただし、本論文にとって、合成する以前の「烦」が自他兼用動詞であったのに、(4-66a)と(4-66b)の対立のように、それをV²として含む結果合成動詞に自他兼用の機能がなくなるのはなぜかという問題がある。これについては、派生規則と合成規則の適用順序の問題であり、4-6節で詳しく論じる。

したがって、沈(1993)同様、(4-61a)の合成動詞はV²の項構造を受け継ぎ、その唯一の項はV²の外項であると結論づけざるを得ない。(4-61a)が中間動詞(middle verb)のような読みが可能なのは、V'がV²と合成する際、V'の外項が削除されることによって引き起こさ

れた現象であると説明することができる^{*16}。

つづいて、結果合成動詞が2項動詞である場合にも、V¹の項構造ではなく、V²の項構造が継承されることが観察される。



次の(4-68a)は(4-67a)のパターンであり、(4-69a)は(4-67b)のパターンである。

- (4-68) a. 张三 跑。
张三が走る。
- b. 张三 丢了 钱包。
財布
张三が財布をなくした。
- c. 张三 跑丢了 钱包。
张三が走って財布をなくした。

- (4-69) a. 张三 捅 那扇纸门。
くる 量詞 障子
张三がその障子を開ける。
- b. 那扇纸门 破了 一个洞。
その障子には1つの穴が開いた。

- c. 那扇纸门 捅破了 一个洞。
その障子が1つの穴が開いた。

(4-68c)と(4-69c)に示されているように、V¹が1項動詞でも2項動詞でもそれらの項構造が構文に現れえず、V²の項構造が受け継がれると考えられる。

さて、4-2節で中国語の一部の変化動詞は語彙レベルで2項動詞として機能することを述べた。それらがV²の位置に来る場合、その項構造が受け継がれているかどうかを見てみよう。まず、「瘋」と「干」は単独では2項動詞にならないが、形式動詞「弄」と合成することによって2項動詞になることができる^{*17}。

- (4-70) a. 李四 疯了。
李四が狂った。
- b. *张三 疯了 李四。
- c. 张三 弄疯了 李四。
やる
张三が李四を狂わせた。

- (4-71) a. 嘴唇 干了。
唇がひからびた。
- b. *张三 干了 嘴唇。
- c. 张三 弄干了 嘴唇。
张三が唇をひからびさせた。

したがって、次の(4-72a)も(4-72b)もV²の項構造が受け継がれ、それぞれ(4-67a)と(4-67b)の構造を示していると考えられる。

^{*16} 本来、middleという語は、主にギリシア語の文法で、主語によって表される人や物が動詞によって表される動作から影響を受ける場合に、その動詞の形、または態について用いられる名称であった。英語には本来の中間動詞がなく、This book sells well.のような構文がこれに近い表現である。この英語の構文には動作者が明示されえないが、動作者の存在が含意されるという特徴がある(安井1971、大塚・中島1982を参照)。

^{*17} 形式動詞とは、一般に、具体的な語彙的意味を持たない動詞である。英語では do などであり、日本語では「する、やる」などである。中国語では「干、做、搞、弄」がそれにあたる。

(4-72) a. 张三 闹疯了 李四。

張三が騒いで李四を狂わせた。

b. 张三 说干了 嘴唇。

張三がしゃべって唇をひからびさせた。

以上、2項合成動詞のV¹の項構造が構文に反映されず、V²の項構造が受け継がれていることから、(4-53)が事実にあった解釈であることが明らかである。

4-5. アスペクト性の継承

動詞連続における主要部の意味素性の継承は動詞の項構造だけではなく、動詞のアスペクト性にも及ぶ。4-2節では、活動動詞の兼用動詞と変化動詞の兼用動詞の間に、内項増加型と外項増加型という項構造上の対立が見られることを観察した。また、4-3節では、結果合成動詞のV¹は活動動詞の場合も変化動詞の場合もあるが、V²は変化動詞の場合しかないことを見た。この節では、まず1項活動動詞と1項変化動詞の間に、アスペクト性の対立があるのに対して、1項活動動詞に対応する2項動詞と1項変化動詞に対応する2項動詞との間に、アスペクト性の対立が見られないことを示す。この結論から、アスペクト性に関する主要部と非主要部の関係は、1項合成動詞では観察されうるが、2項合成動詞では観察し難いことがわかる。さらに、1項合成動詞では、V²のアスペクト性が受け継がれていることを見る。

4-5-1. アスペクト性の対立

この節では、1項活動動詞と1項変化動詞の間にアスペクト性の対立が見られるが、それぞれ対応する2項動詞との間にアスペクト性の対立が必ずしも見られないことを示したい。具体的には、1項動詞が活動動詞であれば、それが対応する2項動詞も活動動詞であるが、1項動詞が変化動詞であれば、それが対応する2項動詞は変化動詞である場合も活動動詞である場合もある。というのは、外項増加型の2項動詞は1項変化動詞の使役の意味、つまり、ある状態変化を引き起こすという意味を示すことができるからである。その場合、もし使役者が人間などであれば、活動動詞の特徴を持つ可能性は十分あるからである。「开」は1項動詞である場合、(4-73a)のように、変化動詞として振る舞うが、2項動詞である場合、(4-73b)のように、活動動詞として振る舞うようになると言える。

(4-73) a. 门 开*(了)。

ドアが開いた。

b. 你 开 门。

ドアをあける。

また、「坏」は1項変化動詞であるが、(4-74b)のように、2項動詞に変わっても変化動詞としての振る舞いをする。

(4-74) a. 我的名声 坏*(了)。

壊れる

私の名声が損なわれた。

b. 这件事 坏*(了) 我的名声。

このことは私の名声を損なわせた。

したがって、内項増加型と外項増加型の1項動詞間にアスペクト性の対立がある一方で、2項動詞の間には、アスペクト性の対立が必ずしもあるわけではないと言える。その図式は以下のようなものである。

(4-75) a. 1項活動動詞 → 2項活動動詞

b. 1項変化動詞 → 2項活動動詞、2項変化動詞

4-5-2. 結果合成動詞のアスペクト性

本論文では、項構造の観点からは、結果合成動詞の中でV²が主要部であると主張している。そして、前節の(4-75b)に示されているように、アスペクトについては、1項変化動詞の対応する2項動詞には活動動詞の特徴も変化動詞の特徴も見られる。この観察に基づいて、アスペクト性の継承という観点から、結果合成動詞についても次のような分布があるはずである。

(4-76) 結果合成動詞は1項動詞である場合、変化動詞の特徴だけを持つが、2項動詞で

では、「了」が生起しなければならないことから、その合成動詞はV'と関係なく、変化動詞の振る舞いをするのが観察される。

(4-80) a. *这些小字 看花 我的眼睛。
老眼になる

b. 这些小字 看花了 我的眼睛。

(4-81) a. 你 打开 门。

b. 他 打开了 门。

「看花」のV'と「打开」のV'がともに活動動詞であるにもかかわらず、V'を含む2項合成動詞は、(4-80b)のように変化動詞である場合も、(4-81a)のように活動動詞である場合もある¹¹⁸。

(4-82) a. *这瓶酒 醉倒 三个 人。

b. 这瓶酒 醉倒了 三个 人。

¹¹⁾ まず、(4-80a)が非文であることから、「看花」は変化動詞であることが分かる。また、(4-81)から分かるように、活動動詞においては「了」が付くことも、付かないことも可能である。

本論文の予測が妥当かどうかは、沈(1992)の活動動詞と変化動詞の違いを識別するテストを利用すればよい。すなわち、問題の合成動詞が変化動詞であれば、その動詞のアスペクトは実現相でなければならず、活動動詞であれば、実現相でなくてもよい。このテストを「活動動詞+変化動詞」と「変化動詞+変化動詞」という二つのタイプの1項合成動詞に施してみよう。

(4-78)では、 V' が活動動詞であるが、(4-79)では、 V' が変化動詞である。(4-78)と(4-79)

(4-83) a. 我 累死 你。

私は君を死なせるほど疲れさせる。

b. 你 累死了 张三。

君は张三を疲れさせて死なせた。

「酔倒」のV'と「累死」のV'がともに変化動詞であるにもかかわらず、それらのV'を含む2項合成動詞は(4-82a)のように変化動詞である場合と、(4-83a)のように活動動詞の場合がある。

以上の現象は、本論文の提案が妥当であることを支持する。結果合成動詞が活動動詞であるか変化動詞であるかはV'と関係なく、V²の問題である。すなわち、2項合成動詞に変化動詞の用法と活動動詞の用法があることは、V²自身が2項動詞である場合、変化動詞の用法も活動動詞の用法もあることと平行するからである。

Cheng and Huang(1994)は、V'の主要部性を維持するため、V'が活動動詞であるなら、その合成語は活動動詞であり、V'が変化動詞であるなら、その合成語は変化動詞であると主張しているが、(4-80b)のように、V'が活動動詞であるが、その合成動詞が変化動詞である例と、(4-83a)のように、V'が変化動詞であるが、その合成動詞が活動動詞である例は、(4-77)の仮説が誤りである証拠である。

以上の議論から分かるように、アスペクト性の継承の観点から見ても、V²が主要部であると言える。

4-6. 2種類の結果合成動詞

4-4節では、項構造の継承の点からV²が主要部であることを示し、4-5節では、アスペクト性の継承の点からもV²が主要部であることを論じた。しかし、V²が主要部だと主張するからには解決しなければならない問題がある。すなわち、「喝醉(飲んで酔っぱらう)」「听烦(聞いていやになる)」「吃饱(食べてお腹いっぱいになる)」などのような合成動詞は、1項動詞の場合、V²の項構造を受け継いでいるが、2項動詞の場合、V'の項構造を受け継いでいる。次の(4-84)の合成語は1項動詞であり、(4-85)の合成語は2項動詞である。

(4-84) a. 张三 喝醉了。

张三が酒を飲んで酔っぱらった。

b. *张三 喝了。

张三が飲んだ。

c. 张三 醉了

张三が酔っぱらった。

(4-85) a. 张三 喝醉了 酒。

张三が酒を飲んで酔っぱらった。

b. 张三 喝了 酒。

张三が酒を飲んだ。

c. *张三 醉了 酒。

(4-84b)が非文法的で、(4-84c)が文法的であることから、(4-84a)の「喝醉」はV²の項構造を受け継いでいることがわかる。それに対して、(4-85b)が文法的で、(4-85c)が非文法的であることから、(4-85a)の「喝醉」はV'の項構造を受け継いでいることが分かる。

ところが、アスペクト性の継承の観点から見れば、「喝醉」は、1項動詞の場合も2項動詞の場合も、同じようにV²のアスペクト性を受け継いでいることを示す現象が見られる。(4-86a)の「喝醉」は1項動詞であり、(4-86b)の「喝醉」は2項動詞である。

(4-86) a. 张三 喝醉*(了)。

张三が飲んで酔っぱらう(った)。

b. 张三 喝醉*(了) 酒。

张三が酒を飲んで酔っぱらう(った)。

(4-87) a. 张三 喝(了) 酒。

张三が酒を飲む(んだ)。

b. 张三 醉*(了)

张三が酔っぱらう(った)。

(4-86a)においても(4-86b)においても、実現相「了」がなくてはならないことから、合成動詞「喝醉」は変化動詞であることがわかる。一方、(4-87a)では、「了」があってもな

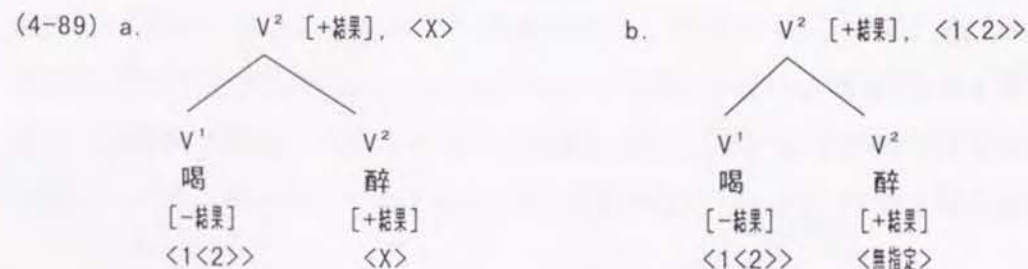
くてもよいが、(4-87b)では、「了」がなくてはならないことから、 V^1 の「喝」は活動動詞であるが、 V^2 の「醉」は変化動詞であることがわかる。したがって、1項動詞でも2項動詞でも「喝醉」は V^2 のアスペクト性を受け継いでいると言える。

1項合成動詞でも2項合成動詞でも V^2 のアスペクト性を受け継ぐことは本論文の予測するところであるが、項構造の継承という観点から見れば、2項合成動詞が V^1 の項構造を継承することは反例となる。なぜなら、本提案では、結果合成動詞の項構造は、 V^2 の項構造と一致しなければならないので、 V^2 が2項動詞の振る舞いをしなければ、それを含む合成動詞には2項合成動詞の振る舞いが不可能であると予測できるからである。しかし、この節では、(4-85a)の現象について、 V^2 の「醉」は項構造に関して無指定であるため、 V^1 の項構造が受け継がれるのだと説明する。

ここで、第3章で提案された主要部の定義を思い出していただきたい。それを(4-88)に再掲する。

(4-88) Xの下位単位ZとYが同じ属性によって特徴づけられ、かつ異なる意味指定(+,-の値)がある場合、Xが継承している意味指定を持つ下位単位はXの主要部である。

(4-88)の「Xの下位単位ZとYが同じ属性によって特徴づけられ」というところに注意されたい。もし(4-84a)の合成動詞「喝醉」の「醉」が項構造に関して無指定であると仮定すれば、項構造が受け継がれるのは「喝」しかない。そして、(4-88)の定義に基づけば、 V^1 が主要部であるとは言えない。なぜなら、2つの要素が「項構造」という同じ属性によって特徴付けられなければ、比べようがないからである。(4-84a)タイプの合成語の構造は(4-89a)であり、(4-85a)タイプの合成語の構造は(4-89b)であると考えられる。

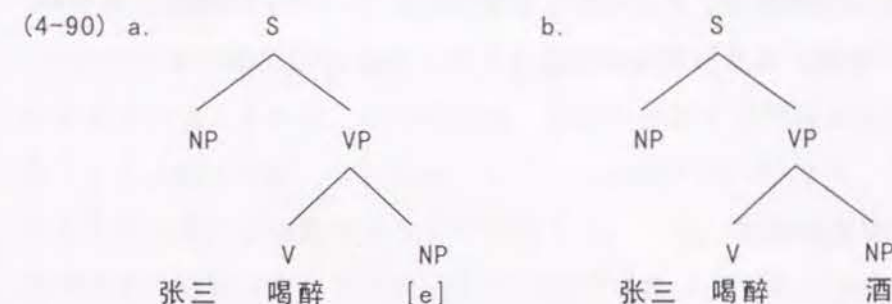


この考えが妥当であることを示すためには、2つの点を論じなければならない。1つは、

(4-89a)の「喝醉」(1項動詞)と(4-89b)の「喝醉」(2項動詞)の間に派生関係がないことを示さなければならないという点である。このことが分かれば、2つの V^2 「醉」がそれぞれ異なる意味素性を持っていても不思議ではないからである。もう1つの点は、 V^2 「醉」が項構造の指定を放棄する動機を示さなければならないということである。なぜなら、正当な動機がなければ、<無指定>とする分析は恣意的な憶測にすぎないからである。

4-6-1. 規則の適用順序

ここで、1項動詞の「喝醉」と2項動詞の「喝醉」に派生関係がないことを示したい。Cheng and Huang(1994)では、項構造について「喝」が内項増加型の活動動詞であり、「喝醉」がその性質を受け継ぎ、2項動詞の「喝醉」は1項動詞の「喝醉」から派生したものであると説明している。その構造は(4-90)に示される。



確かに、中国語の単純動詞において、1項動詞にはアスペクト性の対立があるが、それが対応する2項動詞にはその対立が見られないという理由から、1項動詞と2項動詞の間に(4-91)のような派生規則があると考えても不思議ではない。

- (4-91) a. 1項活動動詞は内項を増やせ。
b. 1項変化動詞は外項を増やせ。

(4-91a)の派生規則によって、次の(4-92)構文が形成され、(4-91b)の派生規則によって、(4-93)の構文が形成されることが考えられる。

(4-92) a. 张三 吵。
吵

張三がうるさい。

b. 张三 吵 李四。

張三が李四をうるさがらせる。

(4-93) a. 孩子 丢了。

子供がいなくなった。

b. 张三 丢了 孩子。

張三が子供を見失った。

しかし、合成動詞においては、1項合成動詞と2項合成動詞の間に(4-91)の派生規則が適用されえないことを示す現象が見られる。たとえば、上の(4-92)の「吵」には自他兼用形があるが、結果合成動詞の「吵醒」には、(4-94)のように、1項動詞の用法がない。

(4-94) a. *张三 吵醒了。

張三が騒いで目が覚めた。

b. 张三 吵醒了 李四。

張三が騒いで李四を起こした。

また、(4-93a)の「丢」は外項を増やして、(4-93b)を派生したが、「丢」を含む結果合成動詞の「跑丢」は、外項を増やして2項動詞文を派生すると、(4-95b)のように、意味が変わってしまう。

(4-95) a. 孩子 跑丢了。

子供が走ってなくなった。

b. 张三 跑丢了 孩子。

張三が走って子供を見失った。

(4-95a)では、「孩子」が走るが、(4-95b)で走るのは「张三」である。さらに、補部の意

味が変わる例もある。

(4-96) a. 张三 闹晕了。
めまいする

張三が騒いでめまいした。

b. 张三 闹晕了 李四。

張三が騒いで李四がめまいした。

1項動詞(4-96a)の場合、めまいがするのは主語の「张三」であるが、2項動詞の(4-96b)の場合、めまいがするのは補部の「李四」である。

上のような現象は、結果合成動詞には自他兼用形がないことを示している。本論文では、合成語が形成される前に、(4-91)の派生規則が V^1 と V^2 に適用され、その後、 V^1 の1項動詞および2項動詞がそれぞれ、 V^2 の1項動詞および2項動詞と合成すると考えている。もしCheng and Huangのように、結果合成動詞が形成されたあとに(4-91)のような派生規則が適用されるとすれば、(4-94)では、なぜ2項派生動詞があるのに、その派生の基底形である1項動詞が存在しないのか、また、(4-95)と(4-96)では、なぜ外項の有無が意味の相違を引き出すのかは説明できないであろう。一方、筆者のように、(4-91)のような派生規則が結果合成動詞が形成されるまえに適用されるとすれば、(4-94a)(4-95a)(4-96a)では、 V^1 がそれぞれ1項変化動詞と合成しているが、(4-94b)(4-95b)(4-96b)では、 V^1 がそれぞれ2項動詞と合成していると説明できる。(4-94a)が非文法的であるのは、意味的な理由による。すなわち、1項動詞 V^1 「吵」の項と1項動詞 V^2 「醒」の項が同一指示物を指すことは、現実世界には存在しにくいからである。

したがって、(4-89a)と(4-89b)の2つの合成動詞の間には派生関係がないと言えよう。

4-6-2. V^2 の意味指定

この節では、 V^2 が項構造の指定を放棄する動機について議論したい。

周知のとおり、中国語にアスペクトを示す純粋な接辞はない。接辞に近いものとしては「了(完了)」「着(持続)」「过(経験)」があるが、それらも本動詞が文法化(grammaticalization)してできたものである。それ以外のアスペクトマーカ―はほとんど動詞としても機能する。たとえば、始動を示す「-起」は「起きる」としても用いられて

いる。完了を示す「-完/-尽」にも、事前の準備を示す「-好」にも本動詞としての用法がある。それらは、アスペクトを示す機能だけを明示するために、本動詞としての項構造を放棄していると考えられる。なぜなら、 V^2 が項構造を持っていれば、 V^1 との間に選択制限が起こるために、純粋なアスペクトマーカ―としての機能が損なわれてしまうからである。

このことは、中国語のすべてのアスペクトマーカ―らしいものに項をとるものがないことから伺える。たとえば、(4-97)のように、 V^2 「-好」が本動詞では「よい」という意味を持つ1項動詞であるが、アスペクトマーカ―としては項をとっていない。

(4-97) a. 张三 写好了 名子。
 書く 名前

張三が名前をきちんと書いた。

b. *→名子 好了。

名前がよかった。

c. *→张三 好了

張三がよかった。

(4-97a)の「好」については、(b)の読みも(c)の読みもないことから、「-好」が項構造を持っていないことがわかる。一方、アスペクトの観点から見れば、(4-97)の「好」は V^1 の実現相[+結果]を示していると分析できる。この分析が妥当であることが次の現象から伺われる。中国語には2つの否定要素がある。1つは非実現相を否定する要素「不」であり、もう1つは実現相を打ち消す要素「没」である。これらの否定要素と共起制限があるのは V^2 であり、 V^1 ではない。

(4-98) a. 张三 不/没 写 名子。

張三が名前を書かな(い/かった)。

b. 张三 *不/没 写好 名子。

張三が名前をきちんと書かなかった。

更に、同じ否定辞「没」と共起しても、打ち消されるのは V^1 の内容ではなく、 V^2 の内容で

ある。(4-99)には(a)の読みはないが、(b)の読みはある。

(4-99) 张三 没 写好 名子。

張三が名前をきちんと書かなかった。

a. *→張三が名前を書かなかった。

b. →張三が名前を書くことが終わっていない。

(4-85a)の「喝醉」の「醉」も「好」と同じように説明できると思われる。ただ「-醉」は「-好」ほど文法化していない。両者の類似点の1つは、 V^1 の項構造の継承を許すことにある。もう1つの類似点は、両方とも V^1 の[+結果]であることを示す。これは否定要素との共起制限からわかる。

(4-100) a. 张三 不/没 喝 酒。

張三は酒を飲ま(ない/なかった)

b. 张三 *不/没 喝醉 酒。

張三は酒を飲んで酔っぱらわなかった。

この振る舞いはアスペクトマーカ―の「了、着、过」と同じである。

(4-101) a. 张三 不/没 喝 酒。

張三は酒を飲ま(ない/なかった)。

b. 张三 *不/没 喝着 酒。

持続相

張三が酒を飲んでいない。

c. 张三 *不/没 喝过 酒。

経験相

張三が酒を飲んでいない。

そして、「没」と共起しても、「没」によって打ち消される内容は V^2 であり、 V^1 ではない。

(4-102) 张三 没 喝醉 酒。

張三は酒を飲んで酔っぱらっていない。

a. *→張三が酒を飲まなかった。

b. →張三が酔っぱらわなかった。

(4-102)には(a)の読みはないが、(b)の読みはある。

以上の観察からわかるように、 V^2 が項構造を放棄する動機は「-好」などと同じように、アスペクトマーカとしての機能を十全に発揮するためであると言える。これと似たような現象が日本語にもある。日本語の「降り出す」の「出す」は起動を示すだけで、項構造に関して無指定であると考えられる。

ここで注意されたいのは、項構造を持つ動詞と項構造を持たない動詞の間に明確な境界が見られないことである。しかし、少なくともアスペクトしか示せない V^2 には「使役」の意味がないと言える。たとえば、 V^2 の「累」は同じ「追」と合成するにしても、項構造を持つ場合と持たない場合がある。次の(4-103)の文には3つの解釈がある。

(4-103) 李四 追累了 张三。

a. →李四が張三を追って張三を疲れさせた。

b. →李四が張三に追われて張三を疲れさせた。

c. →李四が張三を追って李四が疲れた。

(4-103)の(a)と(b)の読みでは、 V^2 が $\langle Y \langle X \rangle \rangle$ の項構造を持ち、その項構造が合成語に継承されることが考えられるが、(c)の読みでは、 V^2 は「使役」の意味がとれないので、項構造を持たず、 V^1 の実現相を示すだけであると考えられる。

したがって、(4-85a)の「喝醉」は本論文の提案の反例にはならないと考えられる。

4-7. まとめ

この章では、中国語の結果合成動詞の V^1 と V^2 が修飾関係であるため、主要部末位の構造を持つことを考察してきた。具体的には、まず、中国語の単純動詞を、そのアスペクト性に基づいて、3種類に分類できるが、状態動詞と変化動詞は類似性が強いことから、活動

動詞と変化動詞の2種類にまとめられることを見た。このアスペクト上の対立に基づいて、中国語の単純動詞はまた、内項増加型と外項増加型の2種類の自他兼用動詞に分類できることを示した。それらの項構造をそれぞれ、(4-104)と(4-105)に再掲する。

(4-104) 1 項活動動詞-2 項動詞

a. $\langle X \rangle$

b. $\langle X \langle Y \rangle \rangle$

(4-105) 1 項変化動詞-2 項動詞

a. $\langle X \rangle$

b. $\langle Y \langle X \rangle \rangle$

さらに、結果合成動詞では、(4-106)に示すように、前項には活動動詞も変化動詞も来ることができるが、後項には変化動詞しか来ないということが観察された。

(4-106) a. 活動動詞+変化動詞

b. 変化動詞+変化動詞

以上の観察のもとで、結果合成動詞は、 V^1 が活動動詞であろうが、変化動詞であろうが、 V^2 と同じ項構造、すなわち、(4-105)の項構造を受け継ぐばかりではなく、 V^2 のアスペクト性に関する特徴を受け継ぎ、1項動詞の場合は変化動詞、2項動詞の場合は活動動詞あるいは変化動詞の振る舞いをするを明らかにした。したがって、項構造およびアスペクト性の継承という観点から、結果合成動詞では、 V^2 が主要部であると結論される。

第5章 動詞連続構文の構造(2) — 「V-得」合成動詞の分析*

5-0. はじめに

中国語には日本語のように、文法関係を示す接辞がほとんどないので、同じような文法関係を示すのに動詞が利用される。利用される動詞の中には文法化(grammaticalization)の過程をへて、本来の語彙的意味が薄れ、文法機能しかないものがある。意味の機能化は動詞の機能語化を引き起こす。中国語でよく見られるものは、主要部の意味役割を示すいわゆる介詞や、動詞のアスペクトを示す「了、着、过」のほかに、ある行為の結果を示す「得」のようなものである。日本語では、ある行為の結果や程度を示すのに、「に」、「ほど」、「まで」などの助詞が利用されるが、中国語では、「-得」、「-在」、「-到」、「-成」というような動詞が利用される。たとえば、

(5-1) a. 张三 跑-得 很 累。

張三が 疲れる-ほど 走った。

b. 张三 把 房子 盖-在 山上。

処置動詞 建てる

張三が 山-に 家を建てる。

c. 张三 跑-到了 东京。

張三が 東京-まで 走った。

d. 这本书 翻译-成了 英文。

この本が 英語-に 訳された。

この章では、これまで数多くの分析がなされてきた「V-得」構文を取り上げ、その構造を動詞連続構文という観点から明らかにしたい。

中国語の「-得」は動詞に後続し、ある行為や状態の結果や程度を表す補部をとる。典型的な「V-得」構文の特徴は次のような例に含まれる。

(5-2) a. 李四 哭得 张三 很 烦。

李四は張三がいやになるほど泣いた。

b. 李四 唱得 很 好听。

美しい

李四の歌は美しい。

c. 这道菜 吃得 张三 很 美。

量詞料理 食べる 満足する

この料理は張三を満足させた。

「V-得」構文の特徴は、「V-得」の前項要素V(以下、単にVと呼ぶ)の項構造が「V-得」構文の統語構造に反映されないということである。具体的には(5-2)の3つの例文に見られる次の現象がある。

(5-2a)については、1項動詞「哭(泣く)」は、(5-3)のように、「张三很烦」という補文をとらないが、「-得」に後続されると、(5-2a)のように、その補部の位置に補文が現れる。

(5-3) *李四 哭 张三 很 烦。

(5-2b)については、「唱」は動作者と非動作者をとる2項動詞であり、普通、(5-4b)のように、文脈がなければ、非動作者の項の脱落は許されない¹⁾。

(5-4) a. 李四 唱 一支 歌。

李四が歌を歌う。

b. *李四 唱。

李四が歌う。

しかし、「-得」に後続される場合、(5-2b)のように、その非動作者の項が当該構文に現れる位置がなくなる。

* 第5章は、沈(1990)を加筆訂正したものである。

¹⁾ 非動作者は動作者以外の項(non-agent)を指す。

(5-2c)については、同じ2項動詞である「吃」は(5-5)に示すように、動作者を主語、非動作者を補部としてとるが、逆は成り立たない。

- (5-5) a. 张三 吃 这道菜。
張三がこの料理を食べる。
b. *这道菜 吃 张三。

しかし、「-得」に後続された場合、(5-2c)のように、非動作者が主語の位置に来ることができる。

従来の研究では、「V-得」の以上の3つの現象の中で、特に(5-2a)の現象に注目し、(5-6)の分析が一般的としている。この分析を「単純動詞説」と呼ぶ。

(5-6) 単純動詞説

「V-得」文では、Vが主要部で、「-得」が補部を導入する要素である。

従来、補部が句なのか節なのかについては論争があるが、Vが主要部であることに対しては異論がない。詳しくは王(1943-44)、朱・呂(1951)、Chao(1968)、Hashimoto(1971)、呂(1979)、朱(1982)、Huang(1982, 1988c)、施(1985)、呉(1987)などを参照されたい。

単純動詞説を代表するような研究はHuang(1982, 1988c)である。第3章で述べたように、Huangは中国語の句構造規則として(3-23)を提案している。それを(5-7)に再掲する。

(5-7) The X'-structure of Chinese is of the form

a. $[X_n X^{n-1} Y P^*]$ iff $n=1$, $X \neq N$

b. $[X_n Y P^* X^{n-1}]$

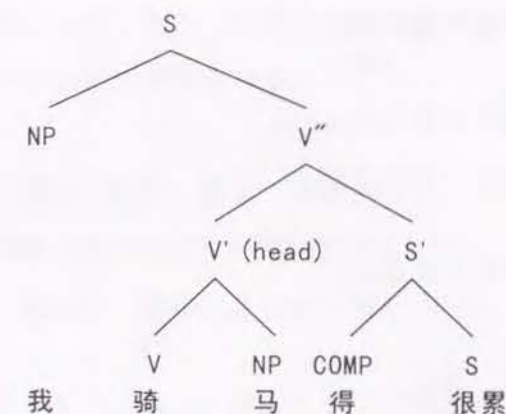
X' refers to X and its subcategorized complements (N/V/A/P and their subcategorized complements). YP^* means more than one YP is allowed.

Huangは(5-7)の提案が妥当であることを支持する例として、「-得」を含む(5-8)の構文を取り上げ、(5-9)のように分析している。

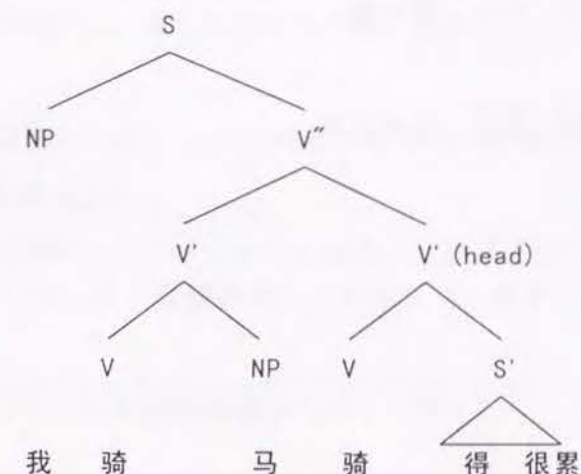
(5-8) 我 骑马 骑得 很 累

私は馬に乗ってとても疲れた。

(5-9) a. D構造



b. S構造



Huangの説明によれば、(5-9a)のD構造では、V'の「骑马」が主要部で、S'は付加部である。すなわち、(5-9a)の構造は、V''レベルで主要部頭位であるため、(5-7a)の中国語のV'レベルでしか主要部頭位の構造が起こらないという句構造規則に違反する。それを満たすために、(5-9b)のS構造では、左側の主要部「骑」が右側へもう1個コピーされ、その結果、右側の新しいV'「骑得很累」がV''の主要部になり、規則に合った構造ができあがる。

しかし、この分析にはつぎのような問題がある。第1に、(5-7a)の規則を維持するために、動詞のコピーという操作が導入されているが、そのような操作の存在は疑わしい。た

例えば、(5-10)と(5-11)を見られたい。

(5-10) a. 李四 唱歌 唱得 张三 很烦。

李四が歌を歌って张三を煩わした。

b. 李四 骑摩托 骑得 张三 睡不着。
バイク 不可能

李四がバイクに乗って张三が寝られない。

c. 李四 提问题 提得 张三 答不上来。
出す

李四が質問して张三が答えられない。

(5-11) a. 李四 唱歌 弄得 张三 很烦。

同(5-10a)

b. 李四 骑摩托 弄得 张三 睡不着。

同(5-10b)

c. 李四 提问题 弄得 张三 答不上来。

同(5-10c)

(5-10)と同じ意味を表す(5-11)では、Vではなく、形式動詞「弄」が「-得」とともに現

れている²。この現象に対してどのような説明が与えられるかについては、Huangは何も述べていない。考えられる可能性としては、同一のVがコピーによって連続する場合、2番目のVが「弄」に置き換えられるという説明がなされるかもしれない。しかし、この見方では、1つの現象の説明に対して、かなり煩雑な操作が必要になることになる。さらに、(5-12)においては、コピーされる位置に現れるVが先行動詞と異なるので、その間に統語的なコピー操作があるとは考えられない。

(5-12) a. 李四 唱歌 喊得 张三 很烦。

李四が歌を歌って张三を(叫び)煩わした。

b. 李四 骑摩托 震得 张三睡不着。
響く

李四がバイクに乗って響いて张三が寝られない。

c. 李四 提问题 问得 张三答不上来。

李四が質問して张三が問われて答えられない。

上の分析から、動詞のコピーという統語的な操作が存在するとは言い難く、(5-9a)から(5-9b)への変形も疑わしい。

第2に、なぜ動詞のコピーが行われた結果、主要部も左から右へと変わるのかという奇

² 形式動詞は(i)のような活動動詞の代用だけではなく、(ii)のような変化動詞の代わりにも用いられる。

(i) a. 张三 闹得 我 一夜 没 睡觉 了。

张三が騒いで、私を一晚寝させなかった。

b. 张三 搞得 我 一夜 没 睡觉了。

同上。

(ii) a. 这间房子 呆得 我直发闷。

量詞 いる 気持ち

この家は私を息ぐるしくさせた。

b. 这间房子 弄得 我直发闷。

同上。

妙な発想に対して何の説明も与えていない。

以上の2つの問題点はHuangの分析にとって重大だと思われる。さらに、単純動詞説は「V-得」構文の(5-2b)(5-2c)に含まれる現象も説明できないと思われる。なぜなら、(5-2b)と(5-2c)はVが主要部ではないことを示唆するからである。

本論文では、「V-得」構文に関する(5-2)の諸現象をとらえるために、次の(5-13)を提案する。以下、本提案を「合成動詞説」と呼ぶ。

(5-13) 合成動詞説

「V-得」は「得」を主要部とする主要部末位の2項合成動詞である。

合成動詞説と単純動詞説との最大の相違は、「V-得」という合成動詞の中で、Vが主要部なのか、それとも、「-得」が主要部なのかである。単純動詞説では、Vが主要部であるのに対して、(5-13)の提案では、「-得」がその合成動詞の主要部である。以下、合成動詞説のほうがより妥当であることを論じていく。

5-1. 「-得」と「得」

従来の研究では「-得」を助詞や接辞とする説がある。呂(1980)は、次のように指摘している。

「得de[助]连接表示程度或结果的补语。基本形式是'动/形+得+补'。动词不能重叠,不能带'了、着、过'。」

(助詞である「得」は程度や結果を表す補語と結び付く。基本形式は「動/形+得+補」であり、動詞は反復不可能で、「了、着、过」が後続しない。)

それとほぼ同じ考え方を示しているのに呉(1987)がある。彼は

「结构助词「得」。…「得」是构成动补结构的文法手段,不充当句法成分。」

(「得」は構造助詞である。…「得」は動補構造を形成する文法手段であり、文の成分にならない。)

と指摘している。そして、朱(1982)は

「表示状态的述补结构里的「得」则是一个动词后缀。」

(状態を表す動補構造の「得」則ち動詞の接尾辞である。)

と指摘し、「-得」を動詞の接辞として扱っている。

「-得」は形態的に拘束形式であり、独立して存在できない。その意味では助詞と呼んでも、接辞と呼んでも構わないが、「-得」の形態的な側面ではなく、統語的な側面に目を向ければ、「-得」は本動詞の「得」と平行性を持つ。

第1に、(5-13)に示したように、「V-得」が2項動詞であるのに対して、本動詞の「得」も2項動詞である。『现代汉语词典』には、本動詞の「得」について(5-14)の意味があげられている。(5-15)はその対応例である。

(5-14) a. 何かを手に入れる。

b. 演算してある結果を得る。

(5-15) a. 他 得了 一个 儿子。

彼が息子を得た。

b. 二三 得 六。

$2 \times 3 = 6$

「得」には、(5-14)に示すように、「誰か(何か)が何かを得る」という2項動詞の用法を持つ。これと平行して、(5-16)の「V-得」構文の「-得」も「ある事柄が何らかの結果または評価を得る」という意味をもつと考えられる¹⁾。

(5-16) a. 张三 学英文 学得 很烦。

¹⁾ 「-得」に後続する部分は結果を示すほかに、評価を示すことも可能であることを認める研究はほかにも見られる。詳しくは劉他(1983)を参照されたい。

張三が英語を勉強していやになる。

- b. 张三 学英文 学得 很用功。
効

張三がとても頑張って英語を勉強している。

(5-16)では、各々「张三学英文」という事柄が「张三很烦」／「很用功」という結果／評価を得たと解釈できる。

第2に、本動詞の「得」も「-得」も変化動詞である。たとえば、「得」を活動動詞「要(もらう)」と比較すれば分かるように、活動動詞とともに現れる「拼命(一生懸命)」は「得」と共起しない。

- (5-17) a. 张三 得了 一个 儿子。
張三が一人の息子を得た。

- b. 张三 要了 一个 儿子。
張三が一人の息子をもらった。

- (5-18) a. *张三 拼命 得 儿子。
張三が一生懸命に息子を得る。
b. 张三 拼命 要 儿子。
張三が一生懸命に息子をもらう。

同様に、「V-得」の場合、Vが活動動詞の素性を持っていても、「-得」に後続された場合、全体は変化動詞になってしまう。したがって、「拼命」が共起する(5-19)は非文となる。

- (5-19) a. 张三 拼命 跑。
張三は懸命に走る。
b. *张三 拼命 跑得 很累。

以上の観察から、「-得」は「得」と統語上及び意味上の平行性があることがわかる。

この平行性を重視するなら、「-得」を「得」とは同じ2項動詞と仮定することができる。その「-得」と「得」の項構造は(5-20)である。

(5-20) (-)得 <X<Y>>

5-2. 「-得」の項構造の継承

Vも「-得」もそれぞれの項構造を持っている。この節では、Vが何項動詞であっても、「-得」に後続された場合、それはつねに「原因(cause):結果(result)」という2つの項を持つことを示したい。これは「V-得」合成動詞はVではなく、「-得」の項構造を受け継いでいることを意味する。これを図示すれば、次のようになる。

(5-21) V<n項> + 得<X<Y>> → V-得<X<Y>>

すでに第4章の4-4節で考察した主要部の項の保持という観点から、「V-得」構文では、「-得」の項構造さえ満足されればよいのであって、Vの項が現れるとは限らないということを主張する。つまり、「V-得」合成動詞において、「-得」が主要部だと主張するので、合成動詞においては「-得」の項構造が継承されると考えられる。まずVが1項動詞の場合を考えよう。

(5-22)

```
      V-得 <X<Y>>
      /  \
     V    -得
    <1>   <X<Y>>
```

「乐」という動詞は単独では1項動詞で、補文をとらない。

- (5-23) a. 张三 乐了。
張三が笑った。
b. *张三 乐了 站不起来。
立つ あがる

張三が立ちあがれないほど笑った。

しかし、「乐」が「-得」と合成すると、「乐」ではなく、「-得」の項構造が上位に継承されることになる。

(5-24) a. *张三 乐得。

b. 张三 乐得 [(他自己)站不起来了]。

張三が(自分が)立ちあがれないほど喜んだ。

(5-24a)は非文法的である。Vを主要部とする単純動詞説では、なぜVが1項動詞なのに、それを含む結果合成動詞が1項動詞にならないのかという問題について、「-得」は補文マーカーなので、補文がそれに後続しなければならないのに、どうではないからであると説明するかもしれない。これに対して、「-得」を主要部とする合成動詞説では、「-得」が主要部なので、「-得」の<原因<結果>>の項構造が継承されなければならないのに、内項が現れていないからであると説明することができる。

一方、(5-24b)においては、「乐得」がVの項構造と「-得」の特性を受け継いでいると指摘されるかもしれない。しかし、その説明が妥当でないことは次の例によって示される。

(5-25) a. 这一句话 乐得 [张三站不起来了]。

この一言で張三を立ちあがれないほど喜ばせた。

b. *这一句话 乐了。

(5-25a)の構文には、(5-25b)の例から明らかなように、「乐」の項と思われるものはない。合成動詞説で説明すれば、主語名詞句「这一句话」はVの項と関係なく、「-得」の項「原因」であるということになる。すなわち、「乐得」は「-得」の<原因<結果>>の項構造さえ満たされればよい。

(5-24)の「乐得」がV「乐」の項構造を受け継いでいないことは、また形式動詞の挿入からもわかる。

(5-26) a. 这一句话 弄得 [张三站不起来了]。

この一言は張三を立ちあがれないようにした。

b. 这一句话 搞得 [张三站不起来了]。

同上。

c. 张三 弄得 [(自己)站不起来了]。

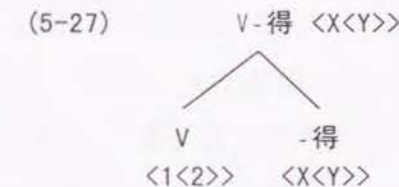
張三が立ちあがれないようになった。

d. 张三 搞得 [(自己)站不起来了]。

同上。

形式動詞が挿入できることは、「V-得」合成動詞の項構造を担っているのがVではなく、「-得」であることを語っている。

また、Vが2項動詞の場合も同様である。



たとえば、「灌(注ぐ)」という動詞は(5-28a)のように、動作者と非動作者をとる2項動詞であるが、補文をとらない。

(5-28) a. 李四 灌 张三。

李四が張三を飲ませる。

b. *李四 灌 张三站不起来了。

しかし、「灌得」の項構造がVの<動作者<非動作者>>ではないことは、(5-29a)が文法的であるが、(5-29b)が非文法的であることからわかる。

(5-29) a. 这瓶酒 灌得 张三站不起来了。

この酒が張三を立たせなかった。

b. *李四 灌得 张三。

さらに、「灌得」が「-得」の項構造を継承していることは、Vが形式動詞によって替えられることから伺える。

(5-30) a. 这瓶酒 弄得 张三站不起来了。

この酒が张三を立たせなかった。

b. 这瓶酒 搞得 张三站不起来了。

同上。

また、同じ2項動詞でも、Vの項の配列と「-得」の項の配列が異なるという現象が見られる。「吃」という2項動詞を見てみよう。この動詞の項構造は<動作者<非動作者>>であり、<非動作者<動作者>>ではない。それは、(5-31a)が文法的であるが、(5-31b)が非文法的であることによって裏付けられる。

(5-31) a. 张三 吃 这顿饭。

食べる 量詞

张三がこの料理を食べる。

b. *这顿饭 吃 张三。

この料理が张三を食べる。

ところが、「吃」が「-得」と合成する場合、「非動作者」に相応する名詞句が主語の位置に来ることがある。

(5-32) a. 这顿饭 吃得 [张三很美]。

満足する

この料理は张三を満足させた。

b. *[张三很美] 吃得 这顿饭。

张三が満足したのはこの料理を食べた。

もし(5-32a)の主要部が「吃」と考えれば、その「吃」の補部「这顿饭」が主語の

位置に来ていることは説明できない。しかも、もし(5-32a)の述部が「-得」を主要部とする「吃得」合成動詞であり、「-得」の項構造は(5-33a)であると考えれば、無理のない説明が得られる。

(5-33) a. <原因<結果>>

b. *<結果<原因>>

「吃得」の「原因」は「这顿饭」であり、「結果」は「张三很美」である。(5-32a)は(5-33a)と対応する。(5-32b)は(5-33b)の項構造を持つため、非文になる。以上、「-得」の項構造は「V-得」合成動詞に受け継がれることを見てきた。

5-3. 「-得」のアスペクト性の継承

「V-得」合成動詞において、「-得」が主要部であるならば、Vのアスペクト性ではなく、「-得」のアスペクト性が継承されることが予測される。この節ではこの予測を検証しよう。

まず、「拼命(懸命に)」は意志的な働き掛けを表すような副詞である。この副詞は活動動詞と共起するが、変化動詞とは共起しない。

(5-34) a. 张三 拼命 打 李四。

张三が一生懸命に李四を殴った。

b. *张三 拼命 活。

张三が一生懸命に生き返る。

5-1節で記述されているように、「得」は変化動詞なので、「拼命」と共起しない⁴⁴。同じように、「-得」を主要部とする「打得」も「拼命」と共起しない。

⁴⁴ 「-得」は普通の変化動詞と違って、「了」の後続を許さない。この現象はおそらく、「-得」が機能語化されていることと関係があると思われる。

張三が一生懸命に李四を殴って李四が立てなくなった。

さらに、動作や状態の実現を示す副詞「已经(すでに)」はVとも「-得」とも共起可能な副詞であるが、「V-得」と共起する場合、Vの示すイベントの実現を示さず、「-得」の示すイベントの実現を示している。たとえば、(5-36)の文では、(a)ではなく、(b)の意味が含意される。

b. →張三はすでに目が赤くなった。

この節では、以下のような、「V-得」の左側にVP'があるような例について考える。

李四が質問して張三を答えられなくさせた。

⁴⁵ 厳密な定義に基づく説明はChomsky(1981)、特に中国語についてはHuang(1982)を参照されたい。

(5-39) a. 张三_i 唱得 他_j 很烦。

張三が彼を（歌い）煩わした。

b. [张三_i 唱歌] 唱得 他_j 很烦。

張三が歌を歌うことは彼を煩わした。

(5-40) a. 张三_i 问得 他_j 筋疲力尽。

疲れきる

張三が彼を（何かを質問して）疲れさせた。

b. [张三_i 问问题] 问得 他_j 筋疲力尽。

張三が質問して、彼を疲れさせた。

(5-39a)の「张三」が文全体の主語であるため、「他」と「张三」が1つの文に共存する。つまり、同一節内要素である。そのために、「他」と同一指示の名詞句は「张三」ではありえない。一方、(5-39b)の場合、「张三唱歌」という節が文全体の主語であるため、「他」と節主語内部の主語「张三」とは同一節内要素ではない。故に、「他」と同一指示の名詞句は「张三」であってもよい。(5-40)も同様である。

5-4-2. ポーズの挿入

Huang(1982)は、(5-41)のように、VP'と「V-得」の間にポーズがあることを観察した。

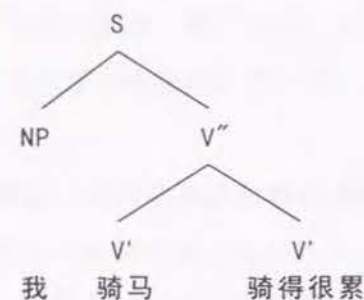
(^はポーズを示す。)

(5-41) 我骑马^骑得很累。

私は馬に乗って、とても疲れている。

この観察は、VP'と「V-得」がそれぞれ独立した動詞句(V')であり、さらに、VP'と「V-得」が動詞句連続(V'')を形成し、「V-得」文の述部となるというHuang自身の提案を支持すると主張されている。その構造は(5-42)である。

(5-42)



しかし、中国語では、Huangのいうように、ポーズの挿入が動詞句連続の内部で生起するというより、主語と述部の間に生起することが(5-43)、(5-44)からわかる。

(5-43) a. 我^洗衣服做饭。

作る

私は洗濯して御飯を作る。

b. ?我洗衣服^做饭。

同上。

(5-44) a. 我^去学校学习。

私は学校に行って勉強する。

b. ?我去学校^学习。

同上。

もし、この観察が正しいならば、Huang(1982)の「V-得」文の観察は、(5-42)の提案を支持するのではなく、本論文ですでに示した節主語という(5-45)の提案を支持することになる。

(5-45)



(5-45)では、「我骑马」と「骑得很累」が主述関係になっているので、ポーズの挿入が

第6章 動詞連続構文の構造(3) — 受動・使役構文の分析*

6-0. はじめに

中国語には、語形成であれ句形成であれ、それらに共通の基本構造規則があり、基本的な規則は第3章で提案した(3-31)である。この基本構造規則が提案されることによって初めて動詞連続構文の構造が把握できる。なぜなら、動詞連続構文において、(3-31)の基本構造規則に基づく(6-1)の3つのパターンで当該構文のほとんどの現象が説明できるからである。

- (6-1) a. もし要素間が主述・修飾関係であれば、主要部末位である。
 b. もし要素間が動補関係であれば、主要部頭位である。
 c. もし要素間が並立関係であれば、主要部両位である。

まず、(6-1)の3つのパターンの中で、従来(6-1b)で分析されていた結果合成動詞が(6-1a)で処理されなければならないことは第4章と第5章で述べた。次に検討しなければならないのは統語レベルの動詞連続構文つまり動詞句連続にも(6-1)の3つのパターンがあてはまるかどうか、そして、それ以外のパターンがあるかどうかである。従来の研究では、(6-1a)と(6-1c)のパターンがあることも指摘されている^{*)}。それらの例を(6-2)に示す。

- VP¹ VP²
- (6-2) a. 跟李四 学英语。
 ㄅ
 李四のもとで英語を学ぶ。
 b. 吃饭 睡觉。
 ご飯を食べたり寝たりする。

* 第6章は沈(1994b)と沈(1996)をまとめ、手を加えたものである。

^{*)} 詳しくはChao(1968)、丁他(1979)、Li and Thompson(1981)、朱(1982)を参照されたい。

(6-2)に示されているように、動詞句連続は動詞連続と違って、2つの動詞が補部をとった段階で連続している。したがって、項構造の継承という観点から見れば、主語がどの動詞句の項なのかが主要部を判断する基準となる。しかし、たとえ(6-2')のように主語を加えても、直感的に、その主語は名詞句がVP¹の項ともVP²の項とも考えられる。

- (6-2') a. 张三 跟李四 学英语。
 張三は李四のもとで英語を学ぶ。
 b. 张三 吃饭 睡觉。
 張三のご飯を食べ、また寝る。

ところが、(6-2' a)のVP¹は文頭に生起できるが、(6-2' b)のVP¹は文頭に生起できない。

- (6-3) a. 跟李四, 张三 学英语。
 李四のもとで、張三は英語を学ぶ。
 b. *吃饭, 张三 睡觉。
 ご飯を食べて、張三は寝る。

この要因について、筆者は、(6-2' a)の主語名詞句はVP²の項であり、(6-2' b)の主語名詞句はVP¹の項であるからだと説明したい。この裏付けとして、(6-3)にさらに主語を加えると、その文法性は逆になる。

- (6-4) a. *张三跟李四, 张三学英语。
 張三は李四のもとで、張三は英語を学ぶ。
 b. 张三吃饭, 张三睡觉。
 張三のご飯を食べて、張三は寝る。

(6-3)と(6-4)の対照から、「张三」を主語としてとれるか否かという点で、「跟李四」と「吃饭」が異なることが分かる。つまり、(6-2' a)の「张三」はVP¹「跟李四」の項ではなく、VP²「学英语」の項であるが、(6-2' b)の「张三」は2つの動詞句の項であると考えられる。したがって、項構造の継承という観点から見れば、(6-2a)の連続は(6-1a)の主要部

末位の構造を持ち、(6-2b)の連続は(6-1c)の主要部両位の構造を持つと言えよう。

残るは(6-1b)であるが、この構造を備えた構文が実際に存在するか否かということが問題の焦点となる。本章では、中国語の使役文や受動文及びその類の構文が(6-1b)の主要部頭位の構造を持つことを提案する。

本論文では、使役文と受動文はともに動詞連続構文であると分析するのであるが²、両者の間には次のような共通点と相違点が見うけられる。(6-5)と(6-6)が示すように、V²の補部であるNP²の指示物がNP⁰と異なる場合、NP²が必ず現れなければならない点が共通する。

NP⁰ V¹ NP¹ XP V² NP²
(6-5) a. 日本 让 美军 在冲绳 建立 军事基地。

日本は米軍に沖縄に軍事基地を作らせる。

b. *日本 让 美军 在冲绳 建立。

NP⁰ V¹ NP¹ XP V² NP²
(6-6) a. 日本 被 美军 在冲绳 建立了 军事基地。

日本は米軍によって沖縄に軍事基地を作られた。

b. *日本 被 美军 在冲绳 建立了。

ところが、(6-7)と(6-8)から分かるように、NP²の指示物がNP⁰と同じである場合、使役文では普通、再帰代名詞「自己」がNP²として使用されるが、受動文では「自己」を使わず、空にしておくのが普通である。

(6-7) a. ?张三 让 李四 表扬 自己。
ほめる

² 中国語では、一般に、使役文は「让(させる)」、受動文は「被(られる)」を用いて表される。そして、使役は「让」のほかに「叫」と「使」によっても表される。この三つの動詞は語彙的な意味は異なるが、同じ構造をとると考えられる。したがって、以下「让」をそれらの代表として議論を進める。

張三は李四に褒めさせる。

b. 张三 让 李四 表扬 自己。³

張三は李四に自分を褒めさせる。

(6-8) a. 张三 被 疯狗 咬了 自己。
狂 犬 咬

張三は狂犬に噛まれた。

b. ?张三 被 疯狗 咬了 自己。

張三は狂犬に自分を噛まれた。

中国語の使役文と受動文に関する以上の現象について、どのような説明を与えればよいのかは非常に興味深い問題である。

本論文は中国語の使役文と受動文に対して、1つの共通した構造を想定するものであるが、一般には、両者は異なる構造であると定義されている。両者の大きな違いは、使役文は対応するもとの文に項を増やしたものであるが、受動文は能動文から項を減らしたものであるという点である⁴。中国語に関して、Chao(1968)、丁他(1979)、朱(1982)は、伝統文法に基づいて、(6-5a)(6-7b)の「让」構文と(6-8a)の「被」構文とは異なる構造だとしている。使役文では、「让」という使役動詞の適用によって、使役者(NP⁰)という項が増やされたのに対し、受動文では、「咬」の補部「张三」が主語の位置に昇格し、もとの主語「疯狗」が降格して、「被」という介詞(前置詞)に伴われると分析されている。しかし、この分析では、(b)のタイプは説明できても、(6-6a)のタイプを説明することが明できない。

この問題に対し、中国語には2種類の受動文があるのだとする分析が考えらよう。1つは、(6-6a)のように使役文と同じ構造を持つ受動文、もう1つは、(6-8a)のように、従来

³ (6-7b)の「自己」の指示物はNP⁰でもNP¹でもありうる。(6-8b)の「自己」の指示物はNP⁰でしかありえない。その理由は「让」と「被」の語彙的な意味の違いによると思われる。「被」にはNP⁰の指示物がVP²の表すイベントから影響を受けなければならないという制限があるが、「让」にはそのような制限はない。したがって、「被」の語彙的制限を満たすために、NP²の位置の再帰代名詞の指示物がNP⁰と同じでなければならないのであろう。

⁴ 詳しくはKeenan(1985)、Crystal(1991)、安井(1971)などを参照されたい。

通り、補部の昇格や主語の降格が行われる受動文である。しかし、詳しく調べると、NP²の指示物がNP⁰と同じである場合、使役文と受動文の(6-7)と(6-8)のような相違点が絶対的ではないことが観察される。たとえば、適切な文脈があれば、使役文でNP²の位置にφが生起し、受動文で再帰代名詞が生起することも可能である。

- (6-9) a. 孩子_{子供} 哭着_泣 让_被 爷爷_{おじいさん} 抱_抱 φ₁。
子供は泣いておじいさんに抱いてもらおうとする。
- b. 没想到_思 张三_{張三} 却_却 被_被 疯狗_犬 咬了_咬 自己_{自己} 一口。
思いもよらず、張三は狂犬に自分自身を噛まれた。

(6-9a)では、子供がおじいさんの抱く対象であることは明らかなので、φの生起が可能であり、(6-9b)では、もし張三が狂犬を殴ろうとしたが、思いもよらず、かれ自身が噛まれたという文脈、すなわち「自己」を強調するような文脈であれば、「自己」の生起が十分可能である。このことから、使役文の(6-7b)と(6-9a)の違いと受動構文の(6-8a)と(6-9b)の違いはそれぞれ語用論的要因によることがわかる。そして、NP²の指示物がNP⁰と同じである場合、適当な文脈があれば、受動文でも使役文と同じように、再帰代名詞の生起が可能であるということは、受動文を二分する分析が必ずしも好ましいものではないことを示唆する⁹³。

さらに、両構文の共通性を示す例として、「让」が受身の意味で用いられることを指摘しておこう。中国語の使役と受身の意味の差があまりないので、1つの語で2つの意味を表すことが可能である。たとえば、NP²の指示物が(6-10a)のようにNP⁰と同じであるか、(6-10b)のようにNP⁰の身体の一部である場合に限り、「让」と「被」が同じ意味で交替可

⁹³ さらに、Ting(1992)は、NP²の指示物がNP⁰と同じである場合、人称代名詞が生起することも可能であると指摘している。この現象も受動文の二分法が妥当ではないことを示唆する。

- (i) 张三_{張三} 被_被 我_私 打了_打 他_他 一下。
張三は私に一回殴られた。

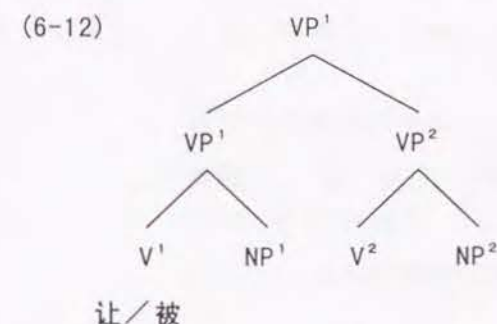
能なのである。

- (6-10) a. 张三_{張三} 让/被_被 李四_{李四} 打了_打 φ₁。
張三は李四に殴られた。
- b. 张三_{張三} 让/被_被 李四_{李四} 打了_打 脑袋_{あたま}。
張三は李四に頭を殴られた。

また、V²が(6-11)のように結果を表す場合にも置き換え可能である。

- (6-11) a. 房子_家 让/被_被 大水_{大水} 冲-走了_{流す 行く}。
家は洪水で流されてしまった。
- b. 张三_{張三} 让/被_被 李四_{李四} 拉-倒了_{引っ張る 倒れる}。
張三は李四に引っばって倒された。

このことから、「让」構文と「被」構文が実際には同じ構造を持っていると考えることが可能であり、本論文では、中国語には伝統文法で定義されているような受動文がなく、中国語のいわゆる受動文と使役文は、(6-12)で示すような構造を持つことを提案し、この構造の妥当性を様々な観点から論じていく。



(6-12)の妥当性を議論するうえで2つの重要な問題がある。第1に、NP¹はV¹の補部なのか、それとも、VP²の主語なのかである。これは中国語の使役文と受動文が動詞句連続

「絆倒」と「砸伤」は主語名詞句に「動作者」という意味役割を与えるが、(6-16)では、その主語名詞句が無生という語彙的な意味素性を持っているので、動作者という意味役割を担いにくいと、不自然となっている。

ところが、(6-16)と対応する「被」構文と「让」構文では、木村(1992)で観察されているように、動作主性の低い名詞句がNP¹の位置に置くことができる。

(6-17) a. 李四 被 石头 绊倒了。

李四は石に転ばせられた。

b. 李四 让 排球 砸伤了。

李四はバレーボールに当たられて傷つけられた。

(6-17)が全く適切であることから、「让／被」構文のNP¹はV²から動作者という意味役割を与えられていない、すなわち、NP¹はVP²の主語ではないと解釈すべきである。では、(6-17)のNP¹はどのように意味役割を与えられているのかが問題となるが、筆者は、NP¹は基本的に「让／被」から直接に意味役割を与えられ、VP²との意味的な関係は間接的ないし語用論的なものであると考えたい。

6-1-1-2. 入れ替え現象(1)

中国語の口語には、基本語順に基づいて並べられている要素を、談話の中で旧情報を表すのか新情報を表すのかによって、入れ替えられる現象が見られる(陸1980参照)。一般に、新情報を表す要素は前に、旧情報を表す要素は後ろにおかれると考えられる。というのは、(6-18a)のように、前項要素が疑問詞によって置き換えられるが、(6-18b)のように、後項要素が疑問詞に置き換えられないからである。

(6-18) a. 在 哪儿 学 语言学, 你?
いる どこ あなた

どこで言語学を学ぶのか、あなたは。

b. *在 那儿 学 语言学, 谁?

そこで言語学を学ぶのか、だれが。

ただ、(6-18a)のような文において、新情報を表す要素が前置されたのか、それとも、旧情報を表す要素が後置されたのかが問題であるが、それについては6-1-3節で詳しく考える。ここでは、(6-19b)に代表される、入れ替えられた文において、NP⁰がVP²の主語として理解されなければならないという意味的な制限があることを論じ、「被／让」構文との関わりを考える。

(6-19) a. 张三 去商店 买东西吗?
買う もの 文末助詞

張三は店に行って買い物するのか。

b. 张三 买东西吗, 去商店?

張三は買い物するのか、店に行って。

(6-20) a. 张三 请李四 去北京吗?
行く

張三は李四に北京に行ってもらうのか。

b. *张三 去北京吗, 请李四?

張三は北京に行ってもらうのか、李四に。

(6-19b)では、「张三」が「买东西吗」の主語として理解されうるので、入れ替えは可能である。一方、(6-20b)では、「张三」が「去北京吗」の主語ではないので、うえの意味的制限は満たされず、入れ替えは不可能である。次の(6-21b)が文法的であるのは、「去北京吗」の主語ではない「张三」が表示されておらず、意味的条件が働かないからである。

(6-21) a. 请李四 去北京吗?

李四に北京に行ってもらうのか。

b. 去北京吗, 请李四?

北京に行ってもらうのか、李四に。

さて、「让」構文と「被」構文のVP²の主語について考えてみよう。もし問題の構文でVP²の主語がNP¹であり、NP⁰ではありえない、言い換えれば、NP¹の意味役割はV²から直接

付与されれば、入れ替えは許されないはずである。確かに、大抵の「让」構文と「被」構文では、VP²の主語はNP⁰であると理解されないで、(6-22b)や(6-23b)のような入れ替えは不適格である。

- (6-22) a. $\begin{array}{ccc} \text{NP}^0 & \text{NP}^1 & \text{VP}^2 \\ \text{张三} & \text{被李四} & \text{骂了。} \\ & & \text{罵る} \end{array}$
 張三は李四に罵られた。
 b. *张三骂了、被李四。
 張三は罵られた、李四に。

- (6-23) a. 张三 让李四 去北京。
 張三は李四に北京へ行かせる。
 b. *张三去北京、让李四。
 張三は北京へ行かせる、李四に。

ところが、中国語の結果合成動詞は中間動詞のような特徴を持っている。すなわち、それらは(6-24)に示すように、2項動詞の用法も1項動詞の用法もあり、1項動詞の場合動作者が含意される。

- (6-24) a. 他 弄坏了 钢笔。
 $\begin{array}{ccc} \text{かれ} & \text{壊れる} & \text{万年筆} \end{array}$
 かれは万年筆を壊した。
 b. 钢笔 弄坏了。
 万年筆は壊された。

このような中間動詞が「让」構文と「被」構文のVP²の位置に来る場合、(6-25)に示すように、入れ替えられた文は成立する。

- (6-25) a. 钢笔 被/让他 弄坏了。
 万年筆は彼に壊された。

- b. 钢笔弄坏了、被/让他。
 万年筆は壊された、彼に。

(6-25a)の「钢笔」が「被/让他」と「弄坏」の共通の主語として理解されうるので、(6-25b)の入れ替えが可能なのである。

以上、意味的選択関係と入れ替え現象から分かるように、「让/被」構文のNP¹の意味役割はV²から直接付与されるのではなく、V¹から付与されていると見たほうが妥当であることがわかる。これはNP¹がV¹の補部であることを示す。NP¹がV¹の補部であることはまた、形式的にも根拠が見られる。この点について次の節を見てみよう。

6-1-2. 形式的特徴

この節では、NP¹とV¹の形式的な特徴を観察し、NP¹は形式上V¹の補部としての特徴を呈することを論じる。

6-1-2-1. ポーズの挿入

朱(1982)では、動詞とその補部の間にはポーズが入らないが、動詞とその補文の主語との間にはポーズが入ることが観察されている。

- (6-26) a. *张三打了 ^ 李四两次。
 $\begin{array}{c} \text{量詞} \\ \text{張三} \end{array}$
 張三は李四を2回殴った。
 b. 张三说 ^ 李四洗了澡。
 $\begin{array}{c} \text{量詞} \\ \text{張三} \end{array}$
 張三は李四がお風呂に入ったと言う。

(6-26a)では、「李四」が「打了」の補部であるので、その間にはポーズが入らず、(6-26b)では、「李四」が「说」の補部ではないので、その間にポーズが入る。朱(1982)が、(6-15)の構造を支持するものとして利用しているように、このテストを「让」構文や「被」構文に対して行くと、「让/被」とNP¹の間にはポーズが入らない。

- (6-27) a. 张三让李四[^]去了北京。
張三は李四を北京に行かせた。
b. *张三让[^]李四去了北京。

- (6-28) a. 张三被李四[^]打死了。
張三は李四に殴り殺された。
b. *张三被[^]李四打死了。

この結果から「让」構文や「被」構文のNP¹が(6-26b)の「说」構文と違い、形式上、V¹の補部の振る舞いをしていることが分かる。

6-1-2-2. 「有」の分布

中国語では、不定の主語名詞句を持つ文は不自然であるが、補部名詞句にはそのような制限がないことはよく知られている。

- (6-29) a. ?一个人 打了 张三。
誰かが張三を殴った。
b. 张三 打了 一个 人。
張三は誰かを殴った。

(6-29a)のような「不定名詞句主語」を持つ不自然な文を救う手段として、「有」構文がある。しかし、「有」は補部に対しては使用できない。

- (6-30) a. 有 一个人 打了 张三。
誰かが張三を殴った。
b. *张三 打了 有 一个 人。
張三が誰かを殴った。

「有」が不定主語をマークできるのに対し、不定補部はマークできない理由について、

Huang (1988a)、沈 (1994a) は、「有」構文では「有」が主要部であるからだと説明している⁷⁾。ここでは特に、主語と補部における「有」の分布の非対称性に注目したい。というのは、「有」の分布の非対称性を利用して、動詞間に挟まれている名詞句が後続する動詞の主語なのか先行する動詞の補部なのかを調べることができるからである。

- (6-31) a. 张三 说 李四 来。
張三は李四が来ると言った。
b. 张三 通知了 李四 来。
張三は李四に来るように伝えた。

各々の動詞の意味から(6-31a)の「说」は2項動詞で、(6-31b)の「通知」は3項動詞であると考え、「说」に後続する「李四」は「说」の補部ではなく、「来」の主語であるが、「通知」に後続する「李四」は「通知」の補部であり、「来」の主語ではないことになる。このことは不定を示す「有」の分布の非対称性によって証明される。

⁷⁾ 沈 (1994a) で、不定を示す「有」構文は(i)の構造を持つことを提案し、Huang (1988a) では(ii)の構造を提案している。両方の共通点は「有」が主要部であるということである。

(i) [s ϕ [v_{PI} VP¹ VP²]]

(ii) [s ϕ [v_P V S]]

(i)では、「有」はVP¹の主要部であり、VP¹はまた動詞連続の主要部でもある。(ii)では、「有」はSを補部とする述部の主要部である。「有」が主要部だと思われる理由は次の通りである。まず、中国語の反復疑問文では、述部の反復は許されるが、主語の反復は許されない。「有」構文の反復疑問文を見てみると、「有」は反復されるが、「打张三」は反復されない。これは「有」構文では「有(一个人)」が主要部であり、「打张三」はそうではないことを意味する。

- (iii) a. 有没有一个人 打张三?
張三を殴った人がいるかどうか?
b. *有一个人 打张三没打张三?
誰かが張三を殴ったかどうか?

(6-32) a. 张三 说 有 一个 学生 来。

張三は1人の学生が来ると言う。

b. *张三 通知了 有 一个 学生 来。

張三は1人の学生に来るように伝えた。

(6-32a)では、「说」に後続する名詞句は「来」の主語なので、「有」でマークされうるが、(6-32b)では、「通知」に後続する名詞句は「来」の主語ではないので、「有」でマークされえない。

さて、問題の使役文と受動文について、「让／被」に後続するNP'はVP²の主語ではなく、V'の補部であることから、「通知」構文と同じように、「有」句の後続が許されないことが予想される。

(6-33) a. 张三 让 一个人 去了 北京。

張三是谁かを北京に行かせた。

b. 张三 被 一个人 打了 一顿。

量詞

張三是谁かに1回殴られた。

(6-34) a. *张三 让 有 一个人 去了 北京。

b. *张三 被 有 一个人 打了 一顿。

結果は、予想通りに「有」句を含む(6-34a)と(6-34b)は非文法的である。

以上、ポーズの挿入以外に、「有」の分布の非対称性から、NP'は形式的に「让／被」

の補部の振る舞いをする事がわかる¹⁸。しかし、たとえNP'がV'の補部であっても、NP'とV'が構造体(construction)をなすかどうか、すなわち、「被」構文と「让」構文のNP'とV'が、(6-14b)のように1つの構成素ではないのか、それとも、(6-15)のように1つの構成素であるのかが明らかになっていない。次の6-1-3節では、この問題について更なる現象を示しながら議論する。

6-1-3. 入れ替え現象(2)

この節では、中国語の順序入れ替え現象を再び取り上げるが、これについては2つの疑問点がある。1つは順序の入れ替えは移動的な現象なのか、単に要素のつけたしなのかということである。陸(1980)が記述しているように、入れ替えられた文はそのまま元にもどせるようなものでなければならない。

(6-35) a. 吃饺子了吗, 张三?

餃子

餃子を食べたか、張三は。

b. *他吃饺子了吗, 张三?

¹⁸ たとえば、変形生成文法流の考えでは、「让／被」構文のNP'と「说」構文のNP'は、同じようにVP²の主語であるが、抽象格付与の点において差があると仮定し、ポーズの挿入はまさに格付与の差の現れであると説明されるかもしれない。具体的には、「说」構文のNP'はV²から意味役割も格も与えられているのに対し、「让／被」構文のNP'はV²から意味役割を与えられているが、何らかの理由で格を与えられず、「让／被」から格を付与されると想定する。このように考えれば、抽象格の関係がある「让／被」とNP'の間にはポーズが挿入できず、また、「有」でマークされえないのも格付与との関わりで説明されるであろう。そして、そのような関係が仮定されない「说」とNP'の間にはポーズも「有」も許されると考えるであろう。しかし、中国語において、抽象格を仮定する理由もメリットもなく、さらに、6-1-1節で観察したように、「让／被」とNP'の関係は格付与の関係だけではすまされず、NP'が「让／被」から意味役割を与えられていることがわかり、上の想定は妥当であるとは思われない。

したがって、(6-35a)のように、復元できる文は文法的であるが、(6-35b)のように、余分な要素「他」があるために、そのままでは復元できない文は非文法的である。この記述から入れ替え現象は移動的現象であることが察せられる。

もう1つの疑問点は、入れ替えは後項要素の前置なのか、それとも、前項要素の後置なのかということである。陸(1980)では、通常、文末に現れるモダリティ要素は必ず先行要素に付かなければならないと記述されている。

(6-36) a. 他去北京吗, 明天?
 明

かれは北京に行くのか、明日は。

b. *他去北京, 明天吗?

(6-36)の事実からは、順序の入れ替え現象は前項要素の後置と考えるのが自然であろう⁹。どのような要素が後置でき、どのような要素が後置できないのかに関しては、後置できる要素は文、または、述部の直接構成素でなければならぬと考えられる。

(6-37) 我的梨子 酸不酸?
 酸っぱい

僕の梨は酸っぱいのか。

a. 酸不酸, 我的梨子?

酸っぱいのか、僕の梨は。

b. *梨子酸不酸, 我的?

梨は酸っぱいのか、僕の。

(6-38) 张三知道 明天有雨吗?

張三は、明日雨が降ることを知っているのか。

a. 张三知道吗, 明天有雨?

⁹ (6-36)の例だけ見れば、後項要素の前置とも考えられないことはないが、そのつぎの(6-38)の例を考慮すれば、やはり前項要素の後置と考えたほうが自然である。

張三が知っているのか、明日雨が降ることを。

b. *张三知道明天吗, 有雨?

張三が明日知っているのか、雨が降ることを。

(6-39) 你 给他 写信了吗?
 に 書く手紙

あなたは彼に手紙を書いたのか。

a. 你写信了吗, 给他?

あなたは手紙を書いたのか、彼に。

b. *你给写信了吗, 他?

あなたは手紙を書いてあげたのか、彼。

(6-37a)では、主語「我的梨子」は文の直接構成素で、後置できるが、(6-37b)では、主語の一部「我的」は後置できない。(6-38a)では、補文の「明天有雨」は後置できるが、(6-38b)のように、述部の直接構成素ではない「有雨」は後置できない。(6-39)も同様である。

もし以上の記述が妥当であれば、入れ替え現象を利用して、「让/被」構文のNP'がV'と構成素をなしているかどうかを検証できる。もし両者が述部の直接構成素であれば、後置できるが、両者が構成素をなさないか、構成素をなしても述部の直接構成素でなければ、後置できないはずである。

(6-40) 让 他 快 回 去。
 早く 帰る 行く

彼に早く帰ってもらえ。

a. 快回去, 让他

早く帰ってもらえ、彼に。

b. *他快回去, 让。

かれは早く帰れ、させて。

(6-41) 被 他 打昏了。
 気絶する

彼に殴られて気絶した。

a. 打昏了, 被他。

張三は殴られて気絶した、彼に。

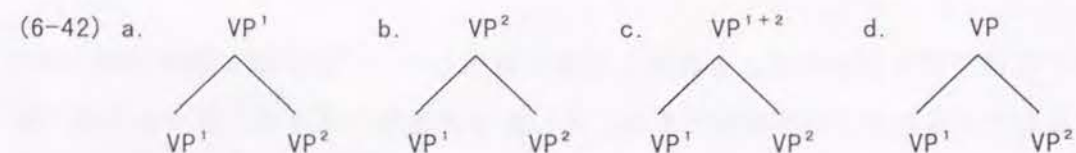
b. *他打昏了, 被。

彼が殴られて気絶した、被る。

上の例の文法性から、「被他」と「让他」がそれぞれ構造体であり、述部の直接構成素をなし、「他」とVP²が構造体ではないことがわかる。したがって、(6-14a)の構造も(6-14b)の構造も否定されることになる。

6-2. VP¹とVP²の関係

以上の諸現象から、NP¹がV¹の補部であり、2要素が構造体をなしていることが観察された。次に、上位の構成素であるVP¹とVP²のうち、どちらが主要部かという議論に移ろう。主要部性については、次の4つの可能性が考えられる。



(6-42a)ではVP¹が上位のVPの主要部であり、(6-42b)ではVP²が主要部である。そして、(6-42c)ではVP¹とVP²の両方がVPの主要部であり、(6-42d)ではVP¹とVP²のどちらも主要部ではない。従来の研究では、「被」構文では、(6-42b)のようにVP²が主要部で、「让」構文では、(6-42c)のように両主要部か、(6-42d)のように主要部がないと分析されている^{*10}。この章では、「被」構文でも「让」構文でも(6-42a)のようにVP¹が主要部であることを議論する。

^{*10} 従来の研究について、Chao(1968)、丁他(1979)、朱(1982)などを参照されたい。

6-2-1. 機能語と主要部

この節では、機能語は述部の主要部にはならないという従来の主要部の基準は動詞句連続においては妥当ではないことを示し、主要部を決めるのはあくまで、第3章の3-2-2節で提案したように、2つの要素のうち、どちらの意味素性が上位の範疇に継承されているのかを見るという基準であると考えられる。

中国語の動詞句連続の中ではV¹の動詞が語彙的意味を失い、機能語としての役割を果たすことが多い。そして、機能語化した動詞には多くの場合、アスペクトマーカが後続できない。

(6-43) a.

NP ⁰	V ¹	NP ¹	V ²	NP ²
张三	对	李四	说	风凉话。
	対して		言う	嫌み

張三は李四に対して嫌みを言う。

b. *张三 对着 李四 说 风凉话。

(6-44) a.

张三	跟	李四	爬	泰山。
			登る	

A. →張三は李四について泰山をのぼる。

B. →張三は李四と泰山をのぼる。

b. 张三 跟着 李四 爬 泰山。

A. →張三は李四について泰山をのぼる。

B. *→張三は李四と泰山をのぼる。

(6-43b)のV¹「对」に状態を示すアスペクトマーカ「着」が後続できないのは、「对」が機能語であるからである。(6-44a)のV¹「跟」には2つの意味がある。1つは「つく」という(機能化していない)意味であるが、もう1つは「と」という(機能化した)意味である。そして、(6-44b)の訳で示したように、前者の意味を持つ「跟」にはアスペクトマーカは後続できるが、後者の意味を持つ「跟」には後続できない。このことは(6-45)の例でも確認できる。

(6-45) a.

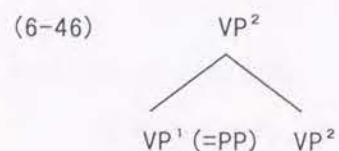
张三	跟	李四	打	招呼。
			挨拶	

張三は李四に挨拶をする。

b. *张三 跟着 李四 打 招呼。

(6-45a)の「跟」は後者の意味しか持たないので、(6-45b)のように、アスペクトマーカ―は後続できない。

従来の研究では、機能語化した動詞は動詞の性質を失って、文の主要部にはならないと主張され、(6-44a)と(6-45a)は(6-46)のような構造であると提案されている(Chao1968、朱1982、丁他1979を参照)。



述部の主要部を決める基準を当該要素が機能語化しているか否かにすれば、(6-47)の「让」構文と(6-48)の「被」構文はいずれも(6-46)の構造になり、VP²が主要部であるということになる。なぜなら、「让/被」はアスペクトマーカ―が後続しないからである。

(6-47) a. 张三 让李四 去了北京。
張三は李四を北京に行かせた。

b. *张三 让了李四 去北京。

(6-48) a. 张三 被李四 撞倒了。
ぶつかる
張三は李四にぶつかられた。

b. *张三 被了李四 撞倒。

しかし、動詞が機能語化したかどうかで文の主要部を判断することには数多くの問題が

ある¹¹⁾。まず、機能語であるかどうかは主要部性に関わらないことが挙げられる。

第1に、機能語でありながら文の主要部であるものが存在する。いわゆる助動詞は語彙的な意味が薄れ、アスペクトマーカ―の後続が許されないという意味で、機能語にあたる。

(6-49) a. 我 要(了) 钱。
もらう
わたしはお金をもらう(った)。
b. 我 要(*了) 去 北京。
わたし是北京に行きたい(かった)。

(6-49a)の本動詞の「要」とは異なり、(6-49b)の助動詞の「要」はアスペクトマーカ―の後続を許さない。しかし、否定辞「不」は、(6-49a)でも(6-49b)でも「要」にしか先行できないという事実がある。その意味で、助動詞の「要」は本動詞の「要」と同じように、当該文の主要部であると言える。

第2に、機能語でない動詞句も非主要部になる場合がある。もしアスペクトマーカ―が後続できるか否かを機能語の判断基準にすれば、(6-50)では「冲」に「着」が後続していることから、その2つの動詞が機能語ではないことになる。

(6-50) 他 冲着 他们 摆了摆 手。
向かう 振る
彼は彼らに向かって手を振った。

ところが、この動詞句は非主要部である。これはVP¹が主要部である場合は主題化できな

¹¹⁾ 第3章と第4章、第5章では、動詞連続の場合、項構造とアスペクト性が継承されるかどうかを主要部を判断する基準であると主張したうえで、アスペクトマーカ―(機能語)がV²である場合、V²が項構造に関して無指定であるため、項構造の継承の観点から、V¹とV²の間に主要部と非主要部の関係が成立しないと述べた。この場合の「让/被」は機能語ではあるが、アスペクトマーカ―と違って項構造を持っているので、項構造の継承の観点から「让/被」を含む述部の主要部性を考察することができる。

に出来るのを見なければならない。本論文では、V'の項が「让」構文や「被」構文の主語となることを主張するが、VP²を主要部とする従来の研究では、当該構文の主語はV²の項であることを示唆する。次の例を見てみよう。

(6-56) a. 张三 让李四 学习日语。

張三は李四に日本語を勉強させた。

b. 小偷 被李四 抓住了手腕。

スリ つかむ

すりは李四に手首を捕まれた。

(6-56a)の「张三」と(6-56b)の「小偷」はそれぞれV²の項ではなく、V'「让/被」の項としか考えられない。すなわち、V'の項構造が継承されている。

6-2-3. アスペクト性の継承

この節では、「让」構文や「被」構文では、V²ではなく、V'のアスペクト性が文全体の意味的性格を決めることを示す。

6-2-3-1. 「让/被」のアスペクト性

第4章では、中国語の動詞が、(6-57)のように、[±active]と[±stative]によって3つの種類に分けることができることを述べた。

(6-57) a. 活動動詞→骂(罵る)、踩(踏む)、撞(ぶつかる)

b. 状態動詞→懂(分かる)、喜欢(好き)、高兴(うれしい)

c. 変化動詞→醒(目が醒める)、流(流れる)、踢(崩れる)

そして、それらの分類基準は、問題の動詞が意志を示す副詞や状態を示す副詞と共起できるかどうかということである。たとえば、変化動詞は、(6-58)のように、意志を示す「故意」とも共起しなければ、程度を表す「很(とても)」とも共起しない。そして、活動動詞は、(6-59)のように、「故意」と共起するが、「很」と共起しない。状態動詞は、(6-60)のように、「故意」と共起しないが、(6-60b)のように「很」と共起する。

(6-58) a. *张三 故意 醒了。

b. *张三 很 醒。

(6-59) a. 我们 故意 骂了 李四。

私たちはわざと李四を罵った。

b. *我们 很 骂 李四。

(6-60) a. *我们 故意 懂 英语。

わかる

b. 我们 很 懂 英语。

私たちは英語がよくわかる。

同じ方法で「让」構文と「被」構文を考えてみよう。まず、(6-61a)と(6-61b)の対立から「很」が直後の動詞を修飾しなければならないことがわかる。

(6-61) a. 我 很 喜欢 唱歌。

好き

私は歌を歌うのがとても好きだ。

b. *我 喜欢 很 唱歌。

そして、(6-62)と(6-63)で示されているように、「让」も「被」も「很」と共起できない。これは「让」と「被」が状態動詞の素性を持っていないことを意味する。

(6-62) a. 我 让 李四 踩了 一脚。

踏む 量詞

私は李四に(足を)踏まれた。

b. *我 很 让 李四 踩了 一脚。

(6-63) a. 我 被 李四 打了 一顿。

私は李四に殴られた。

- b. *我 很 被 李四 打 了 一 顿。

次に、「被」は「故意」と共起しないことから、変化動詞の素性を持っていると考えられる。

- (6-64) a. 张三 被 李四 撞 了 一 下。
量詞

張三は李四にぶつかられた。

- b. *张三 故意 被 李四 撞 了 一 下。

「让」のほうは「故意」と共起する場合と共起しない場合がある。

- (6-65) a. 这孩子 让 李四 踩 了 一 脚。

この子は李四に(足を)踏ませた。

- b. 这孩子 故意 让 李四 踩 了 一 脚。

この子はわざと李四に(足を)踏ませた。

- (6-66) a. 这孩子 让 李四 逼 死 了。

この子は李四にいじめられて死んだ。

- b. *这孩子 故意 让 李四 逼 死 了。

アスペクト性の継承という観点から主要部の動詞句を考察するために、便宜上、「让」を活動動詞と変化動詞の2種類の動詞として想定する。(6-65a)と(6-65b)、そして、(6-66a)の日本語訳からわかるように、変化動詞である「让」(以下让_Pと呼ぶ)は受身の意味を持ち、活動動詞である「让」(以下让_Cと呼ぶ)は使役の意味を持つ。したがって、ここで意味的な特徴に基づいて「让/被」を(6-67)のように記述しておこう。

- (6-67) a. 変化動詞→「让_P」と「被」(受身)

- b. 活動動詞→「让_C」 (使役)

6-2-3-2. 「让/被」のアスペクト性の継承

変化動詞は活動動詞と実現相においても違いが見られる。たとえば、変化動詞「流」の表すイベントは(6-68a)と(6-68b)の対立からわかるように、「実現相」でなければならない。

- (6-68) a. *张三 流 眼泪。
なみだ

張三は涙が流れる。

- b. 张三 流 了 眼泪。

張三は涙が流れた。

これに対し、活動動詞「骂」構文の表すイベントは(6-69)のように、実現相のいかんにかかわらず適格である。

- (6-69) a. 张三 骂 李四。

張三は李四を罵る。

- b. 张三 骂 了 李四。

張三は李四を罵った。

ここで、(6-69a)から「让/被」構文に対して次のような予測が可能である。「让_P、被」構文でVP¹が主要部であるならば、たとえV²が活動動詞であっても、当該構文の表すイベントは実現相でなければならない。一方、もしVP²が主要部であるならば、V²が活動動詞である場合、当該構文の表すイベントは実現してもしなくてもよいということになる。

- (6-70) a. *面包 让 张三 吃 掉。
ハ^ン てしまう

パンは張三に食べられる。

- b. *面包 不 让 张三 吃 掉。

パンは張三に食べられない。

- c. *面包 让 不 让 张三 吃 掉?

パンは張三に食べられるかどうか。

- d. *面包 让 张三 吃掉吗？

パンは張三に食べられるのか。

- (6-71) a. *张三 被 李四 骂。

張三は李四に罵られる。

- b. *张三 不被 李四 骂。

張三は李四に罵られない。

- c. *张三 被不被 李四 骂？

張三は李四に罵られるかどうか。

- d. *张三 被 李四 骂吗？。

張三は李四に罵られるのか。

- (6-72) a. 面包 让 张三 吃掉了。

パンは張三に食べられた。

- b. 面包 没让 张三 吃掉。

パンは張三に食べられていない。

- c. 面包 让没让 张三 吃掉？

パンは張三に食べられたかどうか。

- d. 面包 让 张三 吃掉了吗？

パンは張三に食べられたのか。

- (6-73) a. 张三 被 李四 骂了。

張三は李四に罵られた。

- b. 张三 没被 李四 骂。

張三は李四に罵られていない。

- c. 张三 被没被 李四 骂？

張三は李四に罵られたかどうか。

- d. 张三 被 李四 骂了吗？。

張三は李四に罵られたのか。

上の例でVP²に現れる「吃掉」と「骂」は活動動詞であり、また、(6-70)と(6-71)の文は実現していないイベントを表し、(6-72)と(6-73)の文は実現したイベントを表している。(6-70)(6-71)の不適合性と(6-72)(6-73)の適合性は予想通りVP¹が主要部であることを示している。

更に、「让c」の構文でVP¹が主要部であれば、V²が変化動詞「流」である場合、当該構文の表すイベントが実現してもしなくてもよいが、もしVP²が主要部であれば、当該構文の表すイベントが実現しなければならない。

- (6-74) a. 导演 让 张三 流 眼泪。

映画監督

映画監督は張三に涙を流させる。

- b. 导演 不让 张三 流 眼泪。

映画監督は張三に涙を流させない。

- c. 导演 让不让 张三 流 眼泪？

映画監督は張三に涙を流させるかどうか。

- d. 导演 让 张三 流 眼泪吗？

映画監督は張三に涙を流させるのか。

- (6-75) a. 导演 让 张三 流了 眼泪。

映画監督は張三に涙を流させた。

- b. 导演 没让 张三 流 眼泪。

映画監督は張三に涙を流させていない。

- c. 导演 让没让 张三 流 眼泪？

映画監督は張三に涙を流させたかどうか。

- d. 导演 让 张三 流 眼泪了吗？

映画監督は張三に涙を流させたのか。

(6-74)は実現していないイベントを表し、(6-75)は実現したイベントを表す。(6-74)も(6-75)も適合であることからやはりVP¹が主要部であることがわかる。

以上、V'の項構造が上位の動詞句に継承されるだけでなく、V'のアスペクト性も上位の動詞句に継承されていることを見てきた。この2つの事実は、「让」構文と「被」構文ではVP'が主要部であることを意味する。

6-2-4. 反例の検証

「让」構文と「被」構文には一見VP'が非主要部であると考えたほうがよさそうな用例がある。中国語では、動詞「给」が授受文だけではなく、(6-76)のような受動文や(6-77)のような処置文を作ることができる¹⁴。

- (6-76) a. 面包 给 吃光了。
受動 尽きる
 パンは全部食べられた。
 b. 房子 给 冲走了。
 家は流されてしまった。

- (6-77) a. 张三 给 面包 吃光了。
処置
 張三はパンを全部食べてしまった。

¹⁴ この「処置文」は「把、将」構文を指す(王1943-1944参照)。「把、将」はその補部を処置することを示し、「把、将」句に後続する動詞句はその補部の処置の結果を示す構文である。また、「给」の受動の用法は処置の用法より優先されている。これは語用論的な問題である。例えば、

- (i) 张三 给李四 轰走了。
 A. 張三は李四を追いつ出した。
 B. 張三は李四に追いつ出された。

- (ii) 张三 给野猫 轰走了。
 A. 張三は野良猫を追いつ出した。
 B. *張三は野良猫に追いつ出された。

(i)では、Aの読みとBの読みが両方可能であるが、Bの読みが優先される。しかし、(ii)のように、Bの読みが現実には存在しにくい場合、Aの読みしかとれない。

- b. 大水 给 房子 冲走了。
 洪水は家を流してしまった。

興味深いのは、「被/让」と「给」が共起している以下の文である。

- (6-78) a. 面包 被 张三 给 吃光了。
 パンは張三に全部食べられてしまった。
 b. 房子 让 大水 给 冲走了。
 家は洪水で流されてしまった。

もし(6-78)の「给」が(6-76)の「给」と同じように受動を表すならば、「被张三」と「让大水」を主要部と見るのに無理が生じる。というのは、受動マーカー「给」が生起するのはなぜかが説明できないからである。しかし、(6-78)の「给」は受身の意味を表すのではなく、(6-77)の「给」と同じ処置の意味を表す。すなわち、(6-78)は(6-79)から「派生」したものであると思われる。

- (6-79) a. 面包 被 张三 给 ~~面包~~ 吃光了。
受動 処置
 同(6-78a)
 b. 房子 让 大水 给 ~~房子~~ 冲走了。
受動 処置
 同(6-78b)

この見方をする理由として受身を表す「给」は変化動詞の素性を持つが、処置を表す「给」は活動動詞の素性を持っていることがあげられる。

- (6-80) a. *孩子 故意 给 送进了 孤儿院。
送る込む
 子供はわざと孤児院に入れられた。
 b. *房子 故意 给 拆了。
崩す

家はわざと崩された。

(6-81) a. 张三 故意 给 孩子 送进了 孤儿院。

張三はわざと子どもを孤児院に入れた。

b. 张三 故意 给 房子 拆了。

張三はわざと家を崩した。

(6-82) から分かるように、「被」と共起する「给」は、「故意」とともに用いられることから活動動詞の特徴を持つ。

(6-82) a. 孩子 被 张三 故意 给 送进了 孤儿院。

子供は張三にわざと孤児院に入れられた。

b. 房子 被 张三 故意 给 拆了。

家は張三にわざと崩された。

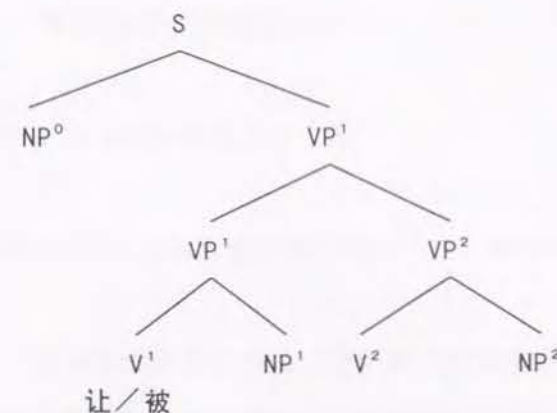
したがって、「被／让」と共起する「给」は受身を表すものではなく、処置を表すようなものである。(6-78)のような構文でも、「被」句と「让」句が両構文の主要部であり、反例にはならないと考えられる。

以上、4つの節に分けて、「让」構文と「被」構文ではどのVPが主要部であるのかについて議論してきたが、いずれもVP¹が主要部であるという結論に至る。

6-3. 2つの「被」構文

本論文では、中国語の「让」構文と「被」構文について両構文は同じ構造であり、且つその統語構造は(6-83)であるということを主張した。

(6-83)



朱(1982)では、中国語の動詞句連続は動詞句と動詞句の連続だと述べているだけで、主要部性についてふれていないが、本論文では、項構造とアスペクトの継承という観点からいままでもあまり考慮されてこなかったVP¹が主要部である動詞句連続の存在を、「被／让」構文に基づいて論じた。

この節では、動詞句連続の構造には動詞連続にも対応するものがあることを示したい^{*15}。たとえば、「被」構文に関して(6-84)で示されるように、NP¹が現れてはならない現象が見られる。そして、NP¹が現れえない「被」構文では必ずNP²も現れえない。

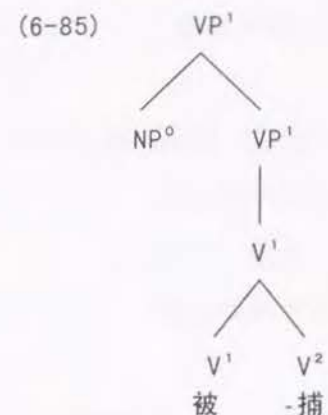
- (6-84) a.

NP⁰		NP¹		NP²
张三	被	φ	捕了	φ。

 張三が捕えられた。
- b. *张三 被 警察 捕了 φ。
 張三が警察官に捕えられた。
- c. *张三 被 φ 捕了 手腕。
 張三が警察官に手首を捕えられた。

この現象は「被」構文には(6-83)と対応するような(6-85)の述部構造があることを示唆する。

^{*15} 詳しくは沈(1994b)を参照されたい。



(6-83)と(6-85)は同じ基本構造規則で作られているが、(6-83)は統語レベルで作られた動詞句連続であり、(6-85)は語彙レベルで形成された動詞連続である。このようなレベルの相違を考えるために、まず次の例を見られたい。

- (6-86) a. 商店 关 门了。
閉める トア
 商店が休業した。
- b. 商店 关 窗户了。
まど
 商店は窓を閉めた。

意味的構成性(Semantic compositionality)が見られるかどうかの角度から見れば、それは(6-86a)の「关门(休業)」には見られないが、(6-86b)の「关窗户(窓を閉める)」には見られる。したがって、「关门」は「关窗户」より合成語に近い可能性が大きい。さらに、つぎの(6-87)に示すように、「关门」は名詞への変換が起こりうるが、「关窗户」は名詞への変換が起こりえない。

- (6-87) a. 商店 的 关门
 商店の休業
- b. *商店 的 关窗户

商店の窓を閉めること

この現象から(6-88)が観察されうる¹⁶。

(6-88) 語のレベルでは品詞変換が起こるが、句のレベルでは品詞変換が起こらない。

すると、(6-85)の構造をもつ「被」構文の述部は合成名詞に転換する可能性はあるが、(6-83)の構造を持つ「被」構文の述部が合成名詞に転換する可能性はないと考えられる。つぎの(6-89'a)(6-90'a)(6-91'a)に見られるように、述部からの名詞への変換が可能であることは、(6-89a)(6-90a)(6-91a)の述部が動詞連続の構造(6-85)であることを示している。反対に、(6-89'b)(6-90'b)(6-91'b)において、述部が名詞へ変換できないことは、(6-89b)(6-90b)(6-91b)の述部が動詞句連続の構造(6-83)を持つことを示す。

- (6-89) a. 张三 被 ϕ 砸了 ϕ 。
NP° NP¹ NP²
 张三が押しつぶされた。
- b. 张三 被 石头 砸了 右脚。
 张三が石に右足を押しつぶされた。

- (6-89') a. 张三 的 被砸
 张三のおしつぶれ(たこと)
- b. *张三 的 被 石头 砸 右脚
 张三の石に右足をおしつぶされたこと

- (6-90) a. 研究室 被 ϕ 盗了 ϕ 。
 研究室は盗難に遭う(た)。
- b. 研究室 被 賊 盗了 ϕ 。
 研究室は泥棒に盗まれる(た)。

¹⁶ このような記述は陸他(1964:82-93)にも見られる。

(6-90') a. 研究室的 被盜

研究室の窃盜

b. *研究室的 被 賊 盜

研究室の泥棒による窃盜

(6-91) a. 张三 被 ϕ 打了 ϕ 。

張三が殴られた。

b. 张三 被 ϕ 打了 脑袋。

張三が頭を殴られた。

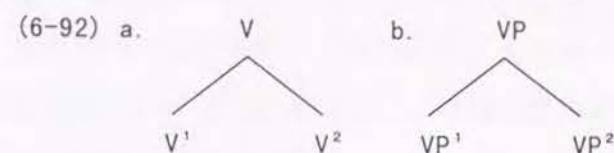
(6-91') a. 张三 的 被打

張三の殴打

b. *张三 的 被 打 脑袋

張三の頭を殴打

以上、「被」構文には2つのレベルの構造があることが言える¹⁷。1つは動詞句連続の構造であり、もう1つは動詞連続である。この結論から中国語の動詞連続構文を次のように考えることができる。同じ語がほかの要素と語彙レベルで合成語を作ることも、統語レベルで句を作ることもできるのと同じように、同じ動詞がほかの動詞と語彙レベルで連続することも統語レベルで連続することもできる。



「被」はまさに、(6-92a)と(6-92b)の2つの派生段階で動詞連続を作ることができる動詞

¹⁷ しかし、「让」構文には語彙レベルの構造が見られない。

であり、その形成法は(3-31)の基本構造規則なのである。

6-4. まとめ

この章では、中国語の使役文と受動文の述部はともに動詞句連続であり、VP¹が主要部であることを論じた。この結論が妥当であれば、中国語の統語レベルの連続にも語彙レベルの連続と平行して主要部頭位の構造が存在すると言える。この結論に至るには2つの重要な論点があった。1つは、NP¹がV¹の補部であるのか、それとも、V²の主語なのかということである。もしNP¹がV¹の補部であれば、両構文の述部は動詞句連続であるが、そうでなければ、補文構造の可能性もある。もう1つの点は両構文の述部には主要部があるかどうかである。

最初の点について、本章では意味と形式の2つの面から考察した。意味の面では、NP¹は、V¹に後続しない場合、V²と選択制限があるが、V¹に後続すれば、V²との選択制限がなくなることがあげられた。また、動詞句連続には、NP⁰が2つの動詞句の主語と理解された場合だけ、2つの動詞句の順序の入れ替えが可能であるという現象があり、両構文にも同じ現象が観察された。このことから、NP¹はV²の主語と理解されないと言える。形式面では、動詞と補部の間にポーズが入らないのと同様に、V¹とNP¹の間にポーズが入らないことと、主語だけマークできる「有」はNP¹をマークできないことがあげられた。以上の諸現象は使役文と受動文の述部は動詞句連続であるとする分析が的を射たものであることを示している。

2番目の点について、項構造の継承とアスペクト性の継承から観察した。もしV¹の項構造やアスペクト性が動詞句連続に継承されていれば主要部だと言える。この章では、V¹の項構造とアスペクト性が実際に継承されていることを観察した。具体的には、項構造の継承に関して、使役文と受動文の主語がV¹の項であることが示された。動詞句連続は、動詞の補部が統語上現れているが、主語が現れていない段階で作られた連続なので、主語がどの動詞句の項なのかを判明することは極めて重要である。さらに、「被/让」の変化動詞または活動動詞としてのアスペクト性も動詞句連続に継承されていることが観察されている。したがって、両構文ではVP¹が主要部であると言える。

最後に、動詞連続と動詞句連続の間に平行性があることは、「被」構文が2つのレベルで派生されうることから言えることを述べた。

終章 結論と展望

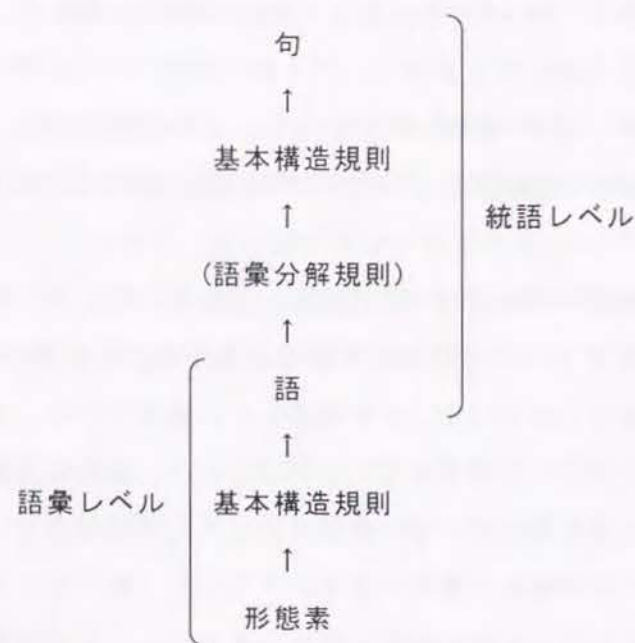
本章では、この研究で得られた結論をまとめあわせて、今後の展望について述べる。まず、序章において、中国語の特徴が(0-4)と(0-6)であることを確認した。ここでもう1度(7-1)に示す。

(7-1) a. 1 形態素 → 1 語

b. すべての語には形態マーカーがない。

また、第1部では、(7-1)の特徴に基づいて、中国語文法の枠組みが(7-2)であることを示した。

(7-2)



すなわち、中国語文法の枠組みには語彙レベルと統語レベルの違いがあることは、世界の多くの言語と共通するところであるが、(7-1)の性質は中国語独自のものとしてあることを観察した。

まず、中国語の統語レベルにおいて「語彙分解規則」が働くことを観察した。その規則は(7-3)である。

(7-3) 語彙分解規則

$$[\text{word } a \ b] \rightarrow [\text{word } a][\text{word } b]$$

語彙分解規則は語彙レベルで形成された合成語を2語にするという再分析の規則である。この規則は、合成語内部の要素を統語上、ほかの形式と組み合わせること、あるいは統語レベルの別の規則が働くようにすることによって引き起こされた規則である。

本論文では、また、語彙レベルの語形成と統語レベルの句形成には同じ基本構造規則が働くことを提案した。その基本構造規則は(7-4)である。

(7-4) 中国語の基本構造規則

- a. 主述関係、修飾関係では主要部末位である。
- b. 動補関係では主要部頭位である。
- c. 並立関係では主要部両位である。

(7-4)の基本構造規則に基づけば、中国語の文法構造に関連する諸現象を捉えることができるを見た。

さらに、第2部では、2つのレベルの動詞連続構文も(7-4)に基づいてそれぞれ主要部末位、主要部頭位、主要部両位の構造を持つことが論じられた。この語構造と句構造の平行性は中国語の(7-1)の特徴によって説明できると考えられる。すなわち、中国語のほとんどの形態素に語の資格があり、かつ語には形態マーカーがないことから、語形成であろうが句形成であろうが、同じ要素の配列というものが根底にあり、(7-4)はその共通要素の組み合わせの規則であると解釈できる。

以上の結論について2つの点を断っておきたい。第1に、本論文で提案された中国語の基本構造規則は基本的な規則であり、決して中国語のすべての現象を捉えられるとは限らないということである。なぜなら、言語の構造は単純なものではないからである。たとえば、句構造には(7-5a)のような、モダリティの要素があり、語構造には(7-5b)のような、

語彙的意味を持たない(または薄い)機能語がある。

- (7-5) a. -了、-吧、-吗
b. -子、-化、-儿

(7-5a)では、モダリティ「了」、文末助詞「吧」、疑問助詞「吗」、(7-5b)では、名詞を形成する「子」、動詞を形成する「化」、小さくてかわいいという意味を示す「儿」などが語彙的意味を持っていないので、それらとそれらに先行する要素の間は、それぞれ主述関係なのか、修飾関係なのか、それとも、動補関係なのかは簡単に決められない。

さらに、一部の歴史的語彙は歴史的な形成規則によって作られているので、現代中国語では痕跡として残っている。たとえば、現代語では修飾部は必ず被修飾部に先行するが、上古漢語では、張(1989)によれば、修飾部が被修飾部に後置された。

- (7-6) a. 饼干 干したペイ →ビスケット
b. 肉松 でんぶ状の肉 →肉でんぶ
c. 世俗 俗の世界 →世俗
d. 月亮 明るい月 →月

- (7-7) a. 人群 1 群れの人 →群衆
b. 马匹 1 匹の馬 →馬類
c. 书本 1 冊の本 →書籍類
d. 事件 1 件の事 →事件

(7-6)では形容詞が名詞に後続し、(7-7)では量詞が名詞に後続している。これは語形成だけにしかない現象である。以上のような周辺な部分を除けば、句形成と語形成では本論文の提案した基本構造規則が確かに決定権を持つ。

第2に、語と句は基本的に同じ規則で形成されるという結論は、主に中国語の述部構造の観察から得られたものであり、中国語全般に言えるかどうかはまだ定かではないが、以下、中国語文法全体の観点から見た場合の、将来的展望について述べておきたい。

中国語には動詞構造の他に、(7-8)のようなものもある。

- (7-8) a. 介詞(前置詞)構造
b. 形容詞構造
c. 副詞構造
d. 名詞構造
e. 「X+モダリティ的要素」の構造
f. 「主題+評言」の構造

これらの種類の構造に関して、(7-8e)(7-8f)を除けば、本論文で得られた結論はおそらく全部当てはまると思われる。まず、中国語の介詞(前置詞)と形容詞は動詞の1種と考えられる。ほとんどの前置詞は本動詞の使い方があると同時に、主要部の意味役割を示す機能を持つ。また、形容詞は状態や性質を示す要素であり、動詞と同じように述部の機能を持ち、ほとんど動詞と区別できない。したがって、(7-8a)と(7-8b)は実は本論文で扱われている内容の一部だと言えるかもしれない。(7-8c)の副詞的なものは様々な範疇の集まりであるが、基本的に名詞的要素や動詞的要素からなっている。少なくとも、本論文の結論は動詞的要素に当てはまる。しかし、本論文の結論は(7-8e)と(7-8f)の組み合わせには当てはまらないであろう。というのは、Xとモダリティの組み合わせや、主題と評言の組み合わせは句や文には見られるが、語にはみられないからである。これは一部の要素自体の意味、または、要素間の意味関係によって引き起こされた現象であり、本論文の基本的な立場、すなわち、語と句は基本的に同じ規則で形成されることの反例にはならない。そこで残る問題は、語形成と句形成が同じ規則で形成されるという観察が(7-8d)のような名詞構造に当てはまるかどうかということである。ここでは、名詞構造にも語形成にしろ句形成にしろ同じ形成規則が働く可能性がある旨を述べておきたい。

たとえば、中国語の名詞構造では、句構造の意味関係も語構造の意味関係も基本的に修飾関係と並立関係である。その2つの意味関係に対応するような構造は主要部末位と主要部兩位である。この点から見れば、中国語の名詞句と合成名詞は本論文の主張どおり、同じ形成法で形成されていると言える。ただ、名詞構造の研究は2つの問題を抱えている。1つは、名詞の構造では、語と句の違いはどのように区別されているのかという問題である。もう1つは、この構造には、次の(7-9a)と(7-9b)に示すように、「的」が介在するものと、「的」が介在しないものがあるが、これは何を意味するのかという問題である。

(7-9) a. 紅 的 毛衣

赤いセーター

b. 紅 毛衣

赤セーター

この2つの問題は非常に難しく、従来の研究において、前者の問題について未だに明白な結論は示されておらず、後者の問題についても、多くは根拠を示さずに、「的」が統語レベルの修飾部のマーカーであるとしているにすぎない。もし「的」が単に統語上の修飾部のマーカーだと見れば、名詞構造は動詞構造と違って、語形成と句形成は同じ形成法で形成されたとは言えないかもしれない。というのは、句形成には「的」の挿入が必要であるが、語形成には「的」の挿入が必要ではないからである。

まず、前者の問題を考えてみよう。もしわれわれが統語論において句が語によって作られ、(7-10)のように、句の主要部が往々にして語であるという枠組みをとれば、名詞構造においても語と句を区別する必要がある。

(7-10) a. [_{NP}XP N]

b. [_{VP}V NP]

問題はこの2つの単位はどのように区別されるかである。現在、有力な方法はまだ見あたらないが、まったく判断できないこともない。判断の根拠の1つは、第2章で取り上げたように、Huang(1983)で提案された、並立構造削除規則という統語的な規則が名詞句には適用できるが、合成名詞には適用できないというものである。

(7-11) a. 火车 和 汽车 都 来。

汽車もバスもみな来る。

b. *火 ϕ 和 汽车 都 来。

(7-12) a. 语言研究 和 历史研究 都 重要。

言語研究と歴史研究はすべて重要である。

b. 语言 ϕ 和 历史研究 都 重要。

Huangの方法は全面的に有効であるわけではないが、どれくらい幅広く適用されうるか、それ以外の方法はあるかどうかなどの問題については今後さらなる研究が待たれる。

次に、第2の問題、「的」が統語上修飾部のマーカー、すなわち、句形成のための要素と言えるかどうかを考えてみよう。(7-13)と(7-14)に示されるように、「的」は名詞句形成に關与する要素だけではなく、名詞形成に關与するような要素でもある。

(7-13) a. 去日本的 和 去美国的

日本に行く人とアメリカに行く人

b. 去日本 ϕ 和 去美国的

同上

(7-14) a. 男的 和 女的

男性と女性

b. *男 ϕ 和 女的

したがって、「的」が統語レベルの修飾部のマーカーと見る必然性はないと言える。筆者は、「的」の機能の1つは動詞を名詞化する形式名詞であり、統語上の修飾部のための要素ではないと考えたい。中国語の名詞構造の修飾部は名詞的要素でなければならない、句であろうが語であろうが、問題の構造はVNまたはANではなく、NNでなければならない。この見方は次のデータから伺える。たとえば、

(7-15) [_{NP}[_{NP}][_N]]

a. 他 父亲

彼のお父さん

b. 三个 教室

3つの教室

c. 这 学生

この学生

(7-16) *_[NP]_[VP]_[N]

- a. *亲爱 父亲
親愛なるお父さん
- b. *上课 教室
授業をする教室
- c. *学语言学 学生
言語学を学ぶ人

(7-15)が文法的で、(7-16)が非文法的であるのは、(7-15)の修飾部「他、三个、这」は名詞的な要素であり、(7-16)の修飾部「亲爱、上课、学语言学」は動詞的な要素だからである。

動詞的要素が名詞の修飾部になるためには、名詞的要素に変わらなければならない。そこに2つの手段がある。1つは、動詞的要素が語である場合、第6章で述べられたように、中国語の動詞は名詞変換が可能なので、(7-17)のように、動詞が名詞に変換して、NN合成名詞になる。もう1つの手段は、動詞的要素が句である場合、(7-18)のように、「的」の後続によって名詞化され、それによってNPN名詞句が可能になる。

(7-17) _[N]_[N]_[N]

- a. 爱人
配偶者
- b. 善人
善人
- c. 老人
老人

(7-18) _[NP]_[NP]_[N]

- a. 亲爱的 父亲
同(7-16a)
- b. 上课的 教室
同(7-16b)

c. 学语言学的 学生

同(7-16c)

したがって、「的」は形式名詞であり、それは「レベル」と関係なく、動詞的要素に後続し、名詞的要素を作る機能を持っている。統語レベルの名詞句形成では、「的」の名詞的機能を利用するだけであると考えられる。ただ、なぜ「[~的]+N」は句でなければならないのかという問題があるが、この問題については、更なる調査が必要である。

このような結論をふまえて、今後のさらなる展望として、語と句が同じ規則で形成されることは中国語の特殊な問題なのか、それとも言語普遍的な性質もあるのかという問題を考えることができる。言語には構造があるということは、恐らく否定できない事実である。たとえば、中国語の「我学习语言学(私は言語学を学ぶ)」という連続には、(7-19)のような3つの「構成素」の段階が考えられる。

(7-19) a. 我、学、习、语、言、学

b. 我、学习、语言学

c. 我、学习语言学、または我学习语言学

ここで、(7-19a)を形態素、(7-19b)を語、(7-19c)を句とそれぞれ呼ぶと、句形成には一般に2つの派生過程が必要である。すなわち、形態素から語を作るプロセス、語から句を作るプロセスである。この2つのプロセスの関係については、次のような2つの理論上の問題が含まれている。

第1の問題は、この2つのプロセスの間に順序があるかどうかである。たとえば、語を作るプロセスは必ず句を作るプロセスの先に起こるかどうかである。この問題については、Siegel(1974)、Allen(1978)は英語を対象として研究し、語形成は必ず句形成の先で起こり、語形成の中でも順序づけが見られると主張している。一方、影山(1993)では、日本語における諸現象を取りあげ、語形成は句形成の先でも後でも起こりうると論じられている。

第2の問題は、この2つのプロセスの間に単位を形成する規則が同じかどうか、また、語形成と句形成は一緒に処理できるかどうかということである。この問題について、Williams(1981a)とSelkirk(1982)では、英語をもとに、語と句は異なる規則で形成されて

いと観察し、言語の普遍的な原理として、語形成と句形成が異なる部門で生成し、一緒に処理できないと主張している。それに対し、Lieber(1992)では、同じ英語や他の言語から、語と句は同じ規則で形成されていると観察し、語形成と句形成は同じ部門で生成し、一緒に処理することができる。この2つの問題は理論上極めて重要な課題であり、これは自然言語の規則がどのように作られるべきかにかかわる問題である。

本論文の立場は、第1の問題において、語形成は句形成より先に起こるという意味で、Siegel(1974)、Allen(1978)と同じであるが、語形成には順序づけがあるという一般化を否定する点で、彼らと異なる。さらに、統語レベルにも語形成が起こるかどうかなという問題はおそらく語に対する定義によって結論が異なると思われる。本論文では、序章で述べたように、語は句を形成する最小の単位であると定義しているので、統語レベルで語形成が起こらないということになる。ただ、影山(1993)で観察された、統語レベルで生じた形態的結合体は形態論から見れば語であるが、統語論の立場でどのように位置づけるべきかは、今後さらに議論すべきところであろう。

第2の問題において、本論文の、中国語に対する観察の結果は、明らかにWilliamsの一般化の反論になり、Lieberの観察の結果と一致する。問題はなぜ語形成と句形成に同じ規則が働くかであるが、この点で本論文の立場はLieberに近いと受け止められるかもしれない。Lieberの立場で見れば、語と句が同じ規則で形成されること自体が普遍的な原理なので、中国語はその1例にすぎないと説明するであろう。Lieberの議論の妥当性を検証するためには、形態論的要素の豊かな言語について検討する必要があるため、本論文では、Lieberの論の妥当性についてはオープンな立場をとる。しかしながら、もし言語によって基本的単位は1種類(形態素または語)と、2種類(形態素と語)の違いがあると考えれば、1種類の要素を基礎的単位とする言語にとっては、それ以上の単位が語であろうが句であろうが、同じ規則、すなわち基礎的単位の組み立て規則によって形成されることは自然な成り行きであろう。本論文では、中国語で語と句が同じ規則で形成されることは、中国語では実質上形態素が基礎的な単位であり、それには形態マーカーがないという性質の現れであると説明する。

本論文では、中国語の本質を反映していると考えられる特徴を体系的に提示しようと試みてきた。もしこの試みが正しいものであるなら、ここで示した中国語固有の文法的特徴は、形態論・統語論の分野で見られる、数々の一般的なアプローチに対して、それらの妥当性を検証するうえで重要な役割を果たすことが期待できるであろう。

謝辞

筆者は、1987年3月に研修員として京都大学文学部に籍を置くようになってから、博士後期課程2年次までの5年間、現在京都大学文学部名誉教授である西田龍雄先生に教わり、さまざまなご教示を賜った。西田先生のもとで言語学の修行を受け、研究に対する厳しい態度や、言語を体系的に捉える方法を学ぶことができた。西田先生のご指導がなければ、筆者はデータの意味するところを追求するおもしろさがわからなかっただろう。ここで深甚なる感謝を捧げたい。

また、大学院文学研究科に在籍中、宮岡伯人先生、庄垣内正弘先生、佐藤昭裕先生、吉田和彦先生にも終始暖かいご指導と励ましを得ることができた。ここに記して感謝の意をしたい。

本論文の執筆にあたっては、調査委員を務めてくださった宮岡伯人先生、庄垣内正弘先生、吉田和彦先生から懇切丁寧なご指導を賜った。特に、主査の吉田先生からは、論文内容だけではなく、論文の構成や書き方について、1年以上にわたりご指導を受けた。筆者のために、いつも惜しまずに時間をさいてくださった先生には、感謝の念に耐えない。また、論文内容のすべての点において、吉田先生と筆者の意見が一致しているわけではないことも言っておかなければならない。誤りの責任がすべて筆者にあるのはいうまでもない。

拙いにせよ、このような形で考えをまとめられたのは、厳しい先生に恵まれたからだけではなく、聡明で暖かい先輩方にも恵まれたからである。修士課程のときに、よく、現在広島大学講師の酒井弘氏に貴重なコメントを頂いていたことは、いまにも記憶に新しい。また、現在大阪外国語大学助手である岸田泰浩氏との勉強会は5年間続き、氏から常に新しいアイデアを聞くことができた。氏が親身になって励ましてくれることがなければ、すでに早い時期に、学位論文を書くこと自体を断念していただろう。さらに、論文執筆中、京都大学助手の高橋慶治氏と現在東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手の澤田英夫氏にも、言葉に言い尽くせないほどのお世話になった。ありがたくお礼を申し上げる次第である。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処. 1989. 『中日大辞典』増訂第二版. 大修館書店.
- Allen, M. 1978. Morphological Investigations. PhD dissertation, University of Connecticut.
- Bloomfield, L. 1933. Language. Holt, Rinehart & Winston.
- Chao, Y.-R. 1968. A Grammar of Spoken Chinese. University of California Press.
- Cheng, L. and J. Huang. 1994. "On the Argument Structure of Resultative Compounds," MS. University of California at Irvine.
- Chomsky, N. 1957. Syntactic Structures. Mouton.
- . 1965. Aspects of the Theory of Syntax. The MIT Press.
- . 1981. Lectures on Government and Binding. Foris.
- Crystal, D. 1991. A Dictionary of Linguistics and Phonetics. Blackwell.
- Di Sciullo, A. M. and E. Williams. 1987. On the Definition of Word. The MIT Press.
- 丁声树(编). 1979. 『现代汉语语法讲话』商务印书馆.
- Gazdar, G., E. Klein, G. Pullum and I. Sag. 1985. Generalized Phrase Structure Grammar. Harvard University Press.
- Greenberg J. 1966. "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements," in J. Greenberg (ed.), Universals of Language, 2nd ed. The MIT Press, 73-113.
- Grimshaw, J. 1990. Argument Structure. The MIT Press.
- Grimshaw, J. and A. R. Mester. 1988. "Light Verbs and θ -Marking," Linguistic Inquiry 19, 205-232.
- Hashimoto, A. Y. 1971. Mandarin Syntactic Structures. (中川正之・木村英樹訳『中国語の文法構造』, 1986, 白帝社.)
- 橋本萬太郎. 1978. 『言語地理類型論』弘文堂.
- Huang, C.-T. J. 1982. Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar.

- PhD dissertation, MIT.
- . 1983. "Phrase Structure, Lexical Integrity, and Chinese Compounds," in Kim, Nam-kil and Tiee, Henry H. (eds.), Studies in East Asian Linguistics, 38-58. Department of East Asian Languages and Cultures, University of Southern California.
- . 1987. "Existential Sentences in Chinese and (In)definiteness," in Reuland, E and A. ter Meulen(eds.), The Representation of (In)definiteness, 227-253. The MIT Press.
- . 1988a. 「说「是」和「有」」『中央研究院历史语言研究所集刊』第59册, 第1部.
- . 1988b. 「汉语正反问句的模組语法」『中国语文』4期.
- . 1988c. "Wo Pao De Kuai and Chinese Phrase Structure." Language 64-2, 274-311.
- . 1992. "More on Chinese Word Order and Parametric Theory," MS. University of California at Irvine.
- Kageyama, T. 1982. "Word Formation in Japanese," Lingua 57, 215-258.
- . 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎・柴谷方良. 1989. 「モジュール文法の語形成論: 名詞句からの複合語形成」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』, 139-166. くろしお出版.
- Kaplan, R. and J. Bresnan. 1982. "Lexical-Functional Grammar: A Formal System for Grammatical Representation," in J. Bresnan (ed.) The Mental Representation of Grammatical Relations. The MIT Press.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編). 1988. 『言語学大辞典』第1巻(世界言語編). 三省堂.
- ・——・——(編). 1996. 『言語学大辞典』第6巻(術語編). 三省堂.
- Keenan, E. L. 1985. "Passive in the World's Language," in S. Timothy(ed.) Language Typology and Syntactic Description Vol.1, 248-281. Cambridge University Press.
- 木村英樹. 1992. 「BEI受身文の意味と構造」『中国語』6期. 10-15.
- Lapointe, S. 1981. "General and restricted agreement Phenomena," in M. Moortgat et al. (eds.) The Scope of Lexical Rules. Foris, 125-159.

- Larson, R. 1988. "On the Double Object Construction," *Linguistics Inquiry* 19, 335-392.
- Li, C. N. and S. A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese--A Functional Reference Grammar*. University of California Press.
- Lieber, R. 1992. *Deconstructing Morphology--Word Formation in Syntactic Theory*. The University of Chicago Press.
- 李临定. 1980. 「动补格句式」『中国语文』2期.
- . 1984. 「究竟哪个"补"哪个?——动补格关系再议」『汉语学习』2期, 1-10.
- Li, Y. -F. 1990. "On V-V Compounds in Chinese," *Natural Language & Linguistic Theory* 8-2, 117-207.
- Li, Y. -H. A. 1990. *Order and Constituency in Mandarin Chinese*. (Studies in Natural and Linguistic Theory, 19.) Kluwer Academic Publishers.
- 刘月华·潘文娒·故群. 1983. 「实用现代汉语语法」(相原茂監訳. 『現代中国語文法総覧』1988. くろしお出版).
- 陆俭明. 1980. 「汉语口语句法里的移位现象」『中国语文』1期, 28-41.
- 陆志韦·管变初·蒋希文·任建纯·王福庭·许树智. 1964. 「汉语的构词法(修订本)」科学出版社.
- 吕淑湘. 1979. 「汉语语法分析问题」商务印书馆.
- . 1980. 「现代汉语八百词」商务印书馆.
- . 1987. 「说"胜"和"败"」『中国语文』第1期, 1-5.
- 马庆株. 1988. 「自主动词和非自主动词」『中国语言学报』3期, 157-180.
- Mikami, N. 1979. "Serial Verb Construction in Vietnamese and Cambodian," *Gengo Kenkyu*. 79, 95-117.
- 中山時子(監修). 1990. 『中国語離合詞500』東方書店.
- 大石強. 1988. 『形態論』開拓社.
- 大塚高信·中島文雄(監修). 1982. 『新英語学辞典』研究社.
- Packard, J. 1990. "A Lexical Morphology Approach to Word Formation in Mandarin," G. Boji and J. Marle (eds.) *Yearbook of Morphology* 3, 21-37.
- 潘文國·葉步青·韓洋. 1993. 「漢語的構詞法研究」臺灣學生書局.
- Pollard, C. and I. Sag. 1994. *Head-Driven Phrase Structure Grammar*.

- The University of Chicago Press.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar*. Cambridge University Press.
- Ross, J. R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. PhD dissertation, MIT.
- Sapir, E. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace & Co.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de Linguistique générale*, Publié par Bally, Ch. & Sèchéhayé, Ch. A., Payot, Paris. (小林英夫訳. 1972 『一般言語学講義』岩波書店.)
- Selkirk, E. O. 1983. *The Syntax of Words*. The MIT Press.
- 清水紀佳. 1988. 「アフリカの諸言語」亀井孝·河野六郎·千野栄一編著『言語学大辞典』237-438. 三省堂.
- 沈力. 1990. 「中国語の結果補語を取る[V-得]文の構造」『言語学研究』第9号, 58-92.
- . 1992. 「中国語と日本語の受動文の構造について——語彙的受動文と統語的受動文——」『言語学研究』(京都大学言語学研究会)第11号.
- . 1993. 「关于汉语结果复合动词中参项结构的问题」『语文研究』3期. 山西省社会科学院语言研究所.
- . 1994a. 「VP連続の語順と語順の普遍性」京都大学文学研究科1993年度研究報告.
- . 1994b. "On the Passive BEI in Mandarin Chinese," *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*, 172-178.
- . 1996. 「谈汉语的使役句和被动句的结构」『中国語学』第243号, 75-84.
- 施关金. 1985. 「关于助词"得"的几个问题」中国语文杂志社编『语法研究和探索3』北京大学出版社.
- Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. PhD dissertation, MIT.
- Spencer, A. 1991. *Morphological Theory*. Blackwell.
- Sproat, R. and C.-L. Shih. 1993. "Why Mandarin Morphology Is not Stratum-ordered," G. Boji and J. Marle (eds.) *Yearbook of Morphology*, 185-217.
- Stowell, T. 1981. *Origins of Phrase Structure*. PhD dissertation, MIT.
- Ting, J. 1992. "On Non-movement Analysis for Mandarin Chinese Passives," *The 25th International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics*, University of California, Berkeley.
- Travis, L. 1989. "Parameters of Phrase Structure," in M. R. Baltin and A. S.

- Krock (eds.) Alternative Conceptions of Phrase Structure, 263-279.
University of Chicago Press.
- 塚本秀樹. 1987. 「日本語における複合動詞と格支配」『言語学の視界——小泉保教授還暦記念論文集』大学書林.
- 王 力. 1943-1944. 「中国现代语法」商务印书馆(1985).
- —. 1980. 「漢語史稿(中冊)」中華書局.
- —. 1981. 「古代漢語(修訂本第一冊)」中華書局.
- Wang, W. S.-Y. 1967. "Conjoining and Deletion in Mandarin Syntax,"
Monumenta Serica 26, 224-236.
- Williams, E. 1980. "Predication," Linguistic Inquiry 11, 203-238.
- . 1981a. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word',"
Linguistic Inquiry 12, 245-274.
- . 1981b. "Argument Structure and Morphology," The Linguistic Review 1,
81-114.
- 吴为章. 1987. 「"X得"及其句形——兼谈动词的"向"」『中国语文』3期.
- 安井稔. 1971. 『新言語学辞典』研究社.
- 山本清隆. 1984. 「複合動詞の格支配」『都大論究』21号, 32-49. 東京都立大学国語国文学会.
- 由本陽子・正木芳子. 1994. 「Rochele Lieber: Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory」『言語研究』第105号, 110-130.
- 詹人凤. 1989. 「动结式短语的表述问题」『中国语文』2期, 105-111.
- 张清常. 1989. 「上古汉语的SOV语序及定语后置」『语言教学与研究』第1期.
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室. 1979. 「现代汉语词典」商务印书馆.
- 朱德熙・吕叔湘. 1951. 「语法修辞讲话」开明书店.
- 朱德熙. 1982. 「语法讲义」商务印书馆.
- (中川正之・木村英樹編訳). 1986. 『文法のはなし——朱德熙教授の文法問答』
光生館.
- Zou, K. 1993. "The Syntax of the Chinese BA Construction," Linguistics 31,
715-736.